

地域交流研究

2004年度

年報 創刊号

地域交流研究センターの最初の二年間

今泉 吉晴

都留文科大学に、地域交流研究センターが発足して、二年が経過しようとしています。小さな自治体が設置する公立大学である都留文科大学は、その性格からもともと地域との交流はさかんでした。

私自身も、地域交流から多くを得てきたと考えています。私が、都留文科大学に着任したのは1979年4月のことでしたが、私は、1981年1月には早くも、都留市東桂の今宮神社の境内にすむムササビの生態の研究をもとに「むささびのおやこ」（新日本出版社）という絵本を出版していました。今、振り返ってみてもずいぶん急な展開だった、と感じますが、この絵本は、ムササビ研究の成果を地域の人たちに伝えることを目的にして刊行した本で、いわば、地域に生息するムササビのガイドブックであって、研究そのものが地域の人々との交流によって生まれたものであることを伝えたいと私は密かに願っていました。もちろん、この本は同時に、全国の子どもと子どもの心を持つ大人の読者を想定した本であって、全国学校図書館協議会と毎日新聞社が主催する第27回課題図書に選定され、都留市を「ムササビのすむ町」として有名にするきっかけを作ったのですが、いずれにしても、けっして性急に作った本ではなく、私が日々ムササビ観察にでかけて、ムササビがなぜ大木の森と深くむすびつuitたくらしをしているのか、その謎を解くことができたことを記念して、研究者ではなく、子どもと子どもの心を持つ大人の読者に報告するために書いたものでした。私は絵本のプロットを立て、動物画の第一人者である田中豊美さんにくりかえし都留の森に足を運んでもらい、念入りなスケッチを重ねてもらった上で、協同で創作した野心作でした。

つまり私は、着任後わずか一年半ほどで、今宮神社の立派なケヤキの大木の森と、そこにすむムササビに深い愛着を持つようになっていたばかりか、そこでの発見を研究者より子どもたちに伝えたいと考えるようになっていたのですが、私がそうなのは、私の着任以前から活躍していた動物学研究会という学生のグループとその卒業生が、私といっしょに野外研究にでることを何よりも楽しみにしてくれたこと、その野外研究で親しく私と学生たちに声をかけてくれた大勢の子どもたちをふくむ地元の人たちとの交流のおかげでした。

私は特に、神社の境内で遊ぶ子どもたちから、日々夕方暗くなるまで遊ぶ間に見たというムササビのくらしぶりについての話を聞いて、ムササビと大木との強い結びつきを察知していくことに、非常なスリルを感じました。当時私はムササビの野外観察の方法をみだしてすでに数年たっており、日々のムササビ観察から豊富な経験的知識を蓄積し、ムササビの生態についてしっかりしたイメージを持てた実感がありました。ところが私は、私の観察の常識を越えて意外な事実を語る子どもになにげない観察の事実（発見）に驚かされたばかりか、時には容易には信じられない事実さえ聞かされて、衝撃的さえあったのです。そして、地域の人たちが語ることが意外であればあるほど、その衝撃から私は深い理解に到達できました。研究者が経験できることは限られている、地域の自然の研究は、多くの人々のくらしの経験によってたえず検証され、補強されることが大切だ、と私は思いました。いや、それ以上に、地域の子どものふだんの自然経験を結集することで、第一級の研究ができる、といったふうにさえ私は想像と空想の輪をいろいろしていました。そのことは、地域の研究者でもある過去の偉大なナチュラルリスト、アーネスト・トンブソン・シートンやヘンリー・ディビット・ソローの思想が私を理解する契機をつくりもしたのです。

一方で、このような地域の人との交流は、教員や学生の日を大きく見開かせ、学問の専門分野を越えた人間的な交流へといざなうものであって、そのことの方がよりいっそう大切だといってもいいでしょう。私は地域のムササビを研究する（地域の自然と交流する）ことを通じて、地域の人々と交流することの大切さを感じとっていましたし、学生は自分のムササビ観察の成

果を地域の人々や友人に雄弁に語るように変わっていました。シートンやソローの思想にも、地域交流を何よりも楽しみにする考えが多く含まれています。このように都留文科大学の教職員と学生はさまざまな場面で、地域交流を重ねてきたはずで、私も個人的には、多くの感動的な交流の事例を聞いています。

とはいえ実は、都留文科大学の地域交流研究センターは、過去に多くなされてきた地域交流の意義について活発な議論を重ねた上で設立されたわけでは必ずしもなく、今、私がここに書いたような地域交流の事例について語り合うことはむしろ設立後のこの最初の二年間の、地域交流研究センターの会議の場などで行われてきたことでした。もちろん、地域交流研究センターの会議は多くの議論すべき課題をかかえて、多忙をきわめ、一つの大きな課題を15分といったような時間の制限の中で議論しなければならないといった有り様で、結論もだせない課題をたえず先送りせざるを得ず、地域交流の事例について語り合うといっても、これまた大きな制約の下でのことでした。

以上の文脈から言えることは、こういうことです。地域交流研究センターの運営にかかわる研究者は八名ほどですが、それぞれ専門を異にするこれら研究者が地域交流の意味について語り合えたということ自体が、地域交流研究センターの発足後二年間の最大の成果の一つでした(地域交流センターにかかわる教員はすべて学科に属する兼任の教員で、センター活動にさける時間とエネルギーがそもそも限られています。しかし、いずれにせよ、無限に広い世界に対して、私たちの経験の世界は限られているのであって、だからこそ研究であるわけです)。もちろん、センターにかかわる研究者はそれぞれにセンターの部門や研究プロジェクトに属して、その研究テーマを追求しており、実践的かつ学問的な成果はあげるでしょうが、そのこととは別に、異なる専門領域で過ごしながらかセンター活動を通じて、それぞれの専門を越えて、地域交流についてある共通した価値を認めていることに気づいた、と言えると思います。その気づきは大きな喜びでさえありました。そのことが、この年報にある『フォーラム』に結集しました。そこから、さらにセンターがあるまとまった提案なり研究成果を生むにはさらに検討が必要ですが、報告者のそれぞれが地域交流から一定の考えに到達しており、『フォーラム』から成果を得た、といえます。

すなわち、8名という研究者が、共通に論議することができるようになってきていること、三つの部門が、共同することによって、交流のあたらしい可能性がみえつつあること、そしてそれらの土台の上に、2005年度から地域交流研究センターとして、共通教育の授業を担当できるようになった、ということが、発足して二年の成果の一つだといえます。この二年は、今後続くであろう交流研究の長さからいえば、ごく短い期間になるはずとはいえ、ちょうど私が都留文科大学に着任してわずかの期間に大きな変化を経験したように、地域交流の特性からいって、急ではあっても性急ではない、ある着実な前進であったのではないかと私は考えています。

では、参加する研究者が共通に論議することができるようになってきていることとは、いったい何を意味するのでしょうか。また、地域の人々との交流の意味の再認識と、新たな展開の可能性が見えてきたとは、どういうことでしょうか。私は、人は身近な世界である地域に親しみ、深い愛着と関心を育む性向を持つものであって、たえず得られる無数の“かすかな徴候から全体をとらえる”というイタリアの歴史学者カルロ・ギンズブルグの認識論、“推論的範例(パラダイム)”に注目する者ですが、この絶えず変転する身近な認識世界という、普遍の対極にあるかに見える課題を解明していくことこそ、地域交流研究センターの課題になっていくことでしょう。

このことと関連して、それこそ性急な世界史の奔流の中にあつて、ともすれば見失いがちな自己と世界の結びつきを、私たちは身近にある地域との関係の問い直しとによって、再生していくのであって、地域にあつて空気や水のように当たり前に見えるものほど実は人と生きものにとって大切だ、ということに気づく術と技とを身につけていくことが必要でしょう。地域には、それらの術と技とを身につけたくらしの達人が大勢おられ、またそれらの術と技のあり方をだれもが模索しています。都留文科大学の地域交流研究センターは、小粒ながら、それら地域交流のあらゆる領域に目を向けていきたいと願っています。この年報は交流センターが日々を過ごした、いわば日記であり、模索の記録としての意味を持っていくはずで

目 次

巻 頭 言 今 泉 吉 晴

----- 第一回地域交流研究フォーラム特集 -----

基調講演

ソローは地域を開く熟達のガイド 今 泉 吉 晴 1

ゲスト講演

地域交流研究センターに期待する 佐 藤 一 子 12

ゲスト報告

熊とまちづくりとコンセルヴァトゥール 加 藤 春 喜 19

プロジェクト報告①

「フィールド・ミュージアム」と『フィールド・ノート』の実践
. 北 垣 憲 仁 23

プロジェクト報告②

地域からの学び・実学からの学び
ーMotto!学生地域活動支援プロジェクトにみる地域からの学びの可能性ー
. 水 谷 衣 里 34

プロジェクト報告③

都留の近現代史資料調査 高 岡 裕 之 46

プロジェクト報告④

「総合学習」開発と学力問題 佐 藤 隆 48

都留文科大学地域交流研究センター 2003年度活動報告及び今後の課題
. 森 博 俊 58

フォーラム参加者の声 75

編集後記 75

ソローは人と自然を結ぶ熟達のガイド

都留文科大学 教員 今泉 吉晴

はじめに

私は都留文科大学地域交流センターで、フィールドミュージアム部門を担当しながら、センター長をしている今泉です。今日は、交流センターとして、また大学として初めて地域の方々、卒業生の方々と一堂に会して交流する機会をもてたことを、大変ありがたく思っています。また、私は個人としてももちろん、このような形で地域の方々と交流できる機会を持てたことをうれしく思っています。お集りのみなさまに、厚く御礼もうしあげます。

私は、都留に移り住んで27年、地域の人びとと自然との交流で、やさしく育てられてきたという実感を持つのですが、それがどんなふうであったか、きちんとお伝えする機会がなかなかありませんでした。私は今日のこの機会を、そのような私にとっての、また、私の研究室の学生にとっての、こうであったという報告の機会ともさせていただき、そのことをもって、交流センターというものを考える一つのヒントにさせていただきたいと考えております。

今日お見えの方々は、私が存じ上げている方がほとんどです。かしこまって話しをするのはてれくさいのですが、地元の方々との交流も、こういう機会がないとなかなか実現しません。また、中には、なぜ私が都留という地域をうろうろしてるのか、一体夜な夜な何をしているんだろうとお考えの人もいると思います。あるいはもう都留から去ってしまったのではないかとと思っている人もいるのではないのでしょうか。

今日は、そうした私のこれまでを振り返りながら、「地域交流研究センター」の意味を考えていきたいと思います。

「あたり前の自分」に戻る

私がここに来たのは二十七年前ですが、そのころの自分と今の自分は大きく変わりました。当初は、動物学を志す者として都留文科大学に来て、このすばらしい景色を見て胸が高鳴ったものでした。しかしそのときに考えていた動物学と、今やりたいと思っている動物学とは大きく異なっています。むしろ今は、「やさしい自分」「あたりまえの自分」にもどったと言えましょう。来た当時は、「すごい発見をしてやろう」と思っていたのですが、今はぜんぜん違います。

私がやってきたことを、センターでは「フィールド・ミュージアム」部門として位置づけています。「都留市の自然と出会うことのできる、生きたミュージアム」については、『地域交流研究センター』通信の二号にまとめました。この大学に着任してまもなく、私は「ムササビを守る会」を作りました。当時、ムササビが神社に住みついていることに気づき、ムササビの観察を始めたのです。それはとても意外なことでした。というのも、それまで、ムササビといえば、全山、

すばらしい森に囲まれているようなところに住んでいるものだと思っていたからです。ところが、市内の神社のごく狭いところにムササビが住んでいたのです。それをするためには、ムササビも工夫をしてました。エサとしてけやきの皮をかじるという工夫です。しかしこのことは、神社にしてみれば、大事なご神木をかじる「悪いやつ」ということになります。最初、土地の人たちは、鳥のせいだろうと思っていたようですが、私たちがムササビであることをつきとめると、そのムササビを退治しようという流れになっていったのです。

私はこの時、「自分の立場が一気に変わるな」という覚悟をしましたし、事実そうになりました。私は、まず地元の人と一緒にムササビを観察して、ムササビたちがなぜここに住んでいるのか、なぜけやきをかじらなければならなかったのを理解してもらった上で、退治すべきかどうかを話し合いたいと思いました。市役所の社会教育関係者もなかに入って、地元との話し合いを何百回と繰り返しました。私はこの経験を通して、地域と関わることの大きな力と、学問の狭さを実感することになりました。

こうした話は、人によってはとるにたらないことかもしれません。しかし何気ない地域の出来事が、人を変え、対立も含め、一緒に考える協同もつくることがあるのです。そして「地域交流研究センター」とはもともとそういうものであると考えています。

都留の自然に親しむための本づくり

ところで、本日は、この部屋のむかひに書籍販売とフィールドミュージアムの展示コーナーを設置しました。そこに「ムササビの親子」という本があります。都留の材料で本を出したのはこれが初めてで、それ以後、二十冊くらい本を作ってきました。一見、都留とは関係のないように見える本もあります。例えばD. B. ジョンソンの『ヘンリー 山にのぼる』（福音館書店）はイングランドの話です。また、ヘンリーとは、ヘンリー・ソローのことです。しかし私は、イングランドでの自然の楽しみ方が、都留での自然の楽しみ方につながっていると考えています。この本は、ジョンソンが『ウォールデン』の出ってくるほんの二行ぐらいに着想を得て作った本ですが、それも、都留で私自身が楽しむためにどうしても読まなければならなかったものです。そういうものを私は本にしてみました。それらを通じて、ますます都留の自然と親しむことができるようになっていったのです。

しかしこのことを、私は主に大学の外でやってきました。私は、全面的に都留の自然の中で暮らしたいと考え、これまでも、三回ぐらい「大学を辞める」と言ったことがあります。都留の町と、そして自然に親しみたかったからです。そのために大学にいる時間もったい、そんな思いからでした。地域交流は、単に地元のまちとつきあうというだけでなく、世界の古典を読むといった活動も含まれていますから、そのための十分な時間が必要だったのです。私たちの大学は、親しく地域と親しむことに欠けています。このことは、研究を職業とするものにとって、傷なのです。こどもにとっても地域や社会、自然と絆を失うということは、傷なのです。

都留での二十七年は、私にとって、人間的なつきあひを通して、再生し、自分を取り戻す作業でした。それはほんのささいなことでも可能となります。ただし自

然や人々に日頃から丁寧に関心をむける必要があるのです。ところが私たちの多くがこどもも含め、そうした世界から遊離した場所にいます。後で詳しく述べる『ウォールデン 森の生活』の著者、ヘンリー・ソローは、ボストンという大都会のハーバード大学を卒業し、故郷のコンコードに帰って、生涯をそこですごしました。それは彼が今を大事にして、自分をゆたかに成長させたいと考えたからです。これはあたりまえのことであって、人間としてはごく自然の願いでしょう。しかしそれを実現するは案外難しいところでもあるのです。ですからソローは、百何十年前、これを書いて、自分の決意を表明しなければならなかったのです。当時でさえ、それほど容易ではなかったということがわかります。私たちが、なかなか決意がつかないのも、そういう暮らしに全面的に切り替えるのが難しいからです。私になぜ大学を辞めるのかという理由も、こうしたところにあります。逆説的になりますが、大学をやめることによって、一層地域交流の仕事をやる時間を生み出すことが目的なのです。

今日、お集りの方々は、おもに都留という地域に住まれている方々が多いのですが、今回の会合の趣旨に関心をもたれ、中には遠方からいらしている方もかなりの数おられます。あとで紹介される方も多いので、ここでは私の話と関連して、お二人だけ紹介しますと、静岡市からお見えの児童書専門店“ピッポ”の伊藤さんご夫妻がおられます。今日はセンター特別非常勤講師の北垣さんといっしょに本の展示コーナーを作って下さいました。

ちょっと異色のコーナーですのでこの会の中でどんな役割をになっているかを説明させていただきますと、このコーナーは交流センターのフィールドミュージアム部門の紹介になっています。また、本が置かれているのは、私の本などがこのあとで紹介しますとおり、全国で売られています、すべて都留市の自然の魅力となぞの解明を伝えるために書かれたもので、フィールドミュージアムのガイドブックになっているからです。

都留の自然のガイドブックとしての『ウォールデン 森の生活』

去年の四月に出版されたヘンリー・ディビット・ソローの『ウォールデン 森の生活』も、私は都留の町と森のガイドブックとして四年余りの歳月をかけて訳しました。私は、今は出版社に頼まれるから本をだすのではなく、自分が伝えたいことがあるから出版社を選んで本を出す、という本の書き方をしています。『ウォールデン 森の生活』は、明治時代から訳され、同じ本が19冊の日本語訳として、さまざまな出版社から出されています。多くの哲学書などと同様、誤訳だらけ、読めない文章だらけの本として有名です。私も学生時代に書名に惹かれて読んだのですが、読めませんでした。そこで私はある大手の出版社からこの本を出すことを考え、そのとおりに実行したのですが、それはその大手の出版社が一番、私の訳を真似した訳をだしそうだと思ったからです。そのように私はさまざまな戦略を考えて本をだして、その為には嘘も平気でつきますが（それは出版社が私よりもっと嘘つきで、私はそれに対抗しているだけです）、そのようにしてまで、なぜ本を出すかと言えば、私が都留の町と森と親しくし、深く知るのに絶対に必要な本だからです。私はこの本を訳すためにくりかえし、おそらく100回以上読みましたが、おかげで都留の町と森をなるほどと、知るところが非常に多かったのです。この本なしには私は都留を今のように深く愛することは

なかったと思います。それは地域と親しむことで見えてくるのが、山のように書かれていたからで、都留に限らずあらゆる暮らしに役立つ本、つまりサバイバルの本なのです。でも、私は都留と親しくしたかったし、都留の人びとの魅力はどうして生まれるのかを知りたかったので、それを知らせてくれた『ウォールデン 森の生活』は、かっこいい米文学の古典ではなく、私の都留のガイドブックなのです。ということはすなわち、都留のすべての人にとっても必要な本であり、ガイドブックです。『ウォールデン 森の生活』は、そのように考えて出した最新の本の一つです。

なぜ、ニューイングランドという美しい地球上の地域で出版され、アメリカの若者の美意識を改めたといわれる名著が、都留のガイドなどといえるか。自分がすむ地域について『ウォールデン 森の生活』こそもっとも大切な本、と言う人間は、おそらく日本にはほかにいないでしょう。でも、それはこの本をくりかえし読んでもらえば分かります。ここでは、この素晴らしい本の紹介のために、まずは二例だけあげましょう。なぜ、都留の町と森のガイドブックかというのと、私が解明したい最大のなぞ、都留の人びとの素晴らしさのなぞをとく、ヒントを与えてくれるからです。私は動物学者ですが、一番知りたいのは動物がどう育つか、です。動物がどう育つかを知るには、まずは人間がどう育つか、を知らなければなりません。『ウォールデン 森の生活』にはこう書いてあります。

文字ばかりを読んでいては、世界のあらゆる物と出来事が、じかに私たちに語りかける言葉であることを忘れます。物と出来事こそが最高に豊かな言葉であって、私たちの標準語です。p.142 4-2) どれほど高度な勉学や研究も、私たちが身の回りにある物と出来事に絶えず気を配る必要にとって変わることはできません。p.142 4-3) 私は目の前にある今という最高の美しさを、手の仕事であれ、頭の仕事であれ、ほかのことの犠牲には使われない、と思いました。p.142

私たちは、本当の意味での個人としての自由を、近代、現代と進むにつれ、どれほど失ってきたのでしょうか。特に私が育ってきた数十年、失いっぱなしでした。ソローはボストンに近いハーバード大学を卒業するのですが、生まれ故郷の小さな村、コンコードを離れたたくありませんでした。コンコードにもどり、毎日少なくとも四時間を散歩に使い、森と村を楽しむ暮らしを送りました。分業を断じて拒否し、何でも自分の手を使ってしました。私はここに、意図せずに自分を高く育てている地域の人びとの暮らしの謎をとくかぎがある、と考えます。

もっとも、私がこの本を都留のガイドブックというのは、そのような人間の問題について書いてあるからだけではありません。自然とふれあうことの大切さを、この文章は直接にはいっているわけです。それはどんな具合かと言うと、こんな風です。

都留の自然に親しむ者にだけ見えるもの

《私は、散歩していて、虹の橋のたもとに入ったことがあります。私をとりまく大気層の全体が、まぶしく輝く虹の光で満たされ、あたりの草木の葉が虹にそまりました。p.255》

この文章を読んで、私は、この本は、都留で本当に暮らしにしか訳せない、と思いました。

このソローの経験を語る文章については、アメリカ文学界で古くから論争があ

ります。ジョン・パローズというネイチャーライティングの元祖といわれる著名な作家がアメリカにいたのですが、この人が論争の火付け役で、こういつています。「虹を見ている者が、虹の橋のもとに入るなど、虹の原理からあり得ない」。というわけで、これはソローの不正確な記述、あるいはかっつな空想と解釈する人が多いのです。でも、これはパローズがアメリカの行き過ぎた実証主義、誰もがデータで示せるものしか事実ではないというアメリカの科学のゆがみを身につけてしまったゆえの反映にすぎません。私たちは自分が受けた科学教育の強い弊害を持って生きます。私も、このような文章を読むと、科学的にはどうか、と机上の空論にふけてしまうのです。それは悪いことではありません。大切なことです。でも、それでいきるなら、人生を誤るでしょう。

私は楽山で、西日が都留の谷を矢のようにつらぬいて作る絶妙な虹を見たのですが、あたりの森が虹色にそまりました。でも、この虹色はよく散歩し、自分の感覚をテレビや新宿のネオンから守り、するどく磨かなければ見えません。そのようにソローは、自分の感覚がどのようなものかを書き、見える人には見えるときちゃんと書いているのです。

でも、私がここでいいたいのは、東京にすんでいたのでは、なかなか『ウォールデン 森の生活』は、実感をもって読めないし、訳せない、ということです。そこで、私の今日の基調講演はソローの『ウォールデン 森の生活』をガイドブックとして使い、ソローといっしょに地域交流の意味を考えてみたいと思います。

交流センターの発足－「何をいまさら」

交流センターが発足しまして、二年がたとうとしています。

先に申し上げたとおり、大変小粒な交流センターでして、地域に関心のある教員が研究プロジェクトをだしあい、教育相談室、フィールドミュージアムなどの活動の部門をつくり、それらと地域をつなぐセンター通信というものを発行しまして、地域に開いた窓口をもうけ（とても狭い窓口ですが）、それら全体を交流センターとして、活動を二年間つづけてきました。今、専任の教員と職員がいないと申し上げましたが、ただ唯一センターの強みは、今日も活躍していますが、大学が、センター開設と同時に特別非常勤講師という制度をつくり、センターの専門職員として、お二人に重要な担い手として働いてもらっております。のちほど、お二人からはそれぞれの専門分野について、お話を伺えると思います。

私たちの大学のセンターは、このように小粒のセンターですが、私はちゃんとした成果を生むと確信しています。といいますのは、今日は、みなさん、お互いに顔見知りで、私もほとんどの方を個人として存知あげているから個人名であえて申し上げるのですが、私が山小屋や地域のあらゆることでお世話になっている十日市場の中野新作さんに、交流センターができそうになった二年前に「いよいよ交流センターができますよ」とお伝えすると、「何をいまさら」といわれてしまったからです。

「何をいまさら」とは、私も思わず笑ってしまったのですが、中野さんは、今までさんざん交流してきたではないか、といわれているわけです。なんで格好をつける必要があるんかい！中野さんは、今日は出席するけどけっして発言されないそうなので、私が代わって、中野さんのいいたいことを忘れないうちに申し上げてしましますが、「何をいまさら」とは、まったくその通りなのです。都留市

民のかたがたは誰もがこの言葉に共感されるでしょう。学生も中野さんの世話になって、どれほどすばらしい卒論が、いったいいくつできたことか。でも、卒論を書いた学生は中野さんのもとに卒論のコピーくらいは差し上げているかと言うと、そうではありません。大学が起こしたトラブルをいったいどれほど、そっとかげから解決してくれたか、それに対して私は、あるいは大学は何をしたか、といえば、それはもう酷いもので「何をいまさら」です。

しかし、まったく申し訳なくそのとおりであっても、「何をいまさら」ということは、つまりは、大学は地域の方々と交流してきた実績がすでにたくさんある、ということも中野さんはいつてくれています。交流センターがあろうとなかろうと、交流はあったのです。

地域の偉人と出会う

地域の偉人とあうことが、どれほど人を育てる力になるか。ソローは『ウォールデン 森の生活』の中で、地域には、聖地もあれば、ユートピアも、天国もあり、偉人もいれば、天才も、英雄もいる、あらゆる世界の要素が存在する、と確信をもっていっています。このソローの言葉を直ちに本当だ、とうなずける人はいるでしょうか？おそらく年配の方はそう思われると、私は推測します。私は本当だとひざを打ちました。私は都留のくらしから、学会より都留の人と話す方が遥かに知的な経験になると、思っていましたし（何しろ私は学生の時、すでに学会発表を何回もした学会好きでしたが、都留にくらして学会は退屈で行かなくなっていましたので）、すぐにソローは本当のことをいっている、と理解できました。

自然は人がすむ町から遠く離れて、ひそやかに栄えています。地上で天国を語るとは！自然への冒険です（p.251）。

まったくそのとおり、私も都留の森を天国と感じて幸せです。しあわせすぎて、世の中がどうであろうと、森に入れば天国だ、と勝手に思ったりするくらいです。でも、大切なのは天国を感じる力でしょう。それは簡単なことなのに、たいてい人は感じません。私は町では真夜中に家の屋根に登ってみたいくなくても、まさか登れません。でも、森なら何をするのも自由です。ものすごい開放感があります。美しくて、自由、これをユートピアとか、天国とかと呼ばずに何をそういのでしょうか？どこにもない天国を想定して何になるのでしょうか？そのことはこのソローの絵本を見てもわかるでしょう。それが分からなければ、この絵本は読めないのですが、子どもは分かります。

つまり、都留文科大学の学生は、そうとは知らずに地域の英雄や偉人、天才、そして天国とであって、大学では得られない元気をつけているのです。都留の自然を思い起こして、会社づとめをがんばっている、という卒業生も大勢います。

このように、私たちの大学が地域の自然や、住民の方々、それに卒業生の力で成り立っていることはあきらかか、すでにさまざまな形の多くの交流の実績があります。私たちの大学は、大田元学長の言葉でいえば、市民が作った大学です。ただ、そのことの自覚が、じつは肝心の大学に十分あったとはいえません。そこで今さらながら地域交流センターができたのですが、センターがなくても、市民の大学であることを感じ取る力が大学に求められています。すなわち、すでにあった交流経験をセンター活動が明らかにし、自覚し、生かすことで、未来を切り

開くことができる、と考えることができます。

今の問題とこの二年間のセンター活動の関係はどうなっているか、といえ、センター通信の発行という一見、ただの報告集づくりが、この関係を捕らえる大きな成果をあげました。これは、畑編集長と北垣編集総括者の功績によるところが大きいのですが、何より、すでに交流があったということに負っています。センター通信の意義については後に報告があると思います。

地域の自然と人々の暮らしにひそむ創造性

なぜ、都留という地域、あるいは別の地域でも同じでしょうか、地域の自然と人の暮らしの中に、創造的ななにかがあるのか、それはいったいどこからくるのでしょうか？それは人間が人間らしく育ち、自然が自然らしく育っていることによっているでしょう。一本のケヤキの木から毎年何万と言う種子が散って、地面に落ちます。その種子は、どう育つでしょうか？私は学生と一っしょに大学のキャンパスに落ちた種がどうなるか、観察します。道やコンクリートの上に落ちた種子はみな死にます。土の上に落ちた種子も、あまり芽生えてきません。それでも、平方メートルあたり数十本は双葉が生えてきます。それは四月のころのことです。でも、双葉を見て、去年のものはあるかと見回せば、一本もないことが分かります。つまり、一年生きる者がいないのです。では、どうなるのか、夏あたりにはほとんど死に、最後はキャンパスの手入れをする人の手ですべて抜かれてしまいます。では、森の中ではどうか。森ではケヤキの木の下で平方メートルあたり数百本の種子が芽生え、まるで芝生のように生えます。それが夏の頃には大人の木の陰になって、力つきて枯れていきます。

ただ、あたりを見回せば、一年たった幼樹、二年生の幼樹と、年齢ごとに生き残った者があり、それらはたまたま大人の木の枝がおれたりして、木漏れ日があたるところに生えたものと分かります。そして、中には大きく育った木があり、それは人間が区画した境界に生えた木であり、かつて日当たりがよかった場所のものに分かります。つまり、大木になった木は無数の幼樹の中から偶然の幸運をつかみ、幸運の経験をかさねて来た木の中の英雄と分かります。一本一本が個性的なのですから、名前をつけてもいいのです。おそらくソローも同じように木を見ていました。こう書いています。「私は学者のもとを訪れる代わりに、心して偉大な木のもとを訪れました。そうした木々こそ、私が夏も冬も一年を通じて訪れた、美しい思索の殿堂でした」(p.255)。

大学のキャンパスにケヤキを育てる環境がないのに対して、森にはあるということ象徴的といっているでしょう。人間も一人一人が、無数の生命を食べて成長した大木以上の大木です。だとしたら、あまりに人生というものを気弱に生きているのではないのでしょうか？

私はこのように植物の暮らしを見ていくことを、大学の草地学実習で習ったわけではありません。私は都留の農家の人たちが、農家の庭や畑を毎年同じように世話して、まったく同じに作物をつくる技に感心しました。私の畑はどんどん森になります。私はそれを楽しんでいるのですが、私の畑が森になる間、私がスグリを分けてもらい、今ではものすごく増えていくつもの生け垣になっているのに、もとの農家のスグリの株は、まるで最初に見た時と同じです。そのような毎年決まった形に植物を育てる農家の人や庭師の技に私は、未来を見通すある眼力を感じ

じます。その眼力で自然を見ると、私はケヤキを今、お話ししたように見ることができます。地域交流を大学が必要とするのは、そのような人びとが伝えるスケールの大きな見通す力、わざに学ぶことが必要だからです。学問の訓練によって矮小化した頭脳に一撃をあたえなければ、大学は救われないでしょう。このことは地域の学校も同じことです。

私たち大学教員の頭脳が学問的訓練によって矮小化していることは、学生の卒業指導をするさいに顕著に現れます。私たち研究者は、じつにつまらなくテーマの設定をするのです。学問的に問題をとらえられるようにテーマをもっと小さく、もっと扱いやすくしろ、と口をすっぱくしていいいます。学生はそれがなかなかできません。特に学者になるつもりのない学生には、なぜそんなことをしなければいけないのか、まるで理解ができないでしょう。私たちは野生のケヤキを盆栽にするようなことばかりしてきました。それが大学が亡びる理由です。大多数の大学は、こうして学生をダメにしています。ソローはこうっています。「つまり学生は、大学で、専門に凝り固まった教授の衛星に成り下がるばかりです。大学でこそ、一滴の酢の中であらゆる無数の微小な怪物を観察できます。でも、観察にはげむうちに、肝心の自分が怪物たちの中にさまよいこみ、食われています」(p.67)。もっとも、私はここで大学の教育指導の悪さをいいたいのではなく、こりかたまった頭脳の問題をいっています。

じっさい私個人の、教員としての私の都留での暮らしを振り返ってみますと、これもまた非常に意味深い地域交流の上に学問的な成長をしてきたと、つくづくと思返されます。私は都留文科大学に着任してきた1979年には単なる動物学者でしたが(動物学者ともいえない、動物学の聞きかじりでしたが)、今の私は動物学の枠に捕われない、自由な研究者になっています。この研究者というのは、ソローがいう「もし、人が何のために生きるかを、もう少し考えて生きるなら、誰もが本当の観察者になり、研究者になるでしょう」(第三章の冒頭の文章、p.127)という意味での“研究者”で、都留文科大学の先生が研究者というわけはありません。ここにいらしている、みなさんが研究者です。

私の場合は、自分のことですので、成果をそのまま実感できます。

実は私はそのことを、七年前に社会学科で出版した本『地域を考える大学』(1998年)に書かせていただきました。この本は当時の社会学科の教員12名の協同執筆で、それぞれ一章を書き、したがって12章からなるもので、私は第二章「身近な自然に驚きを発見する生態学 — ムリネモと出会った都留の森で私と学生が考えたこと」を書きました。

この論文で、私は現代の生態学は自然管理の技術になっており、私が目指す学問とは違う、という意味のことを書きました。そして、私が目指す学問は現代の生態学を越えてアメリカの偉大なナチュラリスト、アーネスト・トンプソン・シートン(100年前に活躍しました)につながり、アメリカの詩人でナチュラリスト、ヘンリー・ディビット・ソローにつながり、さらに、フランスの貴族で大農園を経営したナチュラリスト、ジャック・ロジェ・ピュフォンにつながり、アリストテレスの猟師の科学につながると、書きました。自分でも大胆すぎる主張で、動物生態学の創始者、エルトンも、植物生態学の創始者、クレメンツも、現代のあらゆる生態学者を無視するなどあまりに無謀と思いますが、私には確信があります。それは現代という時代の利潤追求が極限にまで近づいたことによる病理と関係しているからです。

というのは、昔はどんな文化でも、生きものを殺すのは罪深いこととされてい

たのに、近年は科学の為なら殺して良い、殺すべきと変わり、そのために科学は生体実験の科学になってしまったからです。この科学の考え方のためにどれほど多くの人が自分の感性をだめにしたか、はかり知れません。化粧品の開発のためにいくらでも動物実験していい、と多くの人が判断するようになりました。

地域の人々との小さな約束の意味するもの

現代こそ、自然科学は殺さない科学になるように注意深くなければいけないのに、そんなことはまるで考えない雰囲気です。もっともここでは、この問題を詳しく扱いたいわけではありません。ただ、私は殺さないでそっと見るだけの研究をしたいと思いました。そのような研究は時代をはるかにさかのぼらなければありませんでした。でも、私は都留の人びとにムササビ保護を提案したのであって、その責任の上からも、殺さない科学をめざさねばなりませんでした。私はこのような親しい方々との小さな約束が大きな未来を開くことに注目しています。

そしてまた、私はそこから着想して、ムササビの観察法をはじめ、モグラ、野ネズミ、リス、カワネズミ（これは北垣さんとの協同研究ですし、他も学生との協同研究ですが）、などを自分の目で、正常な行動をとるのをさまたげずに観察する方法を創案してきました。そうしたことを私は七年前に、『地域を考える大学』に書いています。

私の方法は、自分でいうのもおかしいのですが、考えてみれば、じつにロマンチックな方法です。人間はこれまで、生きものを殺すことで研究してきたのですが、殺すどころか飼うことも動物をダメにすると知ったのです。ムササビを都留の神社で見ます。すると、何の為に滑空しているのか、その謎が解けてきます。そのことを私は『ムササビ』と『空中モグラあらわる』に書きました。

自然に生きる動物は人間に多くを教えてください。でも、飼われているムササビは何を教えてくださいでしょうか？多摩動物公園に都留の子どもたちは遠足で行きます。ムササビを見ます。動物公園で飼われているムササビは都留の子どもに何を見せてくれるでしょうか？なるほどおかしな姿をした動物がいる、と教えてください。それにも意義があるでしょう。でも、動物公園のムササビは踊りも見せてくれるのです。それはこんなぐあいの“盆踊り”です。両方の手を右にパッとだし、ひっこめて、左にパッとだし、これを休みなくつづけます。これを子どもたちは「キャッ、カワイイ」といって見っていますが、いったい何が伝わるでしょうか？ただ、あやまった認識を得るだけで、脳を汚染するのではないのでしょうか。

たとえば、ここに二つの穴が開いたクルミがあります。アカネズミがあけるのですが、アカネズミを飼ってクルミを与えると、こうは開けないのです。へたくそにかじり、それも二つの穴をあけるように進歩しません。ところが野外では下手な食べあとはみつからないのです。つまり野生の元気がなければ、アカネズミは上手にならない、という事実を発見しました。それが私が野生のくらしを自分の目で、野生動物のくらしをじゃましないで観察することが本来の観察だと主張する原点です。

これらはかつて自分の目で自然を見た、私がつながると申し上げた偉大な科学者たちにつながる方法です。ただ、彼らは、彼らの時代の豊かな自然にめぐまれて、特別な工夫なしに、自分の目で自然を見ることができたし、見た人から教え

てもらうことができました。民衆の知恵に謙虚に接したことが、彼らの学問を曇らせなかったのだと私は確信をもって述べることができます。

実は私は七年前に書いたものを読み返して、今はもっと分かってきたぞ、とお伝えしたかったのですが、実はこのように七年前にすでに基本的な姿勢を決めていたと分かりました。この七年間で分かったのは、なぜ、地域の人びとの知恵や技が優れているか、ということの理由です。年ごとの季節の変化を見通す力、さまざまな生きもののくらしと自在にせつする力（これはおそらくもっと昔の人はとても優れていたでしょう）、森の木々の長い年月の変化を見通す力、そして、率直にものごとを受け入れ、楽しむ力、といった人間的な能力に優れている、ということが、魅力なのだ、学者とのちがいなのだと分かってきたことです。

このことをソローは、先に紹介した言葉ですが、「文字ばかりを読んでいては、世界のあらゆる物と出来事が、じかに私たちに語りかける言葉であることを忘れます。物と出来事こそが最高に豊かな言葉であって、私たちの標準語です」(p.142) といっているのです。そして、こうつぶやいています。「どれほど高度な勉学や研究も、私たちが身の回りにある物と出来事に絶えず気を配る必要にとって変わることはできません」(p.142)。「私は目の前にある今という最高の美しさを、手の仕事であれ、頭の仕事であれ、ほかのことの犠牲にははいられない、と思いました」(p.142) と書いています。

都留の自然に親しんでわかったこと

さて、私は都留の人たちの案内で、都留の自然と接してきました。そこで分かってきたことが大きく三つあります。一つ目は、動物のくらしが分かってきたこと。動物と親しく接することができるようになったこと。私は動物があらわれても、じっとしていることができるようになりました。二つ目は、自分が変わったこと。森とつきあえる自分が10年以上かかってできてきました。どんな人も10年かけなければ、なれない森とのつきあい方がある、と知りました。そして、三つ目が、ここ100年来と思われる自然の大きな変化の実感です。この10年で大型動物の分布域の拡大が決定的になりました。自然と人の社会との関係は歴史的であって、実験科学のように再現可能ではありません。自然界には強大な力がはたらいて、人間の干渉をはなれて、今、私たちが経験したことのない新たな事態が生まれています。この問題にどう対処するか、昨年来のクマ騒動の管理の思想ではうまくいかないでしょう。ここにも歴史を見通す眼力と、地域環境計画をみなで考えなければならぬ現実があります。地域交流センターが役割をはたすべき大きな課題の一つと私は考えます。

日本のいびつな経済発展の結果として突如あらわれた大型哺乳動物の世界。このあたらな事態に対して、日本のあらゆるセクターが手をこまねいているように見えます。それはそもそも日本経済が効率を追求するあまり農地と山林を切り捨て、化学肥料に頼ってきたことと密接な関係があり、地域環境計画なしには、まともな対応ができない問題だからです。私たちの町から織機の音が消えたことと、同じ力の結果が大型獣の復活です。私たちの大学は今、ようやくビオトープを図書館前につくり、それで事たれりとしていますが、とんでもない思い違いです。ビオトープをつくるのなら、それは地域の農業を変える運動と結びついていなければ、何にもなりません。自然は自然、農業は農業では何も解決しないのです。

それが現在の大型獣の問題であり、ペットの問題なのです。

このような地域を越えた問題は、国の経済政策や歴史に学ぶ必要があり、地域の交流をうながすものです。私は野生動物を人間と同じ地域に生きる共同体の一員と考えたシートンの考えに学ぶべきと考えて、ここ数年、シートンを紹介する本を書き、また、シートンの著作である動物記の翻訳にはげんできました。地域から発してこの関心がどのような経過と結論を導いたか、その紹介はまた別の機会にゆずりたいと思います。

「地域交流研究センターに期待する」

東京大学大学院 教育学研究科 教授 佐藤一子

今日は地域交流研究センターのとても大事な第一回の集会ということで、お招きいただいたことを嬉しく思います。

七年前、都留文科大学社会科学部編『地域を考える 大学』（日本評論社、1998年）に収録された今泉吉晴先生の論文を拝読しております。都留文科大学に来るのは今回が初めてですが、一貫して「現場からの視点」ということを大事にしてきた大学だと思っており、注目してきました。そしてその結実として地域交流研究センターが生まれたのではないかと考えています。

さきほど初代センター長今泉先生のご講演を聞いて、あらためてそのことを確認できました。現場に根ざすとはどういうことか、動物の生態を生きた状態で研究者も共生の作法を守りながら観察するという研究の方法が「出会い」というお話をうかがい、またそのことがソローやシートンに学びながら先生ご自身がこの分野で開拓的に追求されてきた方法でもあるという経緯をうかがって、大変感動しました。大学に籍をおくことと、自然のなかでフィールドワークすることとの矛盾ということを言われた点にも共感する面があります。フィールド・ミュージアム構想は、都留の地域で教員や学生、住民たちと動物たちが出会いながら共生する構想なのだと思います。

1. 子育ての過程から実感した共同学習

私も大学に籍をおくことの矛盾を自己体験としてもっています。それは子育てをつうじてでした。教育学の中でも学校の外を中心とした公民館などの学習活動を研究対象としていますので、もともと大学の外に出かけることを日常的に行っています。しかし、二十年前、大学の教員として子育てをするようになって、研究活動に徹することができない自分の課題に直面して、矛盾は深くなりました。結果的にはその課題をつうじて、協同の教育という問題を考えるようになったといえるのですが……。

私は比較的小さく高齢出産をして子どもを持ちました。危険度の高い出産だったからかもしれませんが、子どもが重い病気をもって生まれてきました。そのため保育園に預けることができず、病院、そして自宅での子育てをおこなわざるをえませんでした。もちろん多忙な社員の夫も協力するのですが、子どもを産み、育てる女性としての思いは、よく大田堯先生が言われるように、夫婦間には「絶壁ほどの隔たり」があります。

子どもの病気が治らないならば、私は自分が大学の教員をやめようと考えました。とにかく目の前にいる子どもを守らなければならないという現実をどうするか、これは今すぐ何とかしなければならぬ問題です。研究はあとからでもできます。まずは、子どもが無事に命をはぐくんで、病気を克服していくために、自分が大学をやめるしかないと思ったのです。

結局、病気は回復してやめなくてすんだのですが、当時はとても思い詰めていました。学校就学前の子育ての期間、大学の教員としては半分以下の仕事しか、できなかったと思いますし、同僚には迷惑をかけました。私の場合職住近接で、家に帰るときはJRの陸橋を越えて自転車にのります。陸橋を越えると、保育園に走っていく母親、商店やスーパーの買い物に飛び込む主婦、そして夜は学童保育や子育ての集まりなどに出かける市民、活動家といういくつかの役割を背負うようになりました。最初は、女はどうしてこんなに重たいことをたくさん背負わなければならないのだろうと、情けなくなり、被害者意識ばかりが強くなっていました。

しかしこうやって数年過ごすうちに、一人何役も持ちながら生活するというのが、とても大事だと思うようになったのです。当たり前のことですが、どんな生活場面でも、人々は「一人何役も」で生きているからです。そのことをわかっていない苦労知らずの自分だったわけです。「一人何役」という生き方を理解していくことが、私にとっては、わかっているつもりであった社会教育を、あらためて「協同する」という視点から深めて考えていくきっかけになりました。

保育園や学童保育所、子ども劇場などの活動をつうじて、指導員の方、病院の医者、看護婦さん、あるいは教師や東京に働きに行っている人々、文化活動に熱心なお母さんたちと一緒にやってきて、いろいろな人に助けられる経験をしました。私は、教育学をやってきたこともあって、それまで「人に教える」という考え方が強かったのです。しかし子育てはみんなと一緒に支えあってやっていくわけで、そういうなかで、自分も子どもも教えられ、元気をもらい、いろいろな問題も乗り越えていくことができるということを何度も体験しました。考えてみると、地域の共同性が衰退し、競争の教育の風潮が強まる中で、こうした子育てでの支え合いは実際にはとても難しくなっています。子育てが自分一人の責任になってしまい、とても孤独なので、子育て不安や幼児虐待が多くの母親のなかに広がっているのだと思います。

社会教育も「教える」教育より、共同学習を伝統としています。一緒に交流しながら協同して学ぶという方向で社会教育は発展してきました。私は自分の生活をつうじてあらためてそのことの意味を実感しました。

今泉先生と同様、私自身も年配の人たちのちょっとした一言に助けられたり、若いお母さんでも信じがたい逆境の中で子育てしている人の前向きな姿に学んだりして、生活にねがず学びを深めることができたような気がします。

2. センター『通信』を手にとってみて

都留文科大学に地域交流研究センターが発足した当初から、『通信』を読んでいます。感想の一つとして、写真が美しいことにはっとさせられました。心にしみこむようなモノクロの写真です。高校生の感想には、「写真はカラーがいい」という声もあるようですが、私は、このモノクロ写真がいいと思います。そしてもうひとつの魅力は書き手が多様であることです。大学の教員だけではなく、地域の学校の先生、大学生や高校生、地域の人たち・・・と様々です。そしてそれぞれの書き手の人たちの語り口が、率直でみずみずしい。お客さんとして、頼まれたからあらためて書いているのではなく、自然に自分の気持ちを語っているような文章です。そうした互いに通い合うものをはぐくむ活動がこのセンターに

よってつくりだされてきたのではないのでしょうか。私は書き手のスタイルに、このセンターの人間らしい温かさを感じます。

今、全国の大学で、こうしたセンターがやはりモノのように作られています。でもその担当となった教員は、けっこうつらい思いもしています。今泉先生のように「外にいるほうが嬉しい」という人とはちがって、センターの仕事というのは、通常の教員にとってはつらいのです。その理由は、こうした組織が、「大学の資源を地域に還元するためのサービス機関」として作られてきたからです。社会教育の専門の教員がそのセンターを担うケースが多いのですが、往々にして、大学の研究成果を地域の人たちに「提供」することが求められてきました。つまり自分は「研究」をしたいのだけれども、「サービス提供」でいろいろ連絡役や雑務を果たさなければならぬというジレンマを感じながらセンターの仕事をしている場合が多いのです。また、大学の生涯学習開放センターといっても2、3名の専任教員がすべて請け負っており、大多数の他の教員にはなかなか協力をえられないという実情もあります。

こうした形でセンター運営が社会教育を専門にしている人の仕事のひとつになってしまっている現状を見てきて、それとの比較で、都留文科大学の地域交流研究センターのあり方には興味がありました。『通信』をみると、都留文科大学のセンター運営は、何か違うのではないかという期待がもてるのです。最初から「サービスとして還元する」という発想ではなく、「現場から学問を捉えなおそう」、「ともに学び、ともに文化をつくる」という地域の拠点としてセンターが位置づけられているという特徴を、さきほどの今泉先生のお話からも感じます。

3. 大田堯先生の生き方と教育学

大学と地域の関係づくりについて、私なりに考えていることを少しお話しします。

ひとつは、都留文科大学の元学長、大田堯先生の教育論です。大田先生は私の大学時代の先生でもありますが、現在隣町にお住まいで、現在も先生には日常のご一緒させていただく機会があります。

大田先生の教育学は、ご自身の生き方と一体になっていると思います。都留での教育を経験される中で、ご自身の教育学を深められてきた経緯があります。その変化は、偶然ではなくて、しかるべくして生まれたものだと思います。大田先生は、サークルを重視されている方で、ご自宅でも複数の小さなサークルの集まりを毎週のように開いておられます。大田先生の「ロハ台の記録」は、畑潤先生が記録を丁寧に分析されている研究ですが、浦和が農村であった頃、青年たちが日常生活をつうじて心のひだにわけいって互いに交流する生活記録サークルの文集です。若い知識人として青年と語り合っている大田先生の姿とだぶらせて見ることができます。

今、大田先生は、郷里の広島県本郷町でご自分の土地を町に寄贈し、ほんごう子ども図書館を建設なさっています。また図書館からすこしはなれたところの土地も買い取り、子どもの遊び場をつくりました。木やたけのこが生えているうっそうとした場所なのですが、そういう空間を遊び場にして、住民とともに、子育ての文化、夢を育てていく仕事が始まっています。毎月、広島に行って、住民、子どもたちと一緒に図書館や遊び場で活動されているわけですが、その中で大田先生の言葉がどんどんやさしく、鋭くなっていきました。

例えば「読み聞かせ」でなく、「読み語り」に言葉を言い換えていることもその一例です。大田先生は『通信』の六号で、今、子育てや教育にとって大事なことは、「どうなるか」という問いではなく、「どうするか」という問いでなければならないとおっしゃっています。

さきほど今泉先生も、「どうなるか」でなく「どうするか」が大きな転換になったとおっしゃっていました。多くの研究者は「どうするか」について考えることは苦手です。自分の専門は「どうなるか」の分析であって、「どうするか」については「誰かがやってくれる」「自分の仕事ではない」という考え方なのです。しかし大田先生は、「どうするか」をしっかりと考えることができる人間になることが重要だと言っています。「どうするか」が大事であるという教育学は、サークルや住民の方々と一緒に小さな対話のある関係を何十年も積み重ねてくる中で、先生みずから悟られた哲学なのではないかと思います。

大田先生は、戦後の日本の教育学界の第一線を担ってきた方ですが、研究者の視点のみならず「どうするか」を語り合う「生活者としての視点」をずっと大事にしてこられました。だから、学長になられた時に、都留文科大学にも大きな期待を寄せて、学生たちとも語らってきたのではないのでしょうか。大田先生は、「青年はどういうふうに着くのか」について、「選りながら発達するのだ」と言っています。いろいろな知識を身につけたあとに「どうしようか」というのではなく、目の前の課題について「どうするか」を青年自身が選ぶことによって、成長する、そういう青年教育論をとらえていらっしゃいます。これも大田先生のご経験が凝集された言葉ではないかと思うのです。

4. 「研究室の扉が村の農道とひとつづき」－見えてきたアクション・リサーチの意味

宮原誠一先生は、大田先生の少し先輩で、ほぼ同じ時代を生きてこられた先生です。東京大学で戦後、社会教育の中心になられた方です。私も宮原先生に導かれ、農村や労働の現場を訪ね歩いてきました。「(宮原) 研究室の扉が村の農道とひとつづきなのだ」と評された先生は、現場に入ってから活動を「アクション・リサーチ」と表現なさっていました。しかし、当時の私にはアクション・リサーチが何であるのかよくわかりませんでした。社会科学で言うアクション・リサーチは、自然科学のフィールドワークと少し違うのかもしれませんが。自然科学の場合、フィールドに出る主な目的はデータを集めることです。あるいは同じ社会科学でも文化人類学のフィールドワークとも違います。文化人類学も、現場の人々の話を直接聞くことはしますが、そこでは自分自身はよそ者であることが前提です。

宮原先生は「フィールドワーク」という言葉を使わず、それと区別するためにあえて「アクション・リサーチ」を使っていました。しかし私は漠然とその違いがわかってはいてもどうちがうのだろう、いつか明らかにしたいと思っていました。

アクション・リサーチについて研究している人は少なかったし、宮原先生もアメリカのプラグマティズムからこうした考えを学んだのだとは思いますが、それを誰かの理論として紹介するのではなく、ご自身の研究方法として実践しておられました。この言葉は労働分野でも使われていました。組織の中で改善しなければならぬ問題がおきたとき、あるいは労働の生産性を上げなければいけないとき、その解決方法をさぐるための調査法としてアクション・リサーチが用いられてき

ました。

いずれにしてもアクション・リサーチは、「どうするか」という問いから発する実践的な調査といえるでしょう。宮原先生も、実際に起きている問題を解決するための方法として、アクション・リサーチを考えていたと思います。

ところでこのアクション・リサーチは一人ではできません。さらに、単独の組織ではなく、組織と組織と一緒に協力してやらないと、問題解決はできないのです。研究者の側も組織やグループ、現場も機関、組織、グループなどがあり、その組織と組織とが相談して解決を考えていくという方法がアクション・リサーチの方法と言えます。すこし調べてみてわかったことは、大学や調査グループが、現場の課題を現場の人々と共有するプロセスが大事であるということです。そしてもうひとつ重要なのは、通常の社会科学で「調査の対象者」と見なされる人々が、アクション・リサーチでは、調査の主体、つまり学生も生徒も農民や住民も「共同研究者」となる、という点です。そうすると同じ課題に対しても、解決の方向として、知恵の出し合い方が違ってくるのです。生活の中で体験して感じていること、親から伝えられて慣習的にわかっていること、そうした生活の知恵と、研究者の側の科学の知恵は、違います。往々にしてすれちがい、互いに不信感をもってバカにしあってしまうとか、コミュニケーションが共有できないことも多いでしょう。ですから両方が変わらないと通じ合わないのです。どちらかが一方的に歩みよるだけでも解決にはなりません。研究者がグループ（組織）として関わること、そして調査対象者としての住民も、研究する側と共通の考える立場に立つこと、そして両者の協同関係を作り出していく過程、これらが、アクション・リサーチの本質ではないか、今はそのように考えています。

5. 「どうするか」を考える農民を育てる場としての「信濃生産大学」

「信濃生産大学」（長野県駒ヶ根市）というのは、宮原先生が全エネルギーを注いで設立した学習の場で、研究室の外に作り出したもう一つの大学と言えます。長野県全域から農村の若い人たちが集まってきて合宿で学習しようというものです。この「大学」を運営する担い手として宮原研究室の卒業生が長野県各地に社会教育の職員として入っていきました。そうした学習活動の上に、「長野県農業近代化推進協議会」が生まれ、そこに専従事務局職員が配置され、今でいうNPOのような有償の雇用はとても困難な事務局であったと思いますが、農民の学習運動を日常的に支えていったのです。

「信濃生産大学」では学習活動だけでなく、状況を変えていこうという行動も生み出していきました。当初は協力的だった自治体の側も、そうなってくると気に入らない部分が出てきます。つまり「どうするか」を考えられる農民を育てることが社会教育なのに、それをやっていくと農民運動が発展し、自治体政策と対立することもでてくる。自治体はこれを好まないわけです。そうした自治体との関係の難しさもあって、「信濃生産大学」は六年間の歴史をもって終わりとなり、その後は自主的な運動としてひきつがれていくことになりました。

この経験から、異なる主体が、互いの主体性を尊重しながら、どこまで協同関係を創造し、持続していくことができるのか、とても難しい課題があると感じます。

6. 地域に開かれた大学づくり

東京大学の社会教育研究室は、地元の東京で開かれた大学を実施したのではなく、離れた長野県にでかけて行って実践が行われていたわけです。今では、各地域の大学で、地元と一体となって学生たちを育てていくような活動が始まっています。例えば、松本市にある松本大学では、いうなれば大学のすべてが地域交流をめざしているというような大学だと思います。授業の三分の一が「アウトリーチ」、つまり地域に出ていき、住民の人たちから学び、一緒に活動することを授業の一環としているわけです。それを成立させるための教員の仕事も大変です。教育は地域にまかせて自分は研究、などと言っていられないのです。松本大学に勤めたら、他の大学で非常勤講師をしてはいられないそうです。先生たちは、それぐらい熱心に地域と学生に関わっている。多くの先生が毎日大学に出勤して夜十時頃まで大学で仕事をしているとおっしゃっていました。クラブ活動もたくさんあり、そこに松本市の住民が講師としても多数入ってきています。社会教育が盛んな松本の地域性にねざして、まさに現場で学ぶ大学づくりを松本大学では実現しています。

私は東京都立大学の「都民カレッジ」の運営に携わった経験があります。形としては、いわゆる大学の公開講座なのですが、そこには大きな特色があって「江戸学」、「地域学」を重視しているのです。都立大学の全学部からカレッジの運営をする教員が参加しており、都の職員とも一緒になって講座づくりをしていました。そのうち「都民カレッジ」の大学院を作ってほしいという要望が住民から出てきました。四年間「カレッジ」で学んだ人が中心となって、古文書や博物館学の「大学院」を作ったのです。地域の郷土史家や大学の地域研究の専門家が一緒になって講座を企画・運営してきたことが大きな特色といえましょう。

今泉先生のお話の中で「東京は人の住むところではない」というお話もありましたが、東京都立大学で都市計画や地域学に携わる研究者、東京の公害、環境保全問題で研究を積み重ねてきた人たちの活動が発端となって、江戸学・東京地域学が生まれました。しかしこのように研究活動と地域を結びつけ、都立大学らしさを実現していくような都民カレッジは、石原都政のもとで財政問題を理由に閉鎖されてしまいました。理由は財政問題にとどまらないでしょう。都立大再編の動きにもつながってくる為政者にとって都合のよい大学づくりのもとで、つぶされてしまったのだと思います。

信濃生産大学の場合もそうですが、新しい社会を創っていく学びは、社会教育の学びの幅広い展開が保障されないと、学びの場の継続が難しくなってしまいます。

おわりに 都留文科大学地域交流研究センターへの期待

都留文科大学の地域交流研究センターも、今までお話ししてきたさまざまな開かれ方のなかで、独自の実験がおこなわれていると思います。田中孝彦先生の臨床教育学は教育学の中では新しい試みですが、そのお仕事は、地域の住民、教師、子どもたちとともに新しい教育学をつくるプロセスになっているのではないかと思います。

それは大学と地域との両方にとって新しい学び方といえます。本当は、大学だ

けでなく、小中高でも地域と一体となった学びが積み重ねられることで、こういう学びが当たり前のこととして定着していくことが望ましいでしょう。しかし総合学習などでその方向が出されてはいるものの、そこで「評価」が問題となってくると「地域と一体となった学び」を進める上で困難も生じてきます。(短期的な学力とは異なる) 評価が別の形でなされないと、「なぜそれがいいのか」ということを証明できません。大学で「地域に開かれた教育」がある程度やりやすいのは、ある意味で、少し既存の評価から自由だからなのかもしれません。

地域から学ぶことが自分の力になっていくのは、自分を振り返って自分の変化を実感できることが重要で、そういう評価のあり方が認められる余地が大学という場には多少あるのだと思います。自分自身が豊かになっていくことを確認できるような学び、相互に育ちあえることを確認できる学び、それが実践的に地域交流研究センターの中で展開され、発信される時代になれば、日本の教育を変えていくことのできる視点がここから生まれてくるのではないかと、そんな期待をもちます。

地域にとっても誇りとなるような学びと文化創造の場、小さな大学が大きな発信力を備えて、日本の、行き場を失っている子どもたちに光を与えてくれる実験場となっていくことを心から期待します。

センターが五周年を迎える頃に、その方向がいつそうみえてくるように、皆様のこれからのご活躍に注目したいと思います。

(了)

熊とまちづくりとコンセルヴァトゥール

NPO法人 白川郷自然共生フォーラム・トヨタ白川郷自然学校 加藤春喜

会場の皆さんは、このタイトルに含まれる三つの言葉、「熊」「まちづくり」「コンセルヴァトゥール」のいずれに興味がありますか？（会場で、興味ある言葉に挙手）

さて、なぜこの三つの言葉が関連するのかは、後ほどお話することにして、はじめに、私がなぜここに立っているのか。自分が何者なのか。そこからお話したいと思います。

私は平成5年に都留文科大学を卒業しました。卒業後は、岐阜県にあります郡上八幡の町役場に就職し、6年間、社会教育の仕事をしてきました。仕事として環境教育に携わりたかったものですから、人と川との関係が今も息づいているこの町を就職先にしたのですが、「環境教育」という言葉自体がまだ一般に馴染みの薄かった当時は、理解を示してはくれるものの、具体的に一緒になって活動していただける方はあまりいませんでした。一人でやることには限界がありますので、まずは地元の青年団などとの仲間づくりから始めました。彼らとは、名古屋から金沢までの約250kmの道のりを春の長良川や白山の自然を満喫しながら自転車で旅する‘さくら道ネイチャーサイクリング’といったイベントを実施して、50名定員のところ、100名以上の申し込みがある人気イベントにまで育てることができました。

その後、社会教育の仕事から離れ、産業振興課で町が管理する観光施設の運営など、産業振興事業の業務を行政からアウトソーシングしていく仕事に携わりました。通算9年間、行政職にいたことになりましたが、その間、よく町の人たちに、「お前ら役場の職員は無責任だ」というようなことを言われました。部署を異動したらそれまでの仕事に責任がなくなってしまうのだから、結局のところ、責任をとっていないのと同じだということです。なるほど、確かに職場を異動してしまうと、これまでの仕事に関わりを持ち続けるのは困難です。かといって、同じ職場に居続けるのは、業者との癒着やまちづくり全体の視野に乏しくなるなど、公務員としての公正さを保つ上でいろいろな弊害を生みます。しかし、小さな町の住民にしてみれば、地域の自治会活動の延長線上に役場があるようなものですから、役場職員の公私を分けるようなサラリーマン感覚は馴染めないのです。とりわけ、‘よそ’から移住して役場に就職した私は、それだけで地域から遊離している存在ですので、その言葉はそれなりに私の中で重くのしかかり、今までの仕事で関わった活動に自ら関わり続けることを私に決意させました。

しかし、役場で関わる仕事はどれも大事な仕事で、それぞれやりがいがあるものの、やはり責任の重い仕事ばかりです。次第に、野山にでかける時間よりも職場やまちづくりの活動に参加している時間の方が圧倒的に長くなっていきました。私が役場職員を志したのが‘まちづくり’そのものに興味があったからなのであればそれでも良かったのですが、私にとって‘まちづくり’は私が求める環境教育活動を実現するための、一つの手段に過ぎません。このままでは、自分が

「私でなくても良い」町役場職員になってしまうと思い、一念発起して町役場を辞めました。

その後、役場職員時代に蓄えた貯金のほとんどを費やして、郡上八幡の町の空き家を借りて小さな店を構え、野生動物のぬいぐるみなどを販売しながら、人と野生動物との出会いの場をプロデュースすることを飯の種にしようと、2年間、自営業を営みました。冬の閑散期には、ぬいぐるみ製作を学ぶため、栃木のぬいぐるみ工房へ赴き、住み込みで働かせてもらったりしました。2年間も店を営めば、生業になるかどうかある程度察しがつきます。次の仕事の展開を幾つか考えていた矢先、たまたまトヨタ白川郷自然学校のスタッフ募集の話を知り、インタープリター職に応募してみたところ、運良く採用されました。そして現在に至ります。

「自然学校」のイメージというと、一般には「少年自然の家」が連想されるようです。トヨタ白川郷自然学校はそうしたイメージを変えることをめざしています。詳しくはインターネットで「トヨタ白川郷自然学校」で検索すればホームページをご覧いただけますので、ここではかいつまんで概略をご説明いたします。

敷地面積は172ヘクタール。土地と建物をトヨタ自動車が提供し、白川村や日本環境教育フォーラム等が参画するNPOが運営していきます。

自然学校のターゲットは、子どもだけではなくありません。むしろ、環境に関心のないような大人の方々にこそ利用していただきたいと考えています。温泉やおいしい食事が食べられる森のなかのエコリゾートといったイメージを前面に出すことで敷居を低くし、なるべく多くの方々に環境に関心をもっていただく機会を提供することをめざしています。

また、自然学校には環境教育プログラムの専門職員が常駐し、自然体験プログラムの提供はもちろんのこと、伝統文化に触れたり、環境技術を学ぶプログラムも提供いたします。特にトヨタ自動車が設立した自然学校ということなので、プログラムの開発にあたっては「ものづくり」という視点を重視しています。そして、最終的には、成果として目に見える形での環境貢献型プログラムに参加していただくことで、来訪者の皆さんに具体的に環境とのかかわりを持っていただきたいと考えております。

これらのエコリゾートと共生プロジェクトの両極を併せ持っているところが、トヨタ白川郷自然学校の最大の特徴です。環境への関心の度合いが様々な人達が交流することで、お互いが触発されるような「場」になることを期待しています。

とにかく、まずは裾野を広くして、いろいろな人に自然学校に来てもらわなければ何もはじまりません。人に来てもらうためには、いかに人が楽しめることにするかが重要です。ここでは温泉を掘るということになりました。環境への影響を考えると問題もあるのですが、少なくとも排水については、温水のまま谷に流さないよう、約2kmにわたって谷と並行して走る林道に排水管を埋設し、ある程度、冷却した上で谷に流すという配慮がされています。

他方で、リゾートというには程遠い、荒涼とした土砂の山が自然学校の目の前に広がっています。これは東海北陸自動車道のトンネル工事で生じた膨大な残土です。これを緑化していくことも自然学校の環境貢献型プログラムとして、お客様からお金をいただいて行なっています。ある意味、自分たちの敷地の整備をお金を払ってもらってやってもらわなければならないので、ちょっとひどいことをしている

ようにも思えるのですが、苗木を用意する手間賃や道具の確保など、やはり経費がかかっていますので止むを得ません。何より、そのお金を払っていただいた分の満足感が得られるように、しっかりプログラムを工夫するようにしています。また、他にも、かつて陸の孤島と言われた白川郷を身体で体験するため、延々と藪を刈り払いながら廃れた古道をたどるというものもあります。

絶滅危惧種であるギフチョウが住める環境づくりをめざすバタフライガーデン整備は、かつてここにあった里山環境を復元する活動です。住人がいなくなった里の林は遷移に任せて森に埋もれ、田畑は高速道路の残土捨て場となってしまいました。このままでは、ギフチョウがいなくなるのは時間の問題です。私たちは自然学校の整備を通じて里山環境を再生していきます。

また、白川郷の合掌集落の景観保全とビオトープとしての水田を守るため、手間をあまりかけることのない稲作農法として、不耕起冬期湛水稲作に挑戦する取り組みも行なっています。白川郷は日本有数の豪雪地帯ですから、この農法がこの地で実現可能かどうか、まだわかりません。今、自然学校で実験をはじめたところです。これがうまくいけば、村民の方々と協力して普及に努めていきたいと考えております。

その他の取り組みとしては、30年以上にわたって放置されていた杉林の再生などがあります。かつての集落を取り囲むように広がるこの森を、除間伐をしていくことでムササビが好んで棲むような、林内の空間が開けた、鎮守の森のような大きな木の森にしたいと考えています。そうすれば、林床を見渡せるようになることから、熊が茂みに隠れて自然学校に近づけなくなり、不用意に熊と人とが至近距離で遭遇することを防げるのではないかと期待しています。つまり、ムササビの棲む森を、人と熊の生活圏の穏やかな境界にしようという試みです。

今年は各地でツキノワグマの被害が発生しました。しかし、白川郷では熊による被害はありませんでした。里の近くには来ていたようです。調べてみると自然学校の近くの栗とザゼンソウがたくさん食べられていました。それでも、人々との軋轢を生むまでには至りませんでした。なぜ人里に熊が出るのか。人里に出てくるのは、山に餌がなくなったからとよくいわれます。しかし、熊の行動圏が道路開発などによって分断された結果、たまたまそこを通りがかっただけの熊もいるかもしれません。そんな熊の事情を調べることもなく、今、多くの熊が「そこにいた」というだけの理由で抹殺されてしまうのです。

ツキノワグマを絶滅の危機から救うためには、本当に人間にとっての危険な熊だけを排除する線引きが必要になってくるのではないのでしょうか。具体的にそれを実現するためには、熊が生息している地域の地元の人に、熊なら何でもかんでも撃つということは止めるという合意を得ていかなければなりません。これらの合意を得るためには、単に熊についての専門的な知識を持っているだけでは不十分で、地域の人の理解を得るために必要な行動が求められます。人に危害を及ぼす可能性が認められた時点で、自ら率先して、その熊を駆除することではじめて、地元の人々の信頼を得られたという事例もあります。

ツキノワグマを本当に守りたいのなら、何より彼らの生態をよく知る研究者が必要ですし、彼らの生態を人々にわかりやすく説明できるインタープリターも必要ですし、彼らとともに生きている人々に、熊との共生に向けた合意形成を促すことができるファシリテーターも必要です。先日、行なわれた日本クマネットワーク主催のツキノワグマシンポジウムにおいても、こうした人材の確保を急務と

する提言がなされました。

私はフランスのルードルとクルーズー・モンソー・レ・ミーヌの2箇所のエコミュゼを視察に訪れたことがあります。ルードル・エコミュゼでは、まさに「木を植え続けた男」の絵本の舞台のような荒涼とした山で、土砂の流出を防ぐために伝統的な石積み技法を駆使して草地復元の実験を展開していました。クルーズー・モンソー・レ・ミーヌ・エコミュゼでは、廃墟と化したレンガ工場を近代産業遺跡として保存するため、国の失業者対策予算を充てて、若者が熟練職人の伝統的な左官技術を学ぶ場としながら、その遺跡の修復作業をすすめていました。

日本でいうところの学芸員であるコンセルヴァトゥールがこれらのエコミュゼの活動をコーディネートしています。彼らは、研究者や解説者であるにとどまらず、予算を獲得する有能な行政事務官であり、エコミュゼに協力する人々や各アソシエーションの活動をうまく引き出している良きファシリテーターなのです。

佐藤一子先生の話にもありましたが、生活の中から出てくる慣習的な意見と科学的な意見とを融合していくための人材が求められています。今はそうした人材は少ないですし、また、今申し上げたような仕事は、まだ社会に認知されていないようにも思われます。しかし、熊の問題に限らず、‘まちづくり’の多くの場面で市民参加が求められている今日、こうした専門的な見識を有し、かつ、ファシリテーション能力に長けた人材は必要不可欠な存在になると私は思います。

地域交流研究センターが、人材を育て輩出していくことで、その仕事が社会に認められていくことを期待しています。

トヨタ白川郷自然学校のURLは以下の通りです。

URL:<http://www.toyota.eco-inst.jp/>

「フィールド・ミュージアム」⁽¹⁾と『フィールド・ノート』の実践

地域交流研究センター特別非常勤講師 北垣 憲仁

1. はじめに

「フィールド・ミュージアム」部門が地域交流研究センター（以下センターと記す）に位置づけられ活動を始めて今年度で3年目となる。センター発足時に提出した「フィールド・ミュージアム」の研究計画では、「自然と人との交流」をテーマとし、身近な自然に関心を寄せ、現場での体験を通して自ら成長することの意味を問う実践をするために、3年程度の（一部の研究については3年ほどの計画を3回かさねる9年ほどの見通しをもった）研究課題および協力体制、関連する授業の方針がどのようなものになるかを整理した。

中期的な展望を描いたこの研究計画には、構想を実現させるためにたとえば大学の敷地内でリスやムササビといった野生動物との出会いを通して自然との親しみを深める森づくりや、地域の人々の知恵を活かして誰もが楽しめる自然と出会う施設づくり、都留の代表的な冬の農産物である水掛菜栽培に学び農家との連携する計画など具体的なプログラムを掲げた。

しかし、大学を中心として「フィールド・ミュージアム」の活動を展開するにあたり、まずは活動の担い手と想定される学生や教員の参加の受け皿をどのように創り出すかが課題の一つであった。また、「フィールド・ミュージアム」部門が連携する授業、たとえば博物館学各論や環境・生態論では地域での実地の体験を重視していたけれども、そこで得た貴重な情報や記録を大学のみならず、地域の財産として蓄積していく効果的な方法をどのように作りだすかも課題であった。そこで、センター発足と同時に、授業と連携した取り組みのなかで収集した地域の情報を大学だけでなく地域の財産としてまずは記録にまとめる試みを始めた。それが現在、「フィールド・ミュージアム」の活動に参加している学生が主体となって取り組み、月刊で発行している『フィールド・ノート』へと発展することになる。

『フィールド・ノート』は、センターの「フィールド・ミュージアム」部門の機関誌で、今年（2005年）で創刊4年目をむかえる。この活動はセンターの事業としても位置づけられている。この冊子編集が、「フィールド・ミュージアム」部門への学生や教員の参加の受け皿としての機能を果たすだけでなく、地域との新たな交流を生み出し、学生自らが自己の生き方を問い直す契機となっているなど積極的な意味を持つことが、編集に参加した学生や交流した地域の人々の声を通してみえてきた。こうした冊子編集の取り組みが生み出す効果は、「地域に根ざし、地域を探求する」センターの活動の持つ方向性とも大きく重なるものであり、その役割や効果の検討は博物館のみならず大学教育のあり方を考えるうえでも重要な意義があると思われる。

本稿では、「フィールド・ミュージアム」部門の取り組みが3年目の成果をまとめる年度にさいして、『フィールド・ノート』が果たした役割と意味を考察することが目的である。本稿ではまず、『フィールド・ノート』の性格を明らかにす

るために、「フィールド・ミュージアム」の概念を概観する。つぎに、冊子編集の過程と取り組みの内容を紹介する。そして冊子編集に取り組む学生や読者の感想、反応について整理する。最後に、この冊子編集がどのような積極的な意味をもつものなのか、私が学生とともに編集作業をした経験にもとづいてまとめてみたい。

2. 「フィールド・ミュージアム」の考え方

センターの「フィールド・ミュージアム」部門には、今泉吉晴氏の都留市石船神社におけるムササビ研究に始まり、すでに20年近い研究と実践の蓄積がある。この「フィールド・ミュージアム」構想は、標本をそもそも生息地から切り離して展示しようとする旧来の博物館や生息環境とは異なる狭く閉じた空間で展示しようとする動植物園に対して、その場所で「もの」本来の生きた姿に接することのすばらしさを伝える自然博物館の提案でもある。都留市では大都会とはちがいが、人と自然が混在し、人々の営みを間近に見ることができる。そうした地方の魅力が高く評価しようという試みでもある。

ただ、たとえば身近な野生動物にしても目にする機会はほとんどないといってよい。そこで、私たちはアカネズミやカワネズミといった野生動物と出会う装置や出会いの場所（エンカウンタースペース）を作ってきた。それらは自然と人をつなぐ接点となるものであり、旧来の博物館での展示場に相当するものである。このようにして、都留市のまちと自然を野外博物館とする「フィールド・ミュージアム」を私たちは構想してきた。大田堯元学長も、山と山にとりかこまれた都留市全体を「自然博物館」とする構想を提案している。大田氏は、「私の構想する都留自然博物館、それは建物ではなくて、一つの人間関係の創造である。いや人間と自然との共存の関係を含んだ一つの新しい生きた社会の創造である」と記している（大田堯、1989、327p）。

フランスで1960年代に創出された「エコミュージアム」という博物館の概念は、「地域及び環境における人間の博物館」であり「ある一定の地域の人々が自らの地域社会を探究し、未来を創造するための統合的な博物館」だとされている（丹青総合研究所、1993、183 p）。「フィールド・ミュージアム」構想や大田氏の「自然博物館」構想もその理念は「エコミュージアム」のそれと大きく重なっているが、大学教育とも深く結びついた独自の視点をもちあわせている。

名称はともかくとして「フィールド・ミュージアム」は、現地保存を基本とした野外博物館であり、その性格は、従来のようなコレクションを中心とした博物館像とは大きく異なるものである。

伊藤寿朗氏によると、現在の博物館は、「参加・体験」を運営の軸とする第三世代の時期にあるという。つまり、「市民の主体的な参加、体験による自己学習能力の育成を促し、市民と博物館が共同して新しい価値を発見し、創造する博物館」が期待されている（伊藤寿朗、1993、160p）。しかし、その実現には受け身から自己教育力の形成へという場をいかに設けるかが課題となる。このような「地域博物館」の概念は、生活の場である地域の見直しをテーマとして掲げる「フィールド・ミュージアム」の考え方と通底するものがある。後述するように『フィールド・ノート』の編集作業は、本学の学生や教員の参加の受け皿として、また地域との交流の機会としてだけではなく、自己教育力の形成という場を設け

るための重要な機能を果たしつつある。

つぎに『フィールド・ノート』とはどのような性格の冊子なのか、これまでの取り組みを簡単に整理してみたい。

3. 『フィールド・ノート』のこれまでの取り組み

「フィールド・ミュージアム」部門と連携した授業では、直接観察など実地の体験を重視していたこともあり、博物館学や環境・生態論などの授業は、なるべく大学構内やその周辺に整備してきた多くのフィールドを活用することになっていた。野外での授業のあとには、体験から得た感動や発見をなるべく記憶の薄れないうちに記録してもらおうと、受講者にはレポートを提出してもらおうようにしていたが、それらを大学や地域の貴重なデータとして保存し活用するために、まずは授業でのレポートをメールで添付して提出してもらおうことにした。当時はすでに学内の研究室や施設がLANで結ばれ、インターネットの環境も整いつつあったし、デジタル化された資料であれば、資料としての活用も保存も公開もできる。レポートは博物館の機能をふまえて一般に公開されることを学生に伝えたいと、提出してもらった。こうして提出されたレポートは、それまで授業の終了と同時に提出してもらっていたレポートよりも分量が多く、また書かれた内容も深く吟味されたものが多い傾向にあった。個人の貴重な経験や発見は授業でも学生間で共有するために、提出されたレポートを整理し掲載した資料を作成し、授業で配布してみることにした。作成する資料にはなるべく写真を添えて学生が読みやすいような見栄えの美しいレイアウトを心がけた。この資料には、現在と同じ『フィールド・ノート』というタイトルが付いているけれども、当時はまだA4版2枚程度のもので、現在のような40頁を超える冊子形式にはなっていない。

提出されるレポートを、毎週、体裁を整えながら授業で配布し、体験を共有するうちに、受講生からの反響も高まりをみせ、資料に掲載された体験への感想だけでなく、レポートに触発されて自ら時間外にフィールドを訪れ、その体験をまとめたレポートも寄せられるようになった。ある学生は、ムササビとの出会いで感動したほかの学生の体験に心を動かされ、一人で神社に出かけムササビと出会いの体験をする。その時の感動を彼女はこう記している。「私が都留の自然に興味を持ったのは、博物館の講義での、ものとのよい関係を築くというレポート課題がきっかけでした。最初、私は自分の記憶や資料に頼るばかりで、実際のものと同じ向き合えず、資料では決して得られない生の体験をしてきた他の人たちの話を聞いて、とても羨ましく感じました。ものと出会い、体で体感して、行動し、考える。このような体験は、資料よりもずっと価値があり、これを積み重ねていくことは、その人が生きていく糧になるものだと感じ、自分もそんな体験をしてみたいと思いました。(中略)神社の境内でムササビが出てくるのをひたすら待ちましたが、ほんらいムササビが活動を始める時間になっても、彼らが姿を現す気配はありませんでした。今はもういないのかと、諦めて帰ろうとしたその時、私が今まで見張っていた木々の辺りから黒い影が飛び出してきました。ムササビだ、と思う間もなく、その黒い影は、小篠神社の裏にある墓地の上空を通り、向こうの雑木林へと一直線に飛び去っていきました。あっという間の出来事でしたが、私は全身に鳥肌が立ち、感動して思わず涙が出ました。私たちが暮らす世界の裏に、ムササビが生きる世界がたしかに存在していたのです」と。

なるべく多くのレポートを資料に掲載するには、私個人よりも、編集に関心がある学生と共同で作業したほうが効率がよい。編集に関心をもつ学生を募り、2001年10月、私を含め5人で作業を開始した。当時は、1999年にアドビ社がインデザイン (In Design) という日本語組版に対応したソフトを発表していたため、すでにデスクトップ上での編集 (DTP: デスクトップ・パブリッシングの略) 環境が整いつつあり、高価なソフトを使用しなくとも編集作業が可能となった。あらかじめ研究室に備えてあったパソコンとスキャナー、プリンタなどを活用し、5人がそれぞれ空いた時間に研究室で編集作業をするというスタイルができた。

2002年4月には、毎週の授業で配布するため週刊で発行していた資料を月刊の冊子というかたちで発行することにした。編集作業をしていた学生も編集の作業手順に慣れたこともあったが、提出されたレポートをただ紙面にするだけでなく、自分たちの関心にそった企画を立てて発行してみたい、という要望が強かったからである。それには、地域にじっさいに出かけて丹念に取材する必要もある。それまで1年間つづけた授業のレポートの資料化は、こうして学生主体の冊子編集へとかたちを変えることになった。冊子のテーマは、「フィールド・ミュージアム」が掲げる「自然と人との交流」とした。そもそもこのテーマに含まれる領域は幅広い。たとえば、地域の人々の日常の暮らしや記憶も、動植物の生態の記録も対象となる。冊子編集が扱う内容は、博物館学などの受講生が持つ幅広い関心の領域に対応していたといえる。

じっさい、編集に参加した学生が企画したテーマは多岐にわたった。このようなテーマは学生によっていねいに開拓されていった。ある学生は、都留の湧き水に注目し、十日市場を中心とした湧き水と地域の人々との関わりを調べ記事にした。また、湧き水を活かした都留の代表的な農産物の一つ、水掛菜栽培の特徴を明らかにするために、富士吉田市や御殿場市の水掛菜栽培の現場をじっさいに訪ねて紹介した学生もいた。桂川で深刻な問題となっているゴミに関心を寄せ桂川の源流まで遡りながら取材し特集記事をまとめた学生もいた。こうした学生たちの関心にそった取材の記事と授業で提出されたレポートで構成された紙面を大学で200部印刷し、受講生および学内の教員の一部、市民に配布した。取材の過程でお世話になった方々には報告とお礼をかねて直接、冊子をお渡しした。自ら企画を立て、取材し、わかりやすく記事としてまとめ、体裁を整えて冊子というかたちで発表し、そして取材対象者に報告するまでの過程を経ることで、地域との小さな交流が生まれた。

その後、冊子編集には学生だけではなく、教員や市民の方々にも関わっていただくことになった。宝のやまネイチャーセンター学芸員の佐藤洋氏や小学校教諭の小口尚良氏には学生が記事を依頼し、やりとりを重ねながら紙面づくりに取り組んだ。こうして冊子編集は、規模は小さいながらも学生だけでなく、教員、市民の参加の受け皿としても機能するようになった。

16頁で始まった創刊号も編集に参加する学生が増えたこともあり6号で40頁を超えた。1ヶ月という編集期間も学生が自分のペースにあわせて取り組むには適切な時間だったといえる。研究室は、9時から21時まで開放し (その間、私も研究室に常駐することになる)、授業のない時間でも学生の気分にあわせて自由に編集に取り組む環境を用意した。こうすることで研究室には学生が頻繁に編集作業に訪れるようになり、記事の内容をお互いに相談したり、紙面構成を打ち合わせたりする姿が見られるようになった。

冊子への反応は教員よりも学生や市民の方が早く、また関心も高い。地域への

冊子の配布数も増え、県内外から購読を申し込む人も現在（2005年3月）では56人となっている。こうした状況のなかで、文章の校正もていねいにやるべきではないかという提案が学生から出るようになった。そこで、校了前に全員で校正作業をすることにした。あらかじめ校正作業までに仕上げた紙面を全員が持ち寄り、一頁ごとに校正をしていく。この作業が終了するまでに数日ほどかかるが、多様な体験や考えを共有する機会ともなった。こうして校正作業を終えると、さらに数日かけて修正を加え冊子をつくる。企画の立案から冊子作成までの一連の作業は、「フィールド・ミュージアム」の活動を共有する場ともなった。

2003年4月にはセンターが発足した。この時点で編集作業への参加者は、博物館学各論の受講生を中心に20名をこえていた。センターでは発足と同時に通信⁽²⁾を発行する提案がなされたけれども、『フィールド・ノート』の編集の経験と蓄積をここで活かすこともできた。センター通信のデスクトップ上での編集作業は、現在でも「フィールド・ミュージアム」部門の編集部で担当し、センターの重要な事業となっている。編集に参加する学生も増え、2005年3月時点で28人となっている。すでに編集の経験を積んだ学生が、新たに参加する学生に編集の手順を伝えるというスタイルもようやく整い、キャンパスの自然を紹介する『フィールド・キャンパスだより』や地域の記憶をテーマに目録として冊子にまとめた『水辺の記憶目録』や『暮らしの記憶目録』、『富士急の記憶目録』なども発行できるようになった。

3. 学生の反応

学内でも近年、さまざまな冊子が刊行されるなど、学生の編集への関心は高いものと思われる。じっさい『フィールド・ノート』の編集を希望する学生も増えてきた。私は、この編集作業を学科の枠を超えた学生や教員のフィールド・ミュージアムへの参加の受け皿として位置づけてきた。しかし、参加した学生にとっては、さまざまな意味をもっていること、またそこに編集作業のもつ積極的な働きがあることを私はともに作業をする学生から学んだ。編集に参加した学生にとって、『フィールド・ノート』の編集はどのような意味をもっていたのか。2004年12月に編集作業が一段落した時点でこれまでを振り返り書いてもらった感想の一部を紹介したい。

Aさんは、編集に参加して3年目になる。『フィールド・ノート』創刊からのメンバーの一人である。Aさんは、編集作業という自身の表現の場を得たことで自分の成長を確認できる喜びをつぎのように書く。

「ここまで続けてこられたのは、自分の体験から得た感動や発見を自分の言葉で多くの人に伝える編集が純粋に楽しかったからです。何かを人に伝えるには、その伝えたいことを自分で理解していないとできません。ぼくが書いた文章には、そのときの自分の想いが込められています。のちに冊子を読むとき、いつでもぼくはその時の自分に出会える。そこに編集の魅力を感じます。そしてこの編集作業を通して数々の体験をし、出会いを楽しむことができるようになりました。ぼくにとってこの編集は表現の場でもあり、学びの場でもあります。」

Bさんは、自分に編集の力量があるかどうか悩み、野外でさまざまな生きもの

の紹介をする掲示板づくりに1年ほど取り組んでいたが、4年になりサークルも引退して時間に余裕ができたため編集に参加することにした。Bさんにとっては編集作業が大人になるための練習の場になったという。

「『フィールド・ノート』の編集は私の生活のなかで大きなウェイトを占めている。この編集作業は、わたしを大人にしてくれるひとつのきっかけとなった。まわりを見渡す余裕を持つ大人、自分を客観的に見ることのできる大人、自分の責任を果たせる大人、自分の感じたことを素直に伝えることのできる大人。どれも私がなりたいと願っている大人のあり方だ。そんな大人になるための練習ができる場ではないかと感じている。校正や編集の仲間にも見てもらうことを繰り返すことで、作品への愛着は格段に増してきたし、何より自分とはちがうさまざまな目線があることが分かった。表現することは相手を意識してはじめて成り立つものだとおもう。」

Cさんは、もともと編集には関心がなかった。自分の記事が『フィールド・ノート』に取り上げられ、その見栄えのよさに自ら記事を書きたいと思い、編集作業に参加した。Cさんの場合、表現の場がほんらいの自分を見つめる機会ともなると述べている。

「自分の足で歩き、自分の目で見て、そのなかで感じとったものを書くということは何度か経験していくうちに、だんだん編集という作業が楽しくなってきた。もちろん、これといって文章がうまいわけではないし、日本語の使い方だってあやしいところもある。だが、回を重ねるごとにいつも小さな喜びと発見があった。心が揺さぶられ、自分のなかから自然に言葉が生まれてくる瞬間があった。そんなときは書くということへの抵抗が消え、むしろ自分の感じたことを素直に文章にすることで、それを誰かに読んでもらいたい、共感してくれたら嬉しいとさえ感じるようになっていた。私の場合は、編集を通して、自分を見つめる機会が多くなった。そして見失っていたほんらいの自分に出会うことができた。」

Dさんは、大学3年の時に博物館学の授業を受講し、展示のレイアウトなどに取り組むうちに編集に関心を持ち、冊子編集に参加した。Dさんの場合は、地域で暮らす人々へのインタビューが中心で、温かい励ましを受けながら自分が成長してきたという。

「私が担当しているのは、都留に住んでいらっしゃる方の日常の暮らしを伺うというものだ。この取材では、人に出会うだけでなく、その人の経験や思い出を聞かせていただける。転機となった出来事、失敗、今を楽しむための秘訣、これらを通して人の生き方を学んだ。自分で取材対象をみつけ、取材をしてわかりやすい文章をつくるというのは、かなり大変な作業であると思う。じっさい何度もやめてしまいたい衝動にかられたが、取材先の人に楽しみにしているよ、という温かい言葉をかけられるたびに仕上げようという気持ちが増した。もちろん、取材も楽しかった。相手から学びたいという開いた気持ちで向き合うと、みなさんが気持ちを開いて語ってくださった。その話のすべてがこれからの私の人生に大きな指針を与えてくれるものばかりだった。取材を終えて記事にする段階になると、いつも自分の知識の不足や欠けている部分を見つめ直すことになった。それが自分の成長につながったと思う。」

そしてDさんは、取材した地域の人の生きる姿に接した経験をもとに、この編集の経験を将来の選択肢の一つにしたいと述べている。

「自分にとって、この活動をやっていくことは将来の選択肢の一つになると思う。むしろ積極的につないでいきたいと考えている。文章を書いていきたいと思うようになったのは、この冊子に携わったことが大きい。将来、文章を書いて、自分の目でみたものをそのまま表現したい、と思う。たとえ小さくてもいいから自分で何かを発信していきたい。私が担当し取り上げさせていただいた人々も、自分からつねに何か発信したいと輝きをもっていた人だったから。」

Eさんも自分の都留での体験をもとに毎回記事を書いてきた一人で、授業でただ単にレポートを書くのとは異なり、読み手を意識した文章を書くことで自分と向き合えるようになった、と感想を述べている。

『フィールド・ノート』が私に教えてくれたことで一番大きなことは、書くという行為がいかに大切かということです。市民の方に向けて書くことで、読み手を意識してわかりやすい文章を常に自分に問う。それは自分の心と向き合うということでした。それはわたしらしく生きるということにつながっているような気がしています。」

『フィールド・ノート』の編集に参加した学生たちは、それぞれに参加の動機は異なるものの、自らの好奇心に沿って企画を立て、現場でじかに観察し、取材し、それらを記事にまとめるという表現の場を得たことで、自分と向き合う契機になったという。そして参加した学生のほとんどが卒業まで『フィールド・ノート』の編集に携わっていく。それほどまでに彼ら、彼女らの関心を惹きつけたのはなぜか。参加した学生たちと話しながら私を感じたのは次のようなことである。

まず、冊子という形式が、具体的な手応えを感じられるサイズの表現媒体である、ということ。『フィールド・ノート』の編集作業では、冊子として仕上げた成果を、取材などでお世話になった方々にも直接お渡しし、一連の作業が終わる。手渡すさいにかけられる、お世話になった方々から温かい声が学生の自分の取り組みへの大きな励ましと支えになっているようである（読者からの反応については次の章で紹介する）。読者に向けてわかりやすい言葉を選び、表現するという編集の過程を経て、地域の課題や魅力と、市民とをむすぶインタープリターとしての冊子の機能にも具体的な手応えを感じているのではないだろうか。

つぎに、『フィールド・ノート』が幅広い関心の領域を扱う冊子であったことも学科の枠を超えた多くの学生の参加を得た一因だろう。フィールド・ミュージアムがそもそも地域の人と自然の交流を通して地域の魅力を評価しようとする活動だけに、結果として幅広い学問の領域をそこに含むことになる。たとえば、博物館学芸員を目指す学生たちの関心の領域は、美術、自然科学、歴史、考古学と幅が広い。そうした学生にとっても、『フィールド・ノート』は自らの関心の領域と重なる部分があり、参加しやすいといえるだろう。逆にある活動が専門的な素養と関心が必要とされる場合には困難な面を抱える場合があることを今泉氏はつぎのように指摘する。「ムササビと森を守る会^④では、大木の大切さを訴えるなど何回か反対運動を展開し、ある程度の成果をおさめたが、こうした運動をふくめて神社にこだわるかぎりたえず問題が発生し、その対応におわれることは確かであった。ムササビと森を守る会の内部事情を見ると、会はずでに会員数100人を越える山梨県では有数の環境団体に成長していたものの、ムササビのための環境づくりという、ある程度動物学の専門的な素養と関心を必要とする運動の性格から、積極的に動けるのは学生会員と一部の専門家的な市民会員になりがちで

あった。建前としては開かれた会ではあっても学生と市民では会議開始の時間の守り方一つをとってもちぐはぐで、市民を本格的に受け入れる体制をつくれないうでいたといつてよい。会が大きくなればなるほど一部の会員に運営の負担がかかる仕組みを自ら招いていたのである。」(今泉吉晴、1996、160p)

編集作業に携わった学生たちにとって、編集作業は自らと向き合い成長させる契機となったという感想が少なくない。なぜ、編集というプロセスが自らを成長させる契機となり得るのか、その検討については、大江健三郎氏による「書く」という行為の持つ意味と効果に関する考察が参考になるだろう。大江氏は、書くという行為、あるいはその習慣は新しい世界の表現へとつながる、とつぎのように述べている「僕たちがどうしても難しい仕事の難所にさしかかり、そこを乗り越えようとつとめて、様ざまな試行錯誤をする。そしてついにひとつの作品を書きあげて、そこに自分がこれまで達成しえなかった新しい世界の表現を見る」(大江健三郎、1998、82p)。そして息子大江光氏の音楽を繰り返し聴くということが自己教育の役割を果たしたことを例に、音楽や文学など芸術をつくる行為が人生の深まりと結ぶことをについて「このように、自分のつくる音楽や文学によって、魂の暗い深みに入りこまざるをえない、その不幸と同時に、その表現行為によって、自分自身が癒され、恢復する不思議 - 倖せ、といつてもいいのですが -、そのふたつが重なって、重なりつづけて、表現者に芸術の深まりをもたらす。それは人生の深まりということでもあるように思うのです」と記している(大江健三郎、1998、215p)。自らの体験をもとに、文章を書き、それを書き換える。これは、エドワード・サイードが「エラボレーション」⁴⁾と表現したように(エドワード・サイード、1995、58p)、文章の練り上げという試行錯誤と仲間からの批評が新しい世界に出会うきっかけをつくるのではないか。それは新しい自分との出会いとも言えるのではないか。書くという行為が自分と向き合う契機となった、と印象を語った学生たちの言葉には、芸術と定義できるかどうかはともかく編集の過程を通して試行錯誤を重ね、新しい表現にたどり着くたびに自分の成長を確かな手応えとともに感じる事ができたという意味が込められていると私は受けとめている。

4. 読者の反応

編集に参加した学生たちが発行した『フィールド・ノート』には、さまざまな読者からの感想が届くようになった。教員よりもむしろ市民や学生の反応がはやく、しかも素直であるように私は思う。こうした読者からの反応は、学生たちへの温かい励ましとなり、小さな交流の機会ともなっている。そこで、「フィールド・ミュージアム」に届いた読者の感想を一部紹介したい。

「『フィールド・ノート』には大学生の自然や地域に対する感覚がのびのびつづられていますね。タネの特集はとても新鮮でした。今年から大学生になって千葉で暮らしている我が家の娘も、こんな感覚で学生生活をしているのでしょうか。新鮮な感覚が自然への興味を一段と深め、大学生らしい緻密な観察は、確かな知識の習得へと向かうことになるでしょう」

「いつも楽しく拝見しています。号を重ねるごとに表紙がカラーになったり、レイアウトが工夫されたりと、みなさんの読んでもらおうとする努力が垣間見え

ます。中身もよく練られていて、読み応えがあります。こんな言い方は失礼ですが、学生さんが作っているとは思えない出来ばえです」

ある卒業生は、在学中に経験した『フィールド・ノート』の編集作業が自らの職業選択にも結びついたことをつぎのように記している。

「今月の『フィールド・ノート』が手元に届き、読ませていただきました。都留文科大学前駅が完成したニュースと鉄道の歴史をあわせ、とてもよい特集だったと思います。ところで私事ですが、つい先日僕は就職しました。鳥取県にある雑誌出版社で釣り雑誌の取材記者になりました。僕は海や魚に関する知識はおろか山陰について知識がまったくないので、地元の漁師さんや、長年の経験を持つ釣り師のかたがたが先生です。小さな雑誌社なので取材、原稿書き、レイアウト草案まで一人でやります。ですがそういう経験は『フィールド・ノート』をつくりながら幾度となく経験してきました。その経験がこんなに生きてくるとはいまでも信じられません。」

「のびのびつづられていますね」という読者からの感想にあるように、書き手となる学生が自由な発想で表現したことが共感をもって受けとめられている。ある認識にとらわれず自由な発想でものごとを見つめる姿勢を大切に育むことも地域の課題に向き合うには大切な姿勢だろう。そのためには、学問的な素養とともに、生きいきとした本物の姿に直接ふれて観察する、という行為が重要になってくる。それは愛情を軸とした「もの」とのよい関係を築く基本でもある。「フィールド・ミュージアム」部門では、直接観察し自由な発想でものごとを見つめる感性を鍛える点を重視しているのもこうした理由による。

セレスタン・フレネ^⑤による教育運動でも「観察」は重要な問題であった。佐藤広和氏は、フレネの実践を分析しながら、フレネが「観察とは、その結果や時には目的が事実や事物を提出する謎の答えであるような感覚、思考、感性の結合である。」と規定したことを紹介し、この規定が「子どもの自発的な興味にもとづく生活勉強には子どもの感覚・感性を生活に向かって大きく開き、生活を見つめる眼を育てていくことが絶対的な条件であることを示す言葉として理解できる」と述べている（佐藤広和、1995、47p）。この視点は、私たちが「フィールド・ミュージアム」で目指す視点と大きく重なりあう。

5. 考察

以上のように、「フィールド・ミュージアム」の概念は第三世代といわれる地域博物館のそれと通底しており、人間と「もの」と環境（あるいは自然）との関係を見なおしていく契機となる。日本でも「フィールド・ミュージアム」や大田氏が提案された「自然博物館」、「エコミュージアム」と同じような思想をもつ博物館が社会の要請とともに注目されつつある。

たとえば、神奈川県平塚市博物館では、市民参加型の調査をもとに、地域の課題を明らかにし、住民とともにその課題に取り組む活動をしている。その活動を中心となって展開している館長の浜口哲一氏は、展示室だけでなく、集会所や研究室、あるいは収蔵庫にいつも市民が出入りできる博物館を「放課後博物館」と名付け、「それぞれの地域には、特徴のある固有の文化が育まれており、そこに暮らしていた人々にも固有の歴史があるはず。そうした存在を掘り起こす

ことこそ、地域の博物館の使命ということができるといえるでしょう。地域の再発見とは、価値の再発見でもあり、放課後博物館では、特にそのことにこだわらねばなりません」と地域博物館のあり方を述べている（浜口哲一、2000、181p）。

また、滋賀県立琵琶湖博物館は、館自体をフィールドへの入口という姿勢で博物館活動を展開している。博物館で展示される「モノ（物）」と「コト（出来事）」を入口として、フィールドとなる琵琶湖の理解へとつなごうという試みである。そのうえで、地域社会のネットワークづくりを進めようとしている（高橋哲一、1995、51p）

生活の場である地域の見直し、あるいは新たな課題の発見への期待の高まりとともに、「フィールド・ミュージアム」も上記のような博物館も現在注目されるようになってきた。自然科学の領域と人文・社会科学の領域の地域課題に即した、基礎研究の充実をはかりながらの学際的な取り組みは、地域博物館の条件とすらなっている（伊藤寿朗、1993、159p）。

規模は小さいながらも、その具体的な実践例として『フィールド・ノート』の編集作業を位置づけることができる。編集作業という表現の場をもつことで学生の自己教育力の形成や新たな交流にも編集作業は積極的な役割を果たしていることを私は学生や読者から教えられた。つまり『フィールド・ノート』そのものが博物館である、とも言えるだろう。

もちろん、編集の作業を通して収集した膨大な地域の記録をいかに学問的な批評に耐えうるレベルまで引き上げられるか、という課題もある。こうした課題の解決には、さまざまな領域の教員の参加による検討が有効であることは明らかである。

また、「知る」という行為は個人的な営為でありながら、協同の交流のなかで確められていく。このような立場からみると、地域の魅力や課題を引きだし解決の糸口を探るには、深い問題関心をもちつつ、自由で独立した⁶⁾学生や市民の自由な交流と参加による新たな関係を築く必要もあるだろう。

活動の担い手となる学生や教員の参加のもとに、編集を通して地域との人間的なつながりを創り出していこうという試みは、現在のところ他の博物館、大学ではほとんど実践例がない。たしかに学生は、ある一定の期間を経ると大学を卒業する。だが、この地域の人々の暮らしに目を向け、そこから地域の暮らしの知恵を発見したり、地域との新たな交流を生み出したりしようとする姿勢は、その魅力や課題を発掘し発信することを通して、地域住民と地域の文化、自然をつなぐ重要な役割を担うことになるだろう。それは自らを成長させることにも結びつく。そのような点からも本学のカリキュラムのなかに編集作業を取り入れる試みが検討されてもよい。

冊子編集の試みは、その意味を問うささやかな実践であった。しかし、私自身の実践は浅く、本稿ではこの実践が果たした効果について十分な分析ができていない。たとえば、参加した学生にとって編集作業がいかに自らの将来に結びついていくのか、また観察して知るという行為や、表現の場をもつことにどのような意味やはたらきがあるのかなどの考察は、今後の私の課題である。

最後に、この実践が短期間とはいえ継続できたのは、参加した学生、市民、教員のみなさん、そして読者の温かい励ましと支えがあったからである。この場をおかりして深く感謝したい。

補注

- (1) 都留文科大学以外でもフィールド・ミュージアムへの取り組みが始まっている。ここでは、他の取り組みと区別するために都留文科大学での活動を「フィールド・ミュージアム」と表記する。
- (2) 都留文科大学地域交流研究センターの刊行物。2005年3月時点で7号を発行。発行部数3000部。
- (3) 1982年に都留文科大学動物学研究室が中心となり設立した会
- (4) 「エラボレーション (elaboration)」という言葉にはいまのところ適切な日本語はない。エドワード・サイードの邦訳 (大橋洋一訳) では、「練り上げ」と訳してある。ここでサイードは、社会が音楽を練り上げる過程だけでなく、音楽が社会を練り上げる過程をも視野に入れ、音楽が必ず歴史や社会のなかで練り上げられることを述べている。これは編集という行為にもあてはまるだろう。
- (5) セレストアン・フレネ (1896-1966) : フランスにおける学校印刷機、現代学校運動の創始者として知られる。
- (6) 自由と独立した精神については、私は次のものから多くの示唆を得た。
 - ① ヘンリー・D・ソロー、今泉吉晴訳、2004、ウォールデン 森の生活、小学館
 - ② 内山節、1998、自由論、岩波書店

参考文献

- 伊藤寿朗、1993、市民のなかの博物館、吉川弘文館
今泉吉晴、1996、生涯学習の新たな地平、嶋田修一編、国土社
エドワード・サイード、1995、音楽のエラボレーション、みすず書房
エドワード・サイード、1998、知識人とは何か、平凡社ライブラリー
大江健三郎、1998、恢復する家族、講談社
大田堯、1989、地域の中で教育を問う、新評論
佐藤広和、1995、生活表現と個性化教育、青木書店
高橋哲一、1995、地域に根ざし世界をみつめる博物館をめざして - 琵琶湖博物館の紹介、地学教育と科学運動、(24) :51-56.
丹青総合研究所、1993、エコミュージアムの理念と海外事例報告、丹青総合研究所
浜口哲一、2000、放課後博物館へようこそ、地人書館

地域からの学び・実学からの学び

—Motto!学生地域活動支援プロジェクトにみる地域からの学びの可能性

都留文科大学 地域交流研究センター Motto!学生地域活動支援プロジェクト 水谷衣里

都留文科大学では、学生による自主的な地域活動が長年続けられてきた。これらの蓄積を積極的に評価し、学生の地域からの学びや実学からの学びとして捉えなおすプロジェクトが立ち上がった。それが学生地域活動支援プロジェクト（通称：Motto!）である。

Motto!では、04年度を通じて、学生による自主的な学びを、大学、特に社会科学が目指す地域社会からの学びとして関連付ける可能性を探ってきた。本論では、これまでのプロジェクトの経緯と成果を報告し、あわせて今後の課題についてもふれることにしたい^①。

1. 地域からの学びという可能性

1-1 はじめに

山梨県都留市は、東京都心から約80キロ、山梨県郡内地域（いまでは「東部富士五湖地方」のほうが通りがよい）に位置する地方都市である。

人口の約12分の1を大学生が占めるという当該地域では、長く教員養成を柱とする公立大学として、都留文科大学が存在してきた。人口3万人の市が大学をつくり維持することは、常にチャレンジの連続であった。

都留文科大学は、その設立経緯からも地域との深い関わりを感じる。古くから山梨県郡内地方の政治文化の中心地であった都留市では、山梨県に教員養成所を設置する動きがあった際、地域の有力者によって市内への強い誘致運動が起こった。（1953・54年度のみ）。城下町であった都留市で、学問の重要性を説いた当時の名望家層の存在が、それを支えたという。

その後市立短期大学を経て1960年に4年制に移行したが、短大時代から教員を目指す学生が、全国、特に地方都市から数多く集まった。公立大学であるにも関わらず、現在でも全国13箇所試験を行っていることは、本学の個性を考えるうえでも、また本学の活発な学生の活動を考える上でも、無視できない重要な要素である。

大学周辺には、約3000人の学生に対して3300を越すアパート/下宿が存在する。学生のほとんどが県外からやってくる都留文科大学では、大部分の学生が大学から約1キロ圏内に居住している。また、今なお共同型アパートに居住する学生も多く、このタイプを選択した場合、居住にかかる費用が1万円台というケースが7割以上である^②。

このような背景を持つ都留文科大学においては、開学当初から地域と学生の自然発生的な地域交流が芽生え、長く大学と地域との切っても切り離せない関係が形成された。そしてその流れは、近年に入りますますます加速している。

1-2 多様な学生の自発的地域活動

表1は、市内で30年以上にわたり、培われてきた学生の活動を一覧にしたものである(表1)。多様な活動の中から特徴をあえて述べると、次の3点に集約することが出来るだろう。

1つ目は、都留文科大学が教員養成系大学として成立したということによる影響である。つる子どもまつり、うらやま観察会、児童文化研究会などは、教員を目指す学生たちの実践の場として自らを位置づけている。

2つ目は、まちづくりを明確に意識した活動の多さである。三町商店街に関わる学生有志の活動、水と生きるまちプロジェクト実行委員会、つるまちづくりネットワークなどの活動は、活動主体である学生自身、明確に「まちづくり」という言葉を意識している。これらの活動に関わる学生は、授業で得た刺激をもとに、自らの考えを実践する場として、地域社会を捉えている。特に、つるまちづくりネットワークの活動の影響は大きい。市民と学生とがまちづくりをテーマに語り合える貴重な機会として誕生したつるまちづくりネットワークは、その活動をきっかけに大学に新しく6時間目という授業枠が生まれるなど、大学のカリキュラム自体に変化を起こすまでに成長した。

3つ目は、課題解決型活動の存在である。例えばそれは、学生リサイクル作戦に代表される。市内では、入学と卒業に伴い、3月から4月にかけて1400人を超す学生が転出入する。人口3万人の都留市に、それだけの量の廃棄物に対する処理能力はない。これに対して、学生が物々交換と資源回収という具体的なアクションを起こしたのが、学生リサイクル作戦である。

これらの活動は、どれも地域にとって非常に価値あるものである。都留という3万人規模の地方都市においては、これだけ層の厚い活動があること自体、貴重なことだといえる。学生という外部からの刺激が、経済的沈下からくる激甚な影響、地域としての個性の喪失や積極的に活動する人材の流出に歯止めをかけていることは間違いない。

一方で、学生の成長や学びという意味でも、これらの活動は比類のないものである。地域で活動することは、同世代の空間である大学から、異世代の空間に飛び出すことを意味する。学生は、地域の中から叱咤激励を受けながら、臨機応変に対応することや、その土地その土地の考え方の違いを肌で感じる。まさに、学生のうちに社会人としての経験の第一歩を得ていくのである。

このような状況の中、04年度に新しく誕生したのが、Motto!学生地域活動支援プロジェクトである。以下、そのプロジェクトに関して、詳細を述べる。

表1 Motto!学生地域活動支援プロジェクトからみる、地域に関わる学生団体の現状

団体名	固定メンバーの有無・数	活動目的	実績
水と生きるまちプロジェクト実行委員会	8名 (アドバイザー1名含む)	「地域の個性としての水資源」を手がかりに地域の価値再発見と大学-地域間の交流を促進する	01年度家中川清掃プロジェクトを実施。その後1年の実質的な休止・充電期間を経て03年度鶴水公園再生プロジェクトを開始。6回のワークショップを含む精力的な活動を展開した。
work-waku都留	学生20名～25名程度	大学の授業をきっかけに誕生。わくわく学級(公民館教育)、コミュニティーカフェ計画、アパート改装計画が進行中。	大学の授業を契機に誕生。現在は授業とは別の形で学科メンバー20名程度で活動をしている。わくわく学級は、公民館活動に新風を入れた。コミュニティーカフェは、市民が始めたコミュニティービジネスとリンク。実際に店舗を持って活動開始している。アパート改装計画では、実際に3名が居住を開始している。武蔵美大生有志の関与も。

団体名	固定メンバーの有無・数	活動目的	実績
学生リサイクル作戦	運営に関わる学生 (5名程度) +当日参加メンバー	毎春問題となる大量の引越しゴミを、学生の責任として分別・収集する事をベースに、資源の有効利用の為、物々交換を行う。家電リサイクル法施工後は、家電の収集代行も。	99年にゲリラの分別作成を開始。野ざらし状態で学内駐車場にゴミを“とりあえず”分別。 00年には大学生生課・大学生協・地域振興課・広域一部事務組合・収集業者を含めて関係性が確立。 TENTを借りることが出来る。 01年には家電リサイクル法施行に伴い、現金の取り扱い開始。新入生に対してはゴミ回収のみ。 02年には3号館の教室の貸与と3号館下駐車場5台分のスペースを借りることが出来た。荷物を置くスペースが出来たことから、新入生に対して物々交換を開始。
つる子どもまつり実行委員会	学生20名+ 市民実行委員	1年に一度、大学を開放し、市内の小中学生に遊びに来てもらう、「子どもまつり」を中心に、子どもの健全育成に関する活動を行う。	子供が遊べる場所を作ろうと、市民と学生がこどもまつりを実施。その後、市内の工務店や左官業等の組合、文庫活動を行う団体などと連携し現在の形に。 こどもまつりの他に、小学校2箇所で開催する「こがねっ子まつり」等。
児童文化研究会	学生20名程度	こどものよりよい成長・発達を願い、ボランティアによる子ども会活動や公演活動を行う	活動は、影絵班、児童文学班、人形劇班、地域子ども会班などに分かれて実施。つる子どもまつり実行委員会への参加なども。学園祭での公演や、幼稚園での公演なども実施している。
うら山観察会	学生20名程度	大学のうら山をフィールドに、自然観察を行う。また、市内の神社などでも、むささび観察会、こうもり穴観察会などを実施。	学生団体というよりも、市の生涯学習課から助成をもらう市民団体と参加者は自覚している。 小学生の間では観察会の人気は高く、20数年の実績を持つことから、地域からの信頼も厚い。
さんちょう商店街にかかわる学生グループ	学生3～5名程度	商店街活動を通じて、地域の現状と問題点に触れる。	山梨県助成のリーディング商店街事業の手伝いとして90年代後半から学生が関与。 01年度から現在関わりを持つ学生が積極的に中心商店街に出向くようになった。 その後、地域経済論が年に一度ゼミを商店街で開くなど新しい展開も。
つるまちづくりネットワーク	学生8名程度	まちづくりに関するネットワークを作り、積極的な活動や、新しい試みに関する情報を共有することで、互いの活動を知り、自身がアクションを起こすきっかけをつくる。	00年に県の市民大学講座を契機に発足。食に関するイベント環境活動、他団体との交流を含むイベントを連発。 01年度地域通貨の実証実験。 02年度は地域通貨の更なる本格的流通に取り組む。シンポジウムの開催も。 他に市民活動支援センターの設立準備の實質的担い手となる、各種審議会に呼ばれる、など行政と絡んだ活動や社会福祉協議会との連携も見られた。 地域に対しては学生の地域活動として比較的名度が高い。
ツルデザイン	学生5名程度	メディア系まちづくりを掲げ、編集・出版などに興味のある学生たちが集まり、大学の広報や入学生向けPRなどを実施。	社会学科都市環境設計論を中心に活動開始。 大学報の作成への協力など、編集やデザインに限定した活動を継続。
商工会HP作成をはじめとする商業関係者と学生の活動	学生4～5名程度	HP作成(とくつるネット)作成やお茶つぼ道中など、商業関係者が関わる活動全般に対する学生の関与。	01年度に「とくつるネット」(商工会が主催するポータルサイト)立ち上げに関する意見交換。これを契機に学生がお茶つぼ道中や八朔祭りなど商工会・商連関係のネットワーク構成アクターとなる。 主要メンバー卒業とともに立ち消えになってしまったが、都留市内の飲食店マップ(通称グルメマップ)作成などの動きも。これに関しては実際に商工会職員が関与。
グリーンコンシューマープロジェクト	学生10名	環境社会学ゼミを中心とする活動グループが、その後独立。	市内のスーパーなどを調査し、グリーンコンシューマーガイドブックを作成。 600部を社会福祉協議会や小中学校、市役所窓口や女性会館への留め置きで配布。 環境社会学に関わる授業での配布も実施した。
車でいけない都留	学生10名	都留市市民委員会助成金を元手に、都留市内のガイドマップを作成。	主要メンバーの卒業によりプロジェクトは終了。
文大生のための地域へ出て行くガイドブック編集委員会	学生8名程度	学生の活動をハンドブックに網羅的にまとめる。	「文大生のための地域へ出ていくハンドブック03」の作成と発行。

2. Motto!による地域活動支援

2-1 プロジェクトの課題

Motto!の目的は、学生の主体的な地域社会からの学び、実学から得る経験の醸成を支援することである。このプロジェクトは、03年度に都留文科大学に新しく設置された、地域交流研究センターの4番目の事業として立ち上がった。

プロジェクトに至る背景は以下のようにまとめられる。

1つ目は、上述のように学生による自主活動が、質・量ともに飛躍的に増加したことである。大学のカリキュラム、特に「地域」や「まちづくり」をキーワードとする講義の中から得た知見は、学生たちをまちへと駆り立てた。また、故郷を離れた学生は、意識的ではないが、自身の中に自然と今住む地域と故郷とを比較する目を持つ。そういった学生の集合体が、地方都市に存在することで、新しい活動が次々と誕生しているのである。

2つ目は、大学としての姿勢の変化である。近年、学内でも特色ある大学づくりの必要性が言われ始めている。文部科学省が推進する「特色ある大学教育支援プログラム」でも、「大学と地域・社会との連携」が謳われている。財政事情の厳しさが後押ししている面も否めないが、教員養成大学の特色作りの1つとして、学生の地域活動にスポットが当たっているといえよう。

3つ目は、地域の側からの要請である。都留市内からは、大学としての地域貢献を求める声が依然として根強い。特に近年、学生が市内で積極的な活動を続けていることもあり、学生に対するサポートを求める声や、大学として地域に関わる姿勢が求められるようになってきた。

このような学生の自主的な活動を取り巻く状況を、積極的にとらえ、またそれに応える形で始まったのがMotto!である。Motto!では、地域社会と自主活動というテーマの中に、座学を補完する学びのチャンスが隠されていると考えた。しかも、その活動は、学生がすでに主体的に行っているものである。この学びの源泉を、自主性を壊さない形でどう生かすことができるか、それがMotto!学生地域活動支援プロジェクトのテーマである。

2-2 プロジェクトにおける3つの柱

Motto!の活動は、いわゆるインキュベーションに関わる活動から、活動の実態がすでに出来上がっている団体の支援まで、射程範囲は広い。ここでは学生の自主性を重んじて活動を積極的に底支えすることから、いわゆるNPOの中間支援組織をモデルにしながら、支援プロジェクトを進めてきた。

学生地域活動支援プロジェクトでは、以下の3つを支援の柱として設定した。

1つ目は「情報発信支援」である。各団体の活動では後回しになりがちな、活動情報の発信を手助けすることが、その中心である。ここでは、いわゆるイベント情報や団体紹介といった内容ではなく、授業などの場で、学生自身の口から地域で活動することで感じた活動の醍醐味や魅力を、具体的に語ってもらうことを目指した。

2つ目は「情報共有支援」である。団体の持つ課題は、一見多様なように見えて、実際には共通する部分が多い。だが、学生自身、とくに団体の責任者や代表

者は、目の前の課題に必死になるあまり、孤立し、立ち行かなくなるケースが多い。そこで、それぞれの持つ課題を共有することで、孤立しがちな学生団体同士の協力関係を築くこと、課題解決のためのヒントを、学生自身が客観的に学びあうことを目指した。

3つ目は、「地域連携支援」である。都留のような規模の都市で活動する場合、学生は類似する活動を行う人や、自分たちの活動を支援してくれる人と、既知の関係である場合が多い。学生は、自分たちの活動のために労を惜みず市内を歩き、実に豊かなネットワークを築き上げているからだ。一方で、そのネットワークはきわめて属人的であるのも確かである。つまり、卒業や代替わりによって、簡単に消滅してしまうものでもある。そこで、Motto!では、個々が築いてきた信頼関係を基に、そのつながりを、より広がりを持つものにすることを目指した。

2-3 支援の上での考え方

これらの支援の柱を貫く考え方として、Motto!では次の点を特に注意した。

1つ目は、Motto!の支援によって、学生と地域の両者にプラスに働く方法を考えるということである。担い手である学生を育てたとしても、その学生は数ヶ月後、数年後に都留の町から巣立っていく。地域と大学には何も残らないようにも思えるが、教育機関である大学として、こういった人材育成は当然の努めであろう。また、重ねられた経験は、地域のプラスの記憶として蓄積される。この記憶は、また新たな積極層が登場したときに、次の展開を呼ぶものとして期待できると考えた。

2つ目は、学生団体の自主性を損なわない支援を行うことである。活動開始当初は、学生団体の協議会方式も視野にあったが、新しい組織を立ち上げ会議を増やすのでは、学生の負担を増やすだけである。そこで、Motto!が企画のアウトラインを描き、かかわりを持つ学生や団体には、中心的な役割から当日ボランティアまで、さまざまな関与の仕方を提示することとした。

3. 実学からの学び —そのプロセス

実際に学生地域活動支援プロジェクトが行った内容から、その学びのプロセスを紹介してみたい(表2)。

3-1 都留ツアー —まち歩きから考える

3-1-1 都留ツアーの趣旨

都留ツアーとは、文字通り、都留市内の「名所」を巡るまち歩きであるが、単なる名所めぐりではない。都留の町の個性を支える景色や産業、人に直接会い、その人の口から地域の魅力を語ってもらうものである。

都留ツアーは、地域の魅力を知らないまま、拒絶感を示す他の学生の姿勢に疑

表2 Motto!学生地域活動支援プロジェクト 今年度の事業一覧

事業項目	実施時期	目的	内容	関与主体
現代社会の課題での講義①	5月18日	新入生に、地域の活動を知ってもらい、町への関心を喚起する	・社会科学の必修授業である「現代社会の課題」を利用した地域の魅力発見講座 ・都留に来て間もない新入生を対象に、大学と下宿との住復では見えない都留の魅力を伝えることで、町への関心を呼ぶための講義を実施。筆者の説明を皮切りに、学生団体の活動を紹介 ・全体で50分程度	・Motto! ・水と生きるまちプロジェクト実行委員会 ・裏山観察会
都留ツアー1st	5月22日	町歩きを通じて、地域の魅力を発見する	・地域の持つ魅力を認識することを目的に、市内を散策するツアーを開催 ・5/18の講義とリンクさせ、ツアー全体を貫くコンセプトをMotto!が準備 ・地域経済論ゼミ2年生、水と生きるまちプロジェクト実行委員会、地域社会学会が作業分組、ルートの設定や、市民コメントを準備	・Motto! ・地域経済論ゼミ2年生 ・水と生きる町プロジェクト実行委員会 ・地域社会学会 ・山梨魅力メッセンジャー受講生
地域交流研究センター報に記事を掲載		「現代社会の課題」の講義と都留ツアーについて報告する	・地域交流研究センター報に、現社と都留ツアーについて原稿を執筆	・Motto!
現代社会の課題での講義②	6月29日	前回の授業をうけて、自分の身の回りがある地域に出てゆくきっかけを認識してもらう	・現在地域で活動している学生が、それぞれ自分たちが活動を始めたきっかけ、活動から得たことを新入生に伝える	・Motto! ・つる子どもまつり実行委員会事務局 ・グリーンコンシューマープロジェクト実行委員会 ・WORK-WAKU都留
都留ツアー2nd	7月3日	町歩きを通じて、地域の魅力を発見する	・地域の持つ魅力を認識することを目的に、市内を散策するツアーを開催 ・6/29の講義とリンクさせ、ツアー全体を貫くコンセプトをMotto!が準備 ・都留ツアー1stの経験を踏まえ、具体的な準備を地域経済論ゼミ生が行う	・Motto! ・地域経済論ゼミ2年生 ・地域社会学会 ・山梨魅力メッセンジャー受講生
地域社会論基礎ゼミでの活動紹介+都留ツアーPR	6月24日	地域社会論ゼミ生に、都留ツアーのPRをかねて、Motto!を知ってもらう	・授業の最初15分程度を頂き、活動紹介 ・なぜこのプロジェクトが立ち上がったか、どういう団体を対象としているか、など	・Motto!
グリーンコンシューマープロジェクトのコンサルティング	6月～7月末	奨励金問題と、その後の配布についてのアドバイス	・活動の行き詰まりを感じているグリーンコンシューマープロジェクト実行委員会と話し合うことで、活動の意義を再確認 ・地域での配布を希望していたので、ノウハウとつながりをアドバイス	・Motto! ・グリーンコンシューマープロジェクト実行委員会
社会科学部研究奨励金説明会	7月13日	社会科学部特別奨励金の募集に合わせた説明会	・研究奨励金を利用した活動を、今後さらに掘り起こし、同時に応募者に奨励金の位置づけと意義を理解してもらう	
Motto!意見交換会	7月14日	学生団体相互が顔をあわせるワークショップを開催し、相互の活動の意義や目的を自己学習する	・全体は2部構成 ・1部をMotto!の活動紹介と支援内容について、2部を学生団体の現状把握のためのWSにあてる	・Motto! ・学生団体有志 ・一般参加者
オープンキャンパス・リーフ作戦	7月24日	オープンキャンパスにあわせ、高校生に地域の活動紹介	・教室の廊下に、地域経済論ゼミの「都留まち探検」活動で作成している、まちの魅力発見ポスター（模造紙大）を展示するとともに、高校生に対して地域での活動の実際を紹介する	・Motto!
学生まちづくり学会への寄稿	10月2日	まちづくりに関わる学生や関係者に対して、都留文科大学での取り組みを紹介する	・都市工学、建築系の学生団体と、都市計画学会などが中心的な担い手となっている学生まちづくり学会への寄稿を通じて、都留文科大学の特色的な取り組みに対する社会的認知を高める	・Motto!
大学学長・学生部長・事務局長との座談会	10月14日	大学内でのMotto!の認知向上	・Motto!の活動紹介 ・学生の地域活動への大学の認識の共有	・Motto!
地域社会論Ⅱでの講義	11月8日	地域社会論を学ぶ学生にとっての具体例の提示	・筆者の経験をもとに、研究と、地域での実践をいかに結びつけるか、またそれが将来にどう働くかを紹介	・Motto!
Motto!地域へ出て行くガイドブックの作成	11月～3月	学生の地域活動に関する現時点での情報を集約する	・現在までに地域で蓄積された情報を、冊子にまとめ、経験や知恵が散逸しないようにする ・Motto!の活動成果をまとめる	・Motto! ・ガイドブック編集委員会 ・学生有志 ・卒業生有志

問を抱いた地域活動を行う学生有志によって、02年ごろからスタートした。当初は学生が自分たちの持つネットワークを使い、地域の中で協力者を得て行ってきたものである。

他方、同年から「山梨魅力メッセンジャー」認定講座がスタートした。これは、山梨の持つ魅力を学生に知ってもらい、「魅力メッセンジャー」として認定する制度で、山梨県が提



十日市場の湧水ポイントにて市民の方から解説を伺う。

唱しスタートしたものである。現在県内8大学が参加する事業となり、それぞれの大学ごとに個性ある講座が開講されている。

さらに、社会学科の地域経済論基礎ゼミでは、毎年「都留まち探検」が実施されていた。地域経済論基礎ゼミでは、毎年夏に行われるフィールドワークへの参加が必修となっている。その準備段階としての意味もあり、市内を自ら歩き、マップ作成を通じて、地域を見る目を養うことが「都留まち探検」の目的である。

昨年度、Motto!では、これらの個々の取り組みを、都留ツアーという形で重ね合わせることを試みた。そうすることで、ひとつひとつの授業や講義では得られない、より膨らみのある魅力的な内容に変化させることができると考えたからである。

都留ツアーは講義での案内と現地見学の2日間をワンセットとし、2回実施した。

1日目は社会学科1年の必修科目である「現代社会の課題」での講義である。「現代社会の課題」とは、社会学科の教授陣が専門分野への導入としてリレー講義を行う授業をさす。1年生にとっては、都留はまだ見知らぬ土地である。この授業の時間を頂き、大学と下宿の往復では発見できない都留の魅力を、スライドを交えて紹介した。

2日目は市内のまち歩きである。2回のツアーでは、それぞれのテーマを設定した。

1回目は「富士の湧水・水場ツアー」である。大学の西側に位置する十日市場の湧水を探検したり、都留市内を東西に流れる家中川沿いを歩き、都留市役所付近にある三の丸発電所を訪れるなどがツアーの内容である。家中川とは、山梨県から神奈川県を流れる桂川（相模川）から取水した水路である。市内のほぼ真ん中を通り、十日市場付近では稲作・畑作に利用され、旧市街地では織物産業の重要な動力であった。また、三の丸発電所とは、明治時代に出来た小水力発電の施設である。都留の豊かな水資源の魅力に触れるツアーとなった。

2回目は「谷村の旧市街地ツアー」である。都留文科大学は、20年ほど前にキャンパスを移転している。そのため、現在学生が生活する場所は、旧市街地に対して西側に位置する。そこで、学生が普段なかなか出歩かない旧市街地を、あらためて丁寧に探検するツアーを設定した。

ツアーの最大の特徴は、それぞれのポイントごとに市民の方にコメンテーターをお願いしたことである。

1回目の水場ツアーでは、水掛菜について、農家の方からコメントを頂いた。地域の気候風土が作り上げる豊かな恵みと、それを生かす知恵をお聞きするためである。また、都留の主要産業である絹織物業については、市内の絹織物業者の方から解説を頂いた。

2回目の旧市街地ツアーでは、谷村の町並みの成り立ちや、周辺の寺院について、住職の方や住民の方にお話を伺った。また、商店街振興の取り組みについては、商店主の方々から直接お話いただいた。そのほかにも、富士急行線の成り立ちについて、調べてくる学生がいたり、蔵や町並みについて、新しい視点から報告があったり、盛りだくさんの内容になった。

3-1-2 まち歩きの結果

2回のツアーで得られた成果を考えてみたい。例えば、今回のツアーでは、15名を超える市民の方が、市内の魅力を語る市民コメンテーターとして参加して下さった。大学を出て、都留市内で授業をすることだけでも画期的だが、15名の市民に事前調査をし、企画の意図を伝え、資料を作成するということが、通常授業の手間では考えられないことである。

また、学生側の成長も顕著であった。今回のツアーでは、1回目・2回目ともに、ツアーの当日資料としてマップの作成を課題とした。マップ作成と市民コメンテーターの方との打ち合わせには、地域経済論基礎ゼミ生や、学生団体会員、昨年までの都留ツアーの企画者である地域社会学会有志が参加した。

学生たちは当初、Motto!の持つ意図をよくつかめ切れない様子だった。だが、1回目のツアーを経験することで、こちらの企画イメージを的確に把握してくれた。その結果学生たちは、次第に自発的に地域へ出て行き、コメンテーターを引き受けてくださる市民の方を探してくるなど、こちらの想像を超えて活躍してくれた。つまり、学生は町を歩くことで、一般参加者として当日参加するのみの立場から、次第に仕掛け、運営する側へと変化をみせたのである。参加した学生のうちの何割かは、初めて市民の方と直接話したという。普段交流のないことの表れでもあるが、都留ツアーが突破口となって、町へでる手がかりとなったのではないかと考えている。

都留ツアーの場合、普段何気なく見ている風景を、単なる風景とはせず、そこから一歩進んで町の魅力を肌で感じる入り口となった。

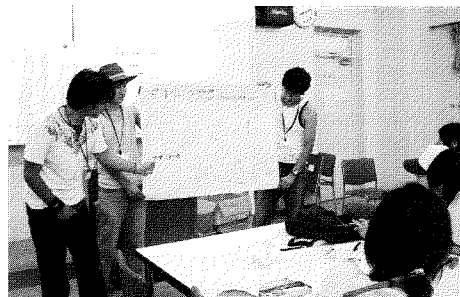
また、学生の自発的な学びの手応えを感じるという意味でも、意義深いものだった。

3-2 学生団体意見交換会 ―ワークショップによる自発的な学び

3-2-1 学生団体意見交換会の趣旨

もう1つ、学生自身の学びという意味での好例として、学生団体の意見交換会がある。

地域活動を行う学生団体は、それぞれ興味関心や活動内容もさまざまである。サークル活動や部活とは異なり、その実態は把握しにくく、活動する学生同士も、互いにどの団体



話し合いの成果を発表することで、意識の共有化を狙う。

がどういった活動をしているのか把握しているわけではない。また、顔をあわせる機会も限られている。

一方で、それぞれの団体が抱える悩みは共通している。そこで、Motto!では、学生団体相互の抱える課題を共有し、活動の価値や意義を再確認しあう場を実験的取り組みとして設けた。

意見交換会ではワークショップ形式を採用し、2つのプログラムを実施した。

1つ目は、Motto!を学生に知ってもらうためのプログラムである。当時、学生にはMotto!がプロジェクトとして成立したこと自体認識されていなかった。そこで、意見交換会では、実学からの学びのサポート組織としてのMotto!の意義や目指すところについて、理解を促した。

2つ目は、自分たちの活動を再認識するためのプログラムである。

例えば、自己紹介を兼ねて自分たちの団体の目指す姿や、自分たちが普段地域とどのように関わっているか、短い言葉にまとめカード化してもらった。同様に活動を通じて得た知恵や喜びを、ひとことで具体的に述べてもらった。作業自体はグループで行い、成果についてはファシリテーショングラフィックで可視化しながら全体で共有した。普段なかなか改めて考えることのない自分たちの活動を客観視し、活動のオリジナリティを認識してもらうためである。

3-2-2 学生団体意見交換会の成果

学生団体意見交換会の成果を考えてみよう。今回のワークショップの成果は、次の3つに凝縮される。

1つ目は、地域で活動に関わる学生が一同に会し、仲間の存在を認識したことである。ワークショップという具体的な場所を設定することで、普段顔をあわせることのない学生団体相互が互いに認識を持ったこと、これが意見交換会の1つ目の成果である。

2つ目の成果は、課題の明確化である。地域で自発的に活動する団体の多くは、代替わりや広報の不足から来る人員変化、経験不足からくる迷いを共通の悩みとして抱えている。ワークショップは、これらの悩みを解決する特効薬を提示する場ではない。だが、共通する悩みや問題意識をもつ仲間の存在を認識する場にはなる。学生相互が悩みを互いにさらけ出すことは、今後考えるべき課題を明確にすることに繋がる。

3つ目の成果は、大学に対する認識の変化である。学生はそれまで、地域交流研究センターのオープンを目にしていても、その実際や自分たちとのかかわりを実感できる機会はほとんどない。また、それまでは、大学の学生の自主活動に対する認識を、直接知りうる機会はなかった。ワークショップをきっかけとして、Motto!の存在や、地域交流研究センターについて理解したことは、学生達が大学の姿勢の変化を肌で感じる結果となった。

3-3 記憶の共有と新しい積極層の掘り起こし -ガイドブックの編集・発行

3-3-1 ガイドブック作成の趣旨

3つ目の事例は、「文大生のためのMotto!地域へでていくガイドブック」の作成である。2年前、学生有志の間から、地域で活動することで得た経験をまとめ、記録しようという動きが登場した。2004年春、団体紹介小冊子という形で、1冊目のガイドブックは作成された。Motto!では、このガイドブックを内容的にも充実させ、1年間のプロジェクトの成果と合わせ、2005年度の新入生に配布をした。

ガイドブック作成の狙いは2つある。ひとつは、学生たちの貴重な経験をまとめること、もう1つは冊子の作成を通じて、地域活動を大学の個性として発信することである。冊子作成は、学生が培ってきたオリジナルな経験を、目に見える形にすることを意味する。拡散しがちな自主活動の情報と経験をまとめておくことで、これからの大学の支援のあり方を考える糸口にしたいと考えた。

ガイドブックのテーマは、「このまちで、何ができるか?」とした。意図は、自分たちが暮らす地域を、何もないと否定的なまなざしで見るとはならず、ここでしか出来ない何かに取り組み、そこから学ぼうとする文大生の姿にスポットを当てることにある。学生はさまざまなことを地域から学んでいる。また地域には、学びを支える住民がいる。ガイドブックでは学生たちが日々している発見や学びと、それを支える地域の豊かさを価値あるものとして発信することを目指した。

3-3-2 関わり方を用意する

ガイドブックは、全84ページ、4章で構成されている。冊子の作成には、さまざまな形でのかかわり方を用意した。

例えば取材ボランティアである。ガイドブックの第3章では、普段学生団体を支えてくださる地域の方へのインタビューを特集した。Motto!のコーディネートのもと、実際の取材と執筆は、地域経済論ゼミほか、学生有志が担当した。

ガイドブックの第2章は、各団体の代表者が執筆した。それぞれが活動を通じて得た悩みや喜びを、自分たちの言葉で述べてもらい、自分たちの活動を客観的に見つめなおすためである。

ガイドブック第1章では、特に2つの団体を特集した。学生が地域に対して積極的に行動を起こすきっかけは、ほんの些細なことであることが多い。だが活動が軌道に乗るまでには、さまざまな試行錯誤がある。この試行錯誤の過程をケーススタディとして取り上げ、学生がどう悩み、どう学んできたのかを記したいと考えた。いわば「学生活動虎の巻編」である。活動の過程を細かく記述してもらうことは、いずれ何らかの活動を起こそうとする学生の参考にもなり得るし、Motto!としてもこれからの大学内の支援体制を考える糸口になる。

また、取材や執筆以外の関わり方としては、ガイドブック編集委員会の存在が大きい。ガイドブック編集委員会は、卒業後に編集・出版といった業界での就職を希望する学生が集まっている。ガイドブック作成を通じて、実践的なトレーニングを積み、学生の経験にもなるよう、心がけた結果である。

4. 1年間のプロジェクトから考える ー大学にとっての地域活動支援とは？

4-1 自発性の尊重と評価

Motto!は今年度、きわめて実験的にプロジェクトに取り組んできた。1年間のプロジェクトを通じて、これからの大学にとっての地域活動支援のあり方を検討したいと考えたからである。

この視点から、今回のプロジェクトを振り返ると、2つ重要な点がある。

1つは学生たちの成長意欲の高さである。

学生たちは、場や機会を提供されれば、驚くほど力を発揮し、成長する。都留ツアーの例では、Motto!のごくわずかなガイダンスとコーディネートのみで、学生は実際の地域を歩き、魅力的な場所やキーパーソンを発掘してきた。ガイドブックの例では、学生たちに関わり方の選択肢を多様に準備することで、新しい視点から地域活動に興味を持つ人材を発掘出来た。

都留文科大学の場合、大学の音頭取りや誘導で地域活動が始まったわけではない。むしろ、学生たちはかねてから積極的に地域で活動し、そこから自主的に学んできた。このような自発的取り組みを、講義やゼミとうまくリンクさせたり、都留ツアーのように出会いの場所をコーディネートするだけでも、経験を深める機会は確実に増える。

もう1つは、学生たちの活動を、きちんと評価する必要がある。

地域交流・貢献にはさまざまな形がある。教職員による出張講義や小中高大連携など、その形は一義的ではない。だが、大学にとっての地域交流をそこを支えるもののひとつが、大学生の地域活動だろう。そして学生の地域活動は、すでに地域にとってもかけがえのないものになっている。

では、このような活動を再認識し、評価を具現化するには、どのような方法が考えられるだろうか？

4-2 これからの支援のあり方を考える ー評価の具現化に向けて

1つには組織的・組織的な対応である。

大学が、地域にとって知的資源のハブ機能を果たそうとすれば、地域活動に関わる学生と住民に対して、広く門戸を開く必要があるだろう。それは1つには、施設開放などの物理的な開放を意味する。もう1つは、カリキュラムという、大学の主旨にも関わる内容である。例えば、近年地域での出前授業や、夜間講義などが少しずつ現れてきている。大学のカリキュラムのうち、実学や地域と関わるものに関して、関連可能性を具体的に追及する必要があるだろう。また、現在学科や後援会で実施している研究奨励金や特色ある研究活動支援制度を、コンペ形式のオープンなものにすることも考えられる。これらの支援制度は、地域をテーマにしているとは限らない。しかし選考の過程をオープンにすることは、自ら考え行動することに意欲的な学生を、十分に刺激するだろう。

もう1つは学生個人にフォーカスしたコンサルティングである。

個々の学生は、自分たちの設定したテーマに対して一心に取り組んでいる。だが、学生だけの力には限界がある。また、学生たちはその経験の未熟さから、時に迷い、途方に暮れることもある。Motto!が支援の対象としているのは、自発性

に立脚した活動である。だが、学生が活動に迷いを感じ、展望を失ったとき、その原因を自分で見つけられるようなネットワーク作りの支援は、「地域を考える大学」として存在意義を発揮しようとする、都留文科大学にとっても最低限必要である。

特に、活動の継続性に関しては、ほとんどが4年という限られた時間で地域を後にするという、学生に特有の事情がある。活動を単に固定化することは、必ずしも望ましいことではない。また、大学が学生の自発性に介入することも求められていない。しかし、地域で培った知恵とネットワークを簡単に消滅させないこと、その蓄積に労力を傾けることは、学生・大学・地域にとって、決してマイナスではなからう。

また、学生は、地域での学びをきっかけに、今後のキャリア形成を考えるきっかけを得ることが多い。それに対して大学が真摯に向き合うことは、表層的な内容に留まらず、学生の歩いてきた途を尊重した就職支援にも繋がり得る。

今年度、Motto!はきわめて実験的にプロジェクトを進めてきた。プロジェクトを進める中で、地域活動が学生にもたらす教育的価値、地域にもたらすまちづくりとしての価値、その両面が認識できた。

これらは、長年の学生と地域住民の共同作業によって耕されてきたものである。あとは、ここに価値を見出し、大学として具体的に支える姿勢を見せることが必要だと考える。

(1) 筆者は04年度、都留文科大学地域交流研究センターで、学生地域活動支援プロジェクトを企画、コーディネートする立場にあった。本論は、そこから得た知見を基に執筆したものである。なお、執筆した内容は、プロジェクト担当した千葉立也教授および筆者が、1年間にわたって実施したプロジェクトの成果と、ディスカッションによる共通認識を基礎としたことを記しておきたい。

(2) 都留文科大学生活協同組合 下宿問題小委員会HPより
<http://www.tsuru.ac.jp/~seikyo/top.htm> 05/03/31

都留の近現代史料調査

都留文科大学 社会学科教授 高岡 裕之

(1) 本プロジェクトの経緯—もしくは顛末

都留市をめぐる地域史に関しては、既に一定の蓄積があり、また都留市史編纂委員会によって『都留市史』通史編および資料編が刊行されている（1986～1996年）。しかし山梨県では近代史、とりわけ大正期以降の地域史についてはあまり研究が進んでおらず、『都留市史』通史編においても、この時期の叙述は十分とはいえない。都留市域の近現代史については、今後本格的な研究が必要とされている。

ところで、近現代の地域史を研究する際の基本資料は、①地域の公文書、②区有文書、③各種団体・個人所蔵資料、④地域で刊行された新聞・雑誌・書籍等である。『都留市史』でもこれらを収集・利用しており、その所在を確認することが、今後の研究の出発点となる。そのうち①地域の公文書＝旧町村役場文書（市制施行以前）については、箱詰めされてミュージアム都留の資料収蔵庫に保管されていることが確認されたが、膨大な分量に上る資料群の目録は出来ていないというミュージアム側の回答であった。しかし旧町村役場文書を利用可能な状態にするためには、資料目録作成が不可欠である。そこで本プロジェクトは、ミュージアム都留所蔵の旧町村役場文書の整理と目録作成を主眼として発足することとなった。

ところが上記のような計画は、現在ではその基本部分において変更を余儀なくされている。その理由は、計画の目標に置いていた旧町村役場文書の目録が、既に作成されており、ミュージアム都留に保管されていることが明らかになったためである。すなわち、ミュージアム都留では、平成16年度山梨県緊急地域雇用創出特別基金事業として、甲州史料調査会の協力を得ながら、「ミュージアム都留収蔵資料の分類・整理、データシート、データベース作成」事業が実施された。この事業の過程において、旧町村役場文書目録の存在が確認されたのである。これは『都留市史』編纂準備として作成されたものと考えられるが、編纂事業終了後利用されることがなかったため、その存在自体が忘却されていたのであろう。ともあれ、その作成に最低2年はかかると見積もっていた旧町村役場文書目録は、既に完成していた訳である。

(2) 今後の課題—特色ある谷村町の行政

以上のような事情により、本プロジェクトは旧町村役場文書目録の作成というステップを省略することが可能となった。そのため本プロジェクトでは、市域における史料調査を柱の一つとして残しつつも、今後は旧町村役場文書の検討に重点を置いた、より研究的色彩の強いものへと移行することにした。

旧町村役場文書の具体的検討はこれからであるが、現時点において担当者（高

岡)が注目しているのは旧谷村町(1896年町制施行)の行政のあり方である。谷村町は、1910~1930年代を通じて、人口8000~9000人台の「町場」であった。一般的に当該期におけるこの規模の自治体行政は、村役場と大差ない消極的なものが多い。ところが谷村町役場の場合は、町立高等女学校の経営(1931年3月県立へ移管)をはじめ、上水道の敷設(1923年4月通水)、町営電気事業の開始(1923年12月)、町営職業紹介所の設置(1926年5月)、町営公益質屋の開業(1934年5月)など、さまざまな町営事業を有するようになっていた。このことは谷村町の行政が、小規模ながらも都市型の行財政構造を形成していたことを意味している。

こうした町行政のあり方は、谷村町民と町役場の関係が極めて密接であったことを示唆しているように思われる。またその背景として、甲斐絹業界の動向や、南都留郡役所、県立工商学校の存在も無視できない。いずれにせよ、谷村町は全国的にみても早い段階から、特色ある「地域づくり」を行ってきた地域であることは間違いない。以上のような見通しの下に、今後、都留地域の近現代史の特色を具体的に明らかにしていきたいと思う。

「総合学習」開発と学力問題

都留文科大学 教授 佐藤 隆

I 危機に立つ総合学習

(1) 「総合的な学習の時間」の提起

今日の学力と学習のあり方をめぐる状況は、「混迷」を極めているといっても言い過ぎではない。この「混迷」の性格をとらえるためにこの10年間を振り返って見たとき、そこには、1960年代以降の日本の教育を性格づけてきた競争の教育の動揺と再編成の過程が見られる。1980年代後半ぐらいから、「不登校」児童・生徒の急増や、それまで通用していたはずの指導や学校の文化が子どもたちに簡単に拒否されたり無視されたりするという現象がどこの学校でもみられるようになった。こうした事態にたいして、1990年代に教育政策側から出された一連の「答申」文書では、その政策的意図はともかく、一元的能力主義のもとでの「受験競争の過熱」が教育問題の中核をなすととらえ、その克服をカリキュラムと評価の規準の組み替えによって果たそうとした形跡が見られる。

たとえば、90年代初頭の『学習指導要領』の改訂によって、小学校低学年においては生活科が導入され、社会科・理科といった教科教育へのはやくからの分化を抑制し、より子どもの具体的な生活に即した認識のあり方に注目するようになったこともそのひとつである。また、評価の規準と方法に関しても、「関心・意欲・態度」や「生きる力」を強調する特徴をもつ教育のあり方が模索されるようになった。そこでは長く民間教育運動の側から提起されてきた「生きる力を育てること」を政策当局自らが標榜するという劇的な変化さえ見られたのである。

さらに、90年代半ばにはこの路線をいっそう進めるかたちの方策が提案されていく。第15期中央教育審議会では、小学校のみでなく、中学・高校までを含めて、「教育内容の厳選の原則の下、新たな社会的要素（情報教育、国際理解、環境教育など）に対応するため、横断的・総合的な学習を推進」することが強調され、これに基づいて『学習指導要領』が改訂されることとなった。

この答申を受けて改訂された『学習指導要領』「総則」には次のようにある。

「①各学年が創意工夫を生かした特色ある教育活動をいっそう展開できるようにするための時間を確保する必要があること②また、自ら学び自ら考える力などの『生きる力』をはぐくむために、既存の教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習を実施できるような時間を確保する必要がある」。

以上の趣旨をふまえたものとして、具体的には次のような特徴を持つ「総合的な学習の時間」の設定が提起された。

それは第一に、「総合的な学習の時間」をいわゆる「教科領域」とはせず、教科横断的であるとともに必ずしも教科領域で学習する内容との連続性を意識する必要がないこと。第二に、この「時間」に関しては、指導要録上の評価は必要ないこと。第三に、年間授業時数は示されているが、1コマ45分間という固定的な時間枠にとらわれる必要がないこと。さらに重要なのは、この「時間」に関する教育内容と教育方法は、『学習指導要領』の拘束を離れて教師の手にゆだねると

いうことを『学習指導要領』自身が指示するという、ほぼ60年ぶりの事態が出現することとなったのである。

このような転換を前に、「総合」に関する研究や実験がおこなわれたのは記憶に新しい。

1999年度からの継続的に行われている都留文科大学附属小学校における「総合的な学習の時間」の取り組みも、この『学習指導要領』の改訂方向にそって進められてきた。附属小学校以外の都留市内すべての小学校も同様に、「先導的試行」としてこの年から、年間数時間（おおよそ20時間）程度を使い、また月一回程度研究会をもつなどして、2002年からの本格的な実施に備えた（附属小学校平成14年度研究紀要『生きる力を育む総合的な学習の実践』）。こうした経験をふまえて、「総合的な学習の時間」を地域の特色が学習課題となるような工夫を都留市内各学校はそれぞれに凝らしてきた。

たとえば、谷村第二小学校では「わくわくタイム」と称して、「子ども自ら課題を設定し、それを主体的に解決していくための手だて」としての学習に取り組むとともに、内容的には学校外へ出かけ地域を知るという活動を比較的重視している（谷村第二小学校平成13年度研究紀要『自ら学び、生き生きと活動する子どもの育成』、平成14年度研究紀要『研究のあしあと』など）。また、他の学校でも同様に「総合的な学習の時間」設置の趣旨をふまえた努力がいまなお続けられている。都留市教育研修センターでも「総合的な学習の時間」についての特別な研究体制を組み、各校の実施状況を把握し、地域の教育資源の有効かつ効率的な活用する上で一役かっている。こうした活動は、後にも述べるが、今日の「学力低下キャンペーン」のなかで他の地域の学校が早々と「総合的な学習の時間」を「基礎・基本」の理解と習熟の時間に振り向けているという現状からすれば、注目してよいことと考えられる。

ふたたび附属小学校に話を戻して言えば、「生きる力をはぐくむ総合的な学習の実践」と題して実践・研究活動がいまなお継続的に進められている。これらの活動は『学習指導要領』に示された枠組みを現時点では超えるものではないが、研究の過程において「教科学習などで行ってきた、これまでの指導方法から拭き切れていないのではないか」、「研究が深まるにつれ、子どもたちの主体性を引き出す支援、評価のあり方」「一・二年生の学習内容との関連」等の課題を実際の経験に即して確認してきており、同校独自の課題として認識されてきていることに注目したい。とりわけ、「付属小の実態にそった単元」の追究が意識化された実践が近年展開されている点は重要である。

昨年度の四年生で取り組まれた「私たちの都留自慢」（白水明子実践）にも、この点が強く意識されている。これについては、この実践に参加して学んだ学生（石谷祥子）の卒業論文「総合的な学習と教科学習」（2004年度都留文科大学文学部初等教育学科卒業論文）を通して簡単に振り返っておきたい。

白水実践は、一・二年生での生活科での学習「はないっばいになあれ」（平成14年度）での農業疑似体験や三年生での「身のまわりの自然のふしぎ」（平成15年度）を通して、都留市という地域の自然に関心を持ち始めている実態を重視し、「自分が関心を持ったことや興味を持っていることについてさらに調べたり、地域の人や専門家から教えてもらったりして、自慢できることとして発信していきたい」とするものである。

実際に子どもたちが選んだテーマは「動物」「川や水」「樹木」など自然環境に関するものが多かったことが示しているように、都留市（附属小学校）と自然と

のかかわりをもった生活を子どもたちが強く意識していることがわかる。
実際の活動については、前出の石谷論文には次のように記されている。

11月29日、3・4時間目の「総合」の時間に、「樹木」グループの活動に参加した。この日は、森江晃三先生（本学名誉教授）を招請し、学校のまわりの木の名前や特徴などについて調べた。この活動は、インター・ネットや図鑑などで調べるとする方法をとることもできる。しかし、森江先生というゲストとともに学んでいくという方法をとったのは、子どもたちの疑問に、専門家や地域の人に答えてもらうことや関係施設の訪問等を行うことを支援することが「子どもの意欲を持続させるポイント」であり、都留市を、個性をもった主体性のある地域として認識させる上で重要だとする立場からである。

（この日の）活動は、校庭のまわりにある樹木について森江先生に質問しながら、樹木の名前と特徴や様子を書きとめ、写真を撮り、実際に採取した。裏山の木々についても同様におこなった。校庭で調べているときから、子どもたちは早く裏山に行きたい様子で、裏山に行くと、どんどん上に登っていき、珍しい葉などがあるととってきて森江先生に質問していた。見た目はとてもよく似ていても、実際に葉に触ってみたり、よく観察することで「ちがう木だ」と理解する子どもが多い。

都留市街からやや離れ、里山が間近に迫る地域にある同校の子どもたちにとっても、日常的に自然に接しているとはいえ、それらの植物がどのように分類され、それが自分たちの生活にどのようなかかわっているのかを知ることは、おそらく専門家の力を借りることなしには難しい。事実、この授業の前の子どもたちの植物にたいする理解はきわめて浅いものであり、理科で学習する内容は、植物の機能については理解していても、それらが自分の周囲にどのような状態で存在しているのかということとは直接には結びついていなかった、ということである。

しかし、この学習を「自分（子ども）の生活のなかに還元したり、地域に対して自分なりの考えをもつことや地域の自然を残していくこと、つまり環境問題について考えていくことにつな」げるという教師の意図と専門家の力量が合致するとき、子どもたちの認識と関心は飛躍的に深まっていく。

同校の実践は、いまだにテーマが国際理解、環境など『学習指導要領』の提示する枠組みから自由ではないということや、教師の側にやや性急に「環境」問題として「道徳」化する傾向が見えるなど、課題が多いとはいえ、「総合的な学習」がある特定の条件のなかで深まりを見せる一つの可能性を示すものといっていよいのではないだろうか。

(2) 「総合的な学習の時間」への批判

ところで、「総合的な学習の時間」の実施に対しては、「生きる力」を育てる教育実践の糸口を探るものとして大きな期待が寄せられた一方で、さまざまな批判が寄せられたことも事実であった。

とりわけ、教師の教育の自由を主張する立場から『学習指導要領』の法的拘束性を批判し、本来ならば「総合的な学習の時間」に保障された実践の自由を歓迎すべきはずの教職員組合団体や民間教育研究運動の側からの批判が実施当初は目

立った。それらは、「総合的な学習の時間」の導入に際して、何らの条件整備が行われないなかでは教師の負担増となること。また、上記団体に所属する教師たちの多くは、従来の教科のなかですでに「総合学習」的な教育実践を試みており、平和や人権についての学習、あるいは地域と子ども自身の課題を読み解き結びつける学習などの豊富な蓄積からすれば、むしろ『学習指導要領』が提起する「環境」、「福祉」、「情報」、「国際理解」という枠組みに、学習の課題が限定される危険性があることへの危惧もあったからである。

しかし、今日の時点でより重視しなければならないのは、「総合的な学習の時間」の実施それ自体が「学力低下」を引き起こすという立場からの批判であった。この立場からの批判が以後の文部科学省の政策にも大きな影響を与えるとともに、マスコミを巻き込んだ「学力低下キャンペーン」の潮流をかたちづくったからである。当時、こうした立場から数多く出された「総合的な学習の時間」批判のなかでも代表的な出版物の一つに『学力低下と新指導要領』（西村和雄編、岩波ブックレット）がある。これは、『分数ができない大学生』等の一連の著作で反響を呼んだ数学者・経済学者らのグループによるものであるが、同書の主張は、2002年の「完全週休二日制」とあいまっての「総合的な学習の時間」の導入は、教科学習の内容と時間の削減となるという単純な事実によって、子どもたちの「学力低下」は避けがたいとするものであった。

とりわけ、「1980年頃からの『ゆとり教育』『個性化教育』という名の下で学校でも家庭でも『子どもの勉強離れ』を容認した結果」が今日の「学力低下」を生んでいるという「ゆとり教育」批判は、はたして80年代・90年代の教育を「ゆとり教育」と言ってよいのかという議論の余地すら与えぬまま、今日の学力と学習をめぐる議論の際に無視できない影響力を持つに至った。

また、この主張を補完しつつ登場した、学力が階層格差をともなって獲得されるという論点も重要である。こうしたものの一つに教育社会学者として教育改革論議にかかわってきた荻谷剛彦の諸論攷がある。荻谷は志水宏吉らとの共同研究である、論文「学力低下の実態に迫る」のなかでは、大阪の小・中学校27校2200人を対象とした大規模な調査を行い、同一問題の正答率が12年前に比べて著しく落ちているという結果をもとに基礎学力は大幅に落ち込んでいると結論づけた（荻谷剛彦「学力低下の実態に迫る」『論座』2002年6月号）。同時に荻谷は「勉強離れ」が成績の下位や中位の生徒の間で進行しているが、それは親の職業や学歴などの階層差を反映しており、「ゆとり教育」の継続は、結果的には階層による「学力格差」を一層激しくせざるをえないことを指摘している。そのうえで公教育制度のあり方について「さまざまな学習の基礎となる部分への影響として基本的な生活習慣の有無が示している、家庭の文化的環境や階層差の問題に目を向けるべきである。義務教育段階では、できるだけ学力格差が拡大しないようにしておくことが公教育の重要な役割のはずだ」という課題を提起している（荻谷剛彦「学力低下論争は終わった」『論座』2003年4月号）。

こうして問題はひとめぐりして、90年代前半から問題とされてきた「受験競争の過熱」のもたらす弊害については不問に付されたまま、ふたたび強迫的な学力獲得への雰囲気醸成へと焦点づけられるようになった。これらは「学力が中位以下の子どもは切り捨てられるのではないか」という保護者の不安をかき立て、公立学校に対する信頼を失わせるとともに、再び単純な学力獲得競争に子どもたちを囲い込む雰囲気をつくり出している。

文部科学省自体も、これら「学力低下キャンペーン」によって、自ら発行する

『学習指導要領』を軽視する対応を見せ始めたことで、保護者の不安や教師の混乱は現実のものとなっていった。文部科学省は、新『学習指導要領』実施直前の2002年1月になって「学びのすすめ」と題する文書を発表した。ここでは、新『学習指導要領』そのものを撤回するわけではないが、「学力低下」論に配慮するかたちで「少人数授業・習熟度別指導など、個に応じたきめ細かな指導の実施を推進し、基礎・基本の確実な定着や自ら学び自ら考える力の育成を図る」や「『学習指導要領』は最低基準であり、理解の進んでいる子どもは、発展的な学習で力をより伸ばす」などの方針を示した。

こうした雰囲気の中で、学力回復のための基礎・基本の重視、習熟重視論が急速に台頭していることが最近の特徴となっている。しかし、これらの議論の特徴は、学力とはなにかということは一切問わないままに、テストで測られる「学力」をまずはつけさせるための方法の探求にその力点が置かれている。

たとえば『本当の学力をつける本』（文芸春秋社）で注目を浴びた陰山英男の発言や著書も「理解よりもまず練習」という立場が強調されている。

しかし、疑問なのは、『本当の学力をつける本』という題名とは逆に、学力とはなにかについての一切の言及がないことである。そのかわりに「子どもを伸ばす」というきわめて抽象的な表現のもとで、「基礎鍛錬」を子どもに強いることが学校教育の中心的な課題だとされていることである。同書では、「学力づくりは『基礎鍛錬』という子どもへの負荷からはじまります」、「何問も同じタイプの問題を解く」、「まずできるようにしてしまうことを優先する」などの言葉が繰り返される。

結局、陰山のこうした主張では、学ぶ主体である子どもの内面はかえりみられることなく、学力（の基礎）がつきさえすれば学習への集中力が生まれてくるという予定調和の構造となっている。

陰山の主張をはじめとして、今日の「学力低下＝基礎・基本重視」論の多くは、それぞれの教科や学習課題が、目の前にいる子どもたちの「いま」にとって、どのような文脈で必要なのかということの探求には向かわない傾向が強くなり、結果として教科書や『学習指導要領』が指示する学校知識の獲得量に学力は還元されている。

II 国際学力調査から見た学力低下の本質

昨年末にOECDによる生徒の学習到達度調査（略称PISA）と国際到達度評価学会（IEA）による調査が相次いで発表された。調査の目的・性格や調査への参加国もちがう二つの調査であるにもかかわらず、マスコミは、どちらの調査でも、日本の子どもたちの学力は前回調査に比べて相対的に下がっているという結果が報告されたことでこの数年間言われ続けてきた「学力低下」が実証されたといっせいに報じた。

しかし、いま問題とされている「学力低下」論それ自体が、日本社会独特のとらえられ方で議論されていることには特別な注意が必要であろう。とくに財界や政府関係者、そして先述の「学力低下＝基礎・基本重視」論者の多くが口にする「子どもたちの学力が低下しているから、このままでは日本の将来が心配だ」とする論法の背景には、これまで日本の子どもたちは高い学力水準を維持してきた、そしてそれが日本の経済発展や国際的「地位」を支えてきたという認識がある。

しかし、そのことだけにとらわれた議論の枠組みにこそ問題が存在していることにこそ注意を向けるべきであろう。それは、これまでの「好成績」は、日本の学校で求められてきた学力が、「受験」を念頭に置いた操作への習熟と記憶の量を中心とした知識の獲得を中心に考えられてきたことの反映でもあると言えるからである。

この点について民間教育研究諸団体は、そうやって獲得された学力の性質を「日本型高学力」と名づけて次のような問題を指摘してきた。それは、第一に、日本の子どもたちは操作はできるが意味を理解していない傾向が強い。第二に、学習を「きらい」「苦しい」と感じている度合いが高い。第三には、獲得したはずの知識も、受験などが終わると急速に忘れてしまうような「はく落」する性質を持っている、というものである（須藤敏昭『日本型高学力』の現在と『学力低下』論議『教育』2000年3月、久富善之「競争の教育のゆくえ」『教育』2000年3月など、参照）。

したがって、二つの国際的な調査の結果のなかで注目すべきことは、表面的な得点の低下ではなく、なぜ、このような結果になったのかといういねいな分析である。

IEAが、学力調査と同時に行っているアンケート調査でも、「数学がすき」「数学が生活や職業選択に役立つ」などを含んで「数学に積極的に取り組んでいる」と答えた日本の中学生はわずか17パーセントにすぎず、国際平均の55パーセントとは大きな開きが確認されている。また、PISA調査においても同様な傾向が確認できる。たとえば、「学校評価指標の各質問項目への回答」によれば、「学校なんて時間の無駄だった」という質問に対して「全くその通りだ」「その通りだ」という回答の合計は10パーセントを超えており、OECD加盟国の平均を3ポイント上回っているし、「学校は仕事に役立つことを教えてくれた」とする質問に対しての否定的な回答の割合は40パーセントに上り、これはOECD加盟国の平均の約4倍となっている。これらの結果は、学校で教えられ、学ばれる知識（学校知識）が、子どもたちにとって必ずしも魅力的なものとなっていないことに起因するものとみるべきであろう。

また、今回の調査でクローズ・アップされたもう一つのこと、階層格差と学力格差の相関が類推できるような結果が明らかにされたことである

PISA調査でいえば、得点が高いとされる「レベル5」以上の生徒がこれまでと同様にかなり高い割合で存在するということと、その一方で、得点の低い「レベル2」以下の生徒が増えており、それが全体の平均点を押し下げているということであった。これが、菊谷の言うような「格差是正」をふくんでの「競争の教育」復活（「ゆとり教育」批判）論を勢いづける根拠となっている。

しかし、ここにみられる「学力格差」は、各家庭の「文化的資本」を背景としつつ、競争的学習動因の強弱が反映しているのであって、けっして「高得点」レベルの子どもにとって学校知識が魅力的なものとなっている、という証拠にはならない。むしろこれまでの「日本型高学力」の問題点は「高得点」レベルの子どもたちのなかに引き継がれているとみるべきであろう。

そうだとすれば、「学力低下＝基礎・基本重視」の立場から「競争の教育」の復活を求めることこそ本末転倒の議論であり、「日本型高学力」をつくりだした学校のあり方こそを本格的に問題にするべきことが、今回の国際的な学力調査からえるべき教訓でなければならない。

Ⅲ「総合学習」開発の提起するもの

この点で、あらためて「総合的な学習」の持つ可能性を今日の時点で整理してみることがどうしても必要となってくる。「総合的な学習」を支える理念のなかに、「日本型高学力」を生み出した学校のあり方を鋭く問い、新しい学習のあり方を展望する契機があるからである。それは、第一に、日本の教育を「事実上画一化するもの」として教育研究運動から批判されてきた『学習指導要領』の拘束から部分的にはあれ、自由な時間として「総合的な学習の時間」が構想されている点である。そこでは、教師の教育課程編成にたいする裁量が大幅に認められており、それだけに教師が何を子どもたちに伝えようとするのかという教師の構想力とセンスが問われる場面が生まれるからである。また、第二に、この学習が、知識の獲得や操作の習熟に焦点化されるべきものではなく、それまで獲得してきた知識や認識を現実世界のなかで再統合する過程と現実世界から提起されている課題を普遍的な認識世界に還元する過程の往復を重視するという点で、子どもの認識の質が大きく変わる可能性をもっているということである。

このことを、示してくれている報告がある。一つは2002年7月におこなわれた都留文科大学現職教員講座において報告された斎木修報告であり、もう一つは知的障害のある子どもたちとの総合学習の探求について、本学初等教育学科の授業である「学校教育総合研究」のゲスト講師として2004年6月、ならびに7月の現職教員をまじえた研究会での渡辺克哉報告である。

(1) 教育課程の自主編成と教師の力量形成

先に述べた「総合的な学習」のもつ可能性を鋭く意識した実践を開拓しつつあるものの一つとして埼玉県朝霞市立第五小学校の斎木修教諭を中心とした「地球の時間」と名づけられた「総合」の取り組みである。これは斎木修が所属した同校の第五学年の4名の教師たちによる共同の取り組みであるが、斎木の前年度からの試行段階を経てのテーマ学習へと発展したという意味で斎木実践ととりあえず記述する。ここでは2000年からの二年間の斎木実践の概略を示すとともに、この実践の持つ意味を今日の状況のなかに位置づけてみる。

その第一は、『学習指導要領』が指示する、教師の教育課程の自主編成を通じて、学校知識のあり方を問い直したところにある。

はじめは斎木も2002年から本格的に実施される『学習指導要領』において「総合的な学習の時間」が導入されると知ったとき、「上の都合でまたまた現場が引き回されるのか」としか思えなかったという（『現代と教育』第52号）。しかし、『学習指導要領』総則を読むうちに「(ここには) 現実の子どもや青年の『危機』が、学校教育の諸矛盾が、たとえ玉虫色であっても、ある意味で鋭く反映している」ことを感じるに到った。そしてあらためて読み直してみるならば、そこには「ほんの数年前には考えられなかった『実践の自由』が現実の手の内にあった」と認識していく。ここでいう「実践の自由」とは、斎木実践に即していえば、①構造的・継続的に父母・保護者、地域住民の力を学校教育に取り入れ、学校を開く可能性であり、②あらかじめ設定された画一的なテーマを固定的な学習集団が学んでいくのではなく、たとえ潜在的なものであっても「子どもたち一人ひとり」の多様な「問い」に応え、あるいは「問い」を引き出す可能性をもつ。同時にそ

これは、子どもたちの学習が受け身的となり行き詰まった学校に主体的な学びと参加のベクトルを組み込むことになるものと理解される。

これは2001年度の「地球の時間」に先立って2000年度に齋木学級において行われた「総合的な学習の時間」の先導的試みである「学びのレストラン」で得られた知見である。「学びのレストラン」はあらためて先の2点の可能性を具体化することを視野に入れながら、「子どもの問いから出発する」学びのメニューが作成された。その数はおおよそ80近くにのぼり、まさに個々の子どもの「問い」に依拠しつつさらなる「問い」を掘り起こす作業であった。

子どもの「問い」から出発する学びは、子どもが生活していく上で切実に問われているテーマを軸に学習内容を子どもとともに創造する試みのひとつである。子どもの切実な問いに真摯に取り組む実践こそが、これまでの「教えー教えられる」という関係に固定されていた「教師と子ども」の関係を自由にし、その上で教師の研究者としてのそしてまた子どもと文化をつなぐ媒介者としての専門性を必要とされる場面が生まれてくることを示唆しているといえよう。

(2) 学びの身体性・総合性

第二に、「総合的な学習」の発展は、学習者である子どもの学びの質に重要な変化が生まれてくることである。

齋木学級の子どもたちが選んだテーマの一つに「大洗の犬たち、朝霞の犬たち」というものがある。これは、北海道から1ヶ月前に「転校」してきたが、1日も通学していないNさん（東京シューレに通っている）からの「クラスへの手紙」で紹介されていたものをテーマ化したものである。Nさんは、「手紙」のなかで、ペット・ショップにいる犬たちの悲惨な環境を訴えるとともに、茨城県大洗の海岸に捨てられる犬たちの存在とその犬たちを救おうとしているボランティア団体についての学習を提案していた。子どもたちの何人かはすぐにその呼びかけに応え、朝霞で活動しているボランティアを通して、その実態に迫っていく。ペット・ショップにいる犬たちは繁殖犬とよばれる犬たちの子どもであることや、その役に立たなくなった犬たちは茨城県の大洗海岸に捨てられていること、こうした犬たちを救うことは単に動物たちへの同情ではどうしようもないこと、さらにこうした事態は消費社会の構造的な問題を含んでいることについての学習へと発展せざるを得ないものとなっていった。

それは、「生き物を大切にしよう」というような徳目主義的な道德教育の枠組みをはるかに越えた、社会認識へと広がる契機を子ども自身が発見していく過程でもあった。

重要なのは、知的障害のある子どもたちの学習においても同様のことが渡辺実践によっても確認できたことである。渡辺は、前任校でのテーマ学習として「ゴリラ」を選んだときの模様を次のように語ってくれている。

知的障害学級での授業は、「指導要領」に沿ってはいるけれども結局子どもの実態に合わせてつくっていかなくてははいけません。いま何を学ぶべきかということが子ども一人ひとりで違うのでそれを網羅するような学習をしています。ですが、個別指導では学級が一つにまとまらないので、大きな年間テーマを決めて学習を展開しています。「今の生活、昔の生活」「水」「土」「動物」「食」などのテ

ーマを一年間かけて国語・算数・理科・社会・図工といろいろな教科でつながりのある学習にしていきます。

そのような条件のなかで、「土」をテーマにした学習を通して、土の中から骨が発見されたことを人類の歴史につなげる一方、その延長上に見えてきた子どもたちの興味をひくテーマとしてゴリラに行き着きました。

月一回行っている校外体験学習で上野動物園にゴリラを見に行くと、名前、年齢、体重、食べ物などを調べ始めました。何度も上野動物園に通っているうちに最初はただのゴリラだったのに、だんだんと一頭一頭のゴリラが違って見えてきて、見分けがつかようになってきました。また飼育係の人との交流をしているうちに子どもたちがどんどんゴリラにはまっていたんですね。教室や学習がゴリラだらけになっていきました。また国語の漢字で「暑い」という漢字を教えたい時でも、「暑いという字はこう書きますよ」では覚えられないけれども、「暑い時はゴリラも冷たい所が好きみたい」という文章を子どもが考え、それをワークシートにしてあげると、喜んで勉強するわけです。算数でも「みんなの体重を足すとゴリラより重くなるかな？」という問題にすると、足し算を嫌がっていた子が一所懸命に足し算をはじめるといいう様子も見られました。地図もゴリラのいる動物園を調べ始めて、日本地図を一生懸命調べるんですね。こういった形で学んでいくのは時間がかかってすごく遠回りしているようなんだけど、実は近道だったといまでは感じています。

きっかけをつかむと学びはどんどん広がっていきます。最終的には上野動物園だけでは物足りなくなって、日本の動物園はどうなっているんだって子どもたちが言い始めて、調査をしたいということになったんです。その当時ゴリラのいた日本の動物園17園に調査用紙を送ったんです。「どんなゴリラがいるのか」、「飼育係の人はどんな仕事をしているのか」、「どんな食べ物が好きなのか」などを調査しました。それで日本全国ゴリラ調査という本を作ったんですね。調査したことをもとにグラフを作るなどして分析しました。その中でゴリラの年齢を表にした時に、ある男の子が「俺が50歳になったらゴリラがいなくなる」って言ったんですよ。ゴリラの寿命から考えると、もしこれからゴリラの赤ちゃんが生まれないとすると40年経ったら日本の動物園のゴリラが全部死んでいなくなっちゃうっていうことに気づいたんです。それが「自分が50歳になったら」ということだったのです。

そこからゴリラの絶滅ということについて考え始めて、世界のゴリラのことも考え始めました。その頃、ゴリラの住んでいる森で内戦があり、ゴリラが射殺されたり、内戦を逃れた難民たちが森の木を切ってそれを薪にすることで森がだんだん狭くなってゴリラが死んでいたり、難民たちの食用にされちゃったりということがわかり、みんなで激論になりました。「そんな戦争になったら悲しい」「引き分けにして欲しい」「国際国会というのがあってゴリラを増やそうって話し合えばいい」「ゴリラを殺さないでとそこでお願ひすればいい」「みんなが平和で豊かに暮らすことだよ」。そのうちサマラっていうゴリラが殺されたという情報が入って来て、「サマラを殺す奴があるか」って泣いちゃう子どもたちまで出てきたんですね。結局それについての話し合いの答えは出ないんだけど、ゴリラというフィルターを通して世の中を見ていったらアフリカの内戦のことまでが自分の問題として捉えられた、大人だって「あっちで戦争起こっているんだなあ」とぐらいにしか思わないことがゴリラを通して見ていったら自分の目の前のようなことに思えて真剣になっていくんです。

インドネシアが森林火災になったという話をすれば「オラウータンは大丈夫か」ということで皆で意見を言い合ったり、ゴリラなどを通して学んだことは本当に大きかったなと思います。

引用が長くなったが、こうした学習のなかで子どもたちが獲得した知識や認識は、抽象的な操作や習熟で獲得した学力とは大きくその性質を異にするものである。とりわけ重要なことは、現実の世界をテーマとして、子ども自身が、自らの身体感覚を駆使しながら問題の核心に迫っていく過程は、パッケージ化され、現実との接点から切り離された知識の習得とは、本質的に異なるものとなる。もちろん、一定の知識を効率的に獲得する教科の学習が無意味だと言うことではないが、教科の原基であったはずの現実世界に立ち戻るといふ作業の意味をあらためて問う役割を、「総合的な学習」が果たしうるのではないだろうか。

*本稿は、地域交流研究センターでの「地域総合学習開発プロジェクト」での活動および同時に発足した大学院臨床教育実践学専攻での活動をもとに、『『学力低下』問題と総合学習』『臨床教育実践学研究』創刊号（2002年、都留文科大学大学院臨床教育実践学専攻準備室）で提起した課題をあらためて整理したうえで、補筆したものである。

活動報告及び今後の課題

2003 (H15) 年度

2004.3.31

【I】2003 (H15) 年度の活動

I-1. 地域交流研究教育・プロジェクト

(1) フィールド・ミュージアム研究

メンバー：○今泉吉晴（都留文科大学教授）、
北垣憲仁（同非常勤講師）

協力者：中野新作（都留市在住）、清水貞一
（都留市在住）、小口尚良（都留市小学校教
員）、佐藤洋（宝のやまネイチャーセンター）、
寺田智（秦野市小学校教員）、綿貫弘文（水
戸市小学校教員）

*○はプロジェクト代表（以下同様）

今年度は初年度ということで、昨年度作
成した三年を単位とした全体計画の活動の
柱の中から実施可能な部分を、参加交流を
見込めるかたちで取り組んだ。市民・学生、
教員がどの程度参加し、そのかたちがどの
ように成長してくるかで、今後三年の見通
しを立てることを活動の一つの目標とした。

◇実施した活動の内容はつぎのとおり。

なお（ ）内は全体計画の位置づけを示す。

- 1) 大学の授業と連携し、ビオトープ用に植
物を育てる（生きものとの親しみを深める
森のキャンパスづくり）
- 2) 荒廃した果樹園の復活（地域の知恵に学
ぶ環境の復活プログラム）
- 3) 水掛菜栽培の観察と実践（住民参加のプ
ログラム）
- 4) 新図書館ビオトープへむけた準備（学内
の他の団体との交流プログラム）
- 5) 大学裏山のフィールド整備（フィールド
の維持・管理のプログラム）
- 6) 月刊誌「フィールドノート」の発刊・企

画展開催・富士急行線都留文科大学前駅で
の展示計画の決定・講演会・キャンパスを
入り口とした森への道づくり計画（社会参
加のプログラム）

◇活動の概要はつぎのとおり。

- 1) 生きものとの親しみを深める森のキャン
パスづくり

自然科学棟テラスでは、「環境・生態論」
「環境・生態論基礎演習」「同演習」、大学院
「環境・生態論」「特別講義」の各授業と連
携して、スグリ、イチゴ、ミツバ、カタラ
チ、ユズなどチョウと親しむための植物を
育てている。これらの植物は、キャンパス
のビオトープや新図書館のアウトテリアの
ビオトープに移植する予定。受講生にはそ
れぞれ関心の深さにばらつきがあったもの
の、観察記録の提出を重ねるうちに植物に
親しみを深めていった。レポートはすべて
メールにて提出し、記録として保存した。
また、作業を通して地域の方々との交流を
深めることができた。

- 2) 地域の知恵に学ぶ環境の復活プログラム

①荒廃した果樹園の復活

中屋敷フィールドでは、フィールドワー
クにおいて荒廃した果樹園の手入れをおこ
なった。また、卒論に取り組む「環境・生
態論演習」の学生2名と夏以降、1週間に1度
の日程で果樹園の手入れ、下草刈りなどを
行った。

②中屋敷フィールドでは、果樹園の手入れのほかに、水掛菜栽培でお世話になっている清水貞一さんの畑跡を復活させる作業をおこなった。現在下草刈りが終わり、12月19日に清水さん立ち会いのもと、畑の境界を確認した。卒論のテーマとして取り組む学生が中心となったため、最後まで自主的な作業ができた。また中野新作さんなど、地域の方々との交流も作業を通して深めることができた。

3) 住民参加のプログラム

①水掛菜栽培の観察会

5月30日に清水貞一さんの畑を観察。種とりを行い、10月7日に清水貞一さんの水掛菜の種まきの観察会を行った。参加者は延べ32名。その後も「環境・生態論基礎演習」「同演習」、大学院「環境・生態論」などの授業で継続観察をおこなった。十日市場の中野新作さんの提案により、水掛菜栽培の実践にも取り組むことができた。

②地域の店との食材を活かす交流

高尾町通りのイタリア料理店「ブオーノ」でイラクサを用いた料理をつくっていただく。

4) 学内の他の団体との交流プログラム

①図書館との連携のもと、新図書館ピオトープづくりの準備として、「環境・生態論」「環境・生態論基礎演習」「同演習」「特別講義」で、ピオトープづくりに必要な植物を育てた。

②「ムササビ観察会」

12月12日にキャンパス「ムササビの森」にてムササビ観察会を開催。30人が参加。ムササビは結局観察できなかったが、地形を活かした観察方法を検討する契機となる。今後、授業と連携した継続的な観察と森の手入れをおこない、定期的な観察会を開催したい。

5) フィールドの維持・管理のプログラム

①今年、新たに大学裏山にある辺殿フィールドの手入れに取りかかる。ヒノキ、カラマツの林の間伐をおこない、ここから出

る間伐材をつかって観察施設をつくる予定。現在、「環境・生態論演習」の学生2名、「基礎演習」の学生1名とで週に1度の日程で作業を継続している。間伐はほぼ終了し、地元の製材所に間伐材を運び出す作業に取りかかった。ここは、遊歩道に接したフィールドとなるため、人々が集い、自然観察が楽しめる「森の庭」とする予定。

②八つ沢の泉は今年、水が絶えることがなかった。4月、「特別講義」今泉班で泉に石組みでダムをつくる。

③八つ沢フィールドの上の小屋では、クルミやエノキを果樹園風に配置、育てるための枝打ちをおこなう。またモモの実が豊作だったため、モモの手入れもおこなう。どの作業も学生の関心が高く、今後も地域の方々の参加のもと、授業と連携した作業を継続させていきたい。

6) 社会参加のプログラム

①収集した情報の記録・発信をする「フィールド・ミュージアム研究編集部」を発足。編集室は自然科学棟2階の研究室内に置き、「環境・生態論」「環境・生態論基礎演習」「同演習」「博物館学各論」「博物館実習」「ワークショップ」など、フィールド・ミュージアムが支援する授業の受講生26名で構成。「都留の人と自然の交流」をテーマに月刊誌「フィールドノート」を発行（毎月1回、220部印刷）。学科の枠をこえた幅広い参加があり、地域との新たな交流もうみだしている。また、フィールド・ミュージアム研究の学内からの参加の受け皿としても機能している。

②「博物館学各論」「博物館実習」の授業と連携し、過去の都留の写真を収集、「水辺の記憶展」を11月29日から1週間開催。延べ206名の来館者があった。市民との交流活動として、来年度も都留の昔の写真をテーマとした展示活動を継続していく。

③富士急行と連携し、「都留文科大学前」新駅を活用して展示活動を展開することが決まる。企業と行政をふくめた社会的な活動と位置づけ、来年度のフィールド・ミュージアム研究プロジェクトの活動として取

り組む。

④水掛菜の種をとおした交流

小学館の雑誌「サライ」(2004年1月号)に水掛菜の紹介記事が掲載され、地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム研究で希望者に種を送ることにした。現在(2004年2月16日)まで82通の応募があった。種の発送作業のさいに、水掛菜に関する簡単なパンフレットに、来年度も希望される方には種を発送する旨を記し同封した。

⑤講演等の受け入れ

現在までのおもな受け入れについては次のとおり。

- ・2003年6月20日：岐阜県郡上郡和良村(今泉教授)
- ・7月25日：桂高校文理科1年生、高・大連携事業の受け入れ
- ・10月10日：上野原平和中学校2名の総合的学習の時間(今泉教授)
- ・10月18日：大月市の教育を語る会(今泉教授)
- ・10月28日：中巨摩郡教育会館(今泉教授)
- ・11月5日：南都留教育フォーラム(北垣講師)

- ・11月15日：金沢同窓会(今泉教授)
- ・11月29日：県民コミュニティーカレッジ(北垣講師)
- ・2004年2月4日：富士河口湖町ネイチャーガイド養成講座講習会(北垣講師)
- ・2月15日：新潟県自然観察指導員連絡会20周年記念講習会(今泉教授)

⑥キャンパスを入り口とした森の道づくり計画

「ムササビの森」づくりと平行してキャンパス裏山への探索道をつくる計画を立て、来年度から実施する。また、プチソロミスト協会と連携した計画も現在進行している。

来年度は、上記にあげた今年度の取り組みを継続し、強固なものとしながら活動を展開していく。そのためには、初年度に立てた全体計画のなかで取り組めなかったプロジェクトをどのように補完していくか、学内の学生・教員・地域との交流をさらに深め、参加の受け皿をいかに用意していくかが課題となる。

(2) 地域総合学習開発

メンバー：○佐藤隆(都留文科大学教授)、
鶴田清司(同教授)

1) 大学における教員養成教育の一環としての「総合学習研究」

今後の教員養成に必要なカリキュラムの核の一つとして、学生をフィールドに連れだし、体験を通じた「自分の問題の発見」を支援する教育は欠かせない。

①当面、大学院臨床教育実践学専攻内の「教育実践学」領域の授業において、実習と研究両面にかかわるものとして位置づけている。

②学生が「教育現場」に何らかのかたちで接近するための援助・支援。

附属小学校との連携、地域「資源」の発見・調査。学生・専攻科生・大学院生のフ

ィールドとして。

・「手つなぎ遠足」理科教室(坂田先生)の協力

・国際交流事業
・埼玉県朝霞市立朝霞第五小学校の授業参観(メディア・リテラシーを含む)と研究会

2) 都留市内の小・中・高校の「総合的な学習」の展開に貢献すること。

「総合的な学習の時間」自体は、国際交流、情報教育、芸術活動など多岐にわたるべきだが、当面は本学の蓄積と都留市の特色を活かしながら環境教育をテーマとする「研究会」を立ち上げるところからすそ野を広げていきたい。ここに「現場」の先生たちの参加をうながすように努力する。また、可能などころで適宜「実験授業」「出前授業」

とその検討などを行い、現場密着型の総合学習研究を行う。

①本学に蓄積されている都留市（周辺）の環境に関する資料の教材化のための研究。

たとえば、理科教室での蓄積や「フィールド・ミュージアム」研究と連携しながら、小・中・高校むけの「副読本」や成人までを対象にした「野外活動ハンドブック」づくりを行うことを目指している。

②単なる「教材づくり」に終わらずに、「総合学習」とは何かについての理論研究。すでに『臨床教育実践学研究』（第1集）

（第2集）を昨年発行し、一昨年8月には「現職教員講座」を開くなど、総合学習に関する実践的研究は始まっている。また、今後数年をかけて「総合学習」に関するデータ・ベースづくりを行いながら、都留から全国へ「総合学習」の実践と情報を発信していく。

③総合学習に関するデータベースづくり・資料収集、ネットワークづくり（東京学芸大学）、データベースのデジタル化。以上のうち都留市内小中学校の総合学習に関する資料は収集済み。現在整理・検討中。

(3) 甲斐の文化（文学）活動研究

メンバー：○楠元六男（都留文科大学教授）、佐藤明浩（同助教授）、寺門日出男（同教授）
協力者：大内瑞恵（同非常勤講師）、舟水暢子

1) 山中湖村「俳句の館・風生庵」の資料整理と開館準備

本年度の前半は、山中湖村の「俳句の館・風生庵」の資料整理と開館準備に忙殺された。特に富安家に伝わる資料類は多様をきわめ、しかも独特の変体仮名で書かれているために、解説と展示のための企画が必要となった。また開館記念として、図録の完成も求められ、何回も大学と山中湖村を往復するはめとなってしまった。九月末に風生庵の竣工式がある関係上、時間をにらみながらの作業には、かなりきびしいものがあった。

山中湖の文学の森には、三島由紀夫記念館・徳富蘇峰記念館がすでに開館せられているのだが、新たに「俳句の館・風生庵」が加えられたことになる。

2) ミュージアム都留と共同した「山口素堂展」の開催

都留市「ミュージアム都留」に関しては、7月から10月にかけて、市民のための講義を

行った。むろんこれは今年の展示の「山口素堂展」にまつわるものであるが、数人の市民と多くの学生の参加によって、ともかくも展示会のプレ講座ともいべきイベントを何とか開催することができたように思う。「ミュージアム都留」の展示は、11月半ばから12月にかけての常設展という扱いであるが、今年は国会図書館の資料と山梨県立図書館の資料とを組み合わせ、ともかくも基本的な様子だけは紹介できたのではないかと思っている。

本来ならば、こうした展示会の折には、図録でも作っておくのが普通なのだが、予算的な問題からそうした試みも出来ずに展示会は終了してしまった。その点は、今後の課題といえようが、「ミュージアム都留」そのものの姿勢が問題になるところといえよう。図録とはいえ、それほど豪華なものを考えているわけではないのだが、それなりの案内書も作成せずに、展示が企画されること自体が問題といえる。

また国会図書館や山梨県立図書館だけではなく、関西の柿衛文庫や天理図書館からも資料を拝借して、総合的な展示をするべきなのだろう。

3) 山中湖村・俳句大会への協力

11月になり、山中湖村から俳句大会の選者をつとめてくれとの依頼があり、年末はその選定作業にあたった。七百余句が投稿せられており、その中から11句を選定、うち1句が大賞として、新聞(山梨日々新聞)等に発表された。

4) 平成16年の課題

16年の「ミュージアム都留」における展示は、15年の反省をふまえ、さらに「山口素堂」に関する展示を行うつもりである。

多様な資料収集をもとに、本格的な展示を計画している。15年の展示から、多くの反省点がみえてきたし、それらを改善して全国に発信できるような展示にしたいと思っている。

I-2. 教育相談部門の活動

(1) 教育相談室の活動

今年度4月より、地域教育相談部では来室、電話、Faxによる相談の受付を行った。現在

までに寄せられた相談の内容と件数は以下の表のとおりである。

〔相談件数と種別〕 ▼

相談種別	相談概要	件数(のべ数)
学級経営、学級集団の育成、授業等に関わる内容	どう学級経営を進めていけばよいか。	30
	学級崩壊に直面している担任への援助の方法	5
	教師のリーダーシップ、学級経営全般	7
	小計	42
不登校・非行問題、軽度発達障害等の児童生徒の問題に関わる内容	保健室登校の生徒への対応等	6
	不登校の生徒へのかかわり方等	3
	問題行動を繰り返す生徒への対応等	3
	L D, AD/HDを持つ児童への対応等	9
	小計	21
校内研究、調査・研究に関わる内容	全校で実施した学級集団分析尺度(Q-U)の解釈と対応のあり方について	5
	校内研究の進め方とテーマについての情報提供	3
	子どもの生活実態調査の調査方法と分析について	7
	来年度の校内研究の進め方について	1
	小計	16
合計		79

〔地域と相談形態〕 ▼

	来室	訪問	電話・ファックス・電子メール等	合計
都留市内	3	3	1	7
南都留・北都留	0	0	2	2
上記以外の県内	2	1	1	4
県外	15	21	30	66
合計	20	24	35	79

①学級経営上の問題についての担任教師本人からの相談では、来室しての相談では

なく、Faxや電話面接の相談形態が多かった。また、学級崩壊に直面している学校

からの相談では、直接学校に向いて、職員の研修会の場合での対応をすることを要請されたケースもあった。不登校や非行、軽度発達障害などの児童生徒への対応についての相談では、電話での受付の後、教師が来室しての相談となるケースが多かった。校内研究や実態調査についての相談では、研究担当の教師が来室して面接する形態や電子メールや郵便でデータを送ってもらい分析結果を返送したもの、校内研究会に講師として向いて対応したものなど様々で

あった。

②全相談件数のうち、山梨県内からの相談が13件、東京、神奈川、埼玉などの隣接する地域からの相談件数が35件、その他の地域からの相談が31件であった。前期は、地域教育相談室の活動を知っている人からの紹介によって東京、神奈川などからの相談が多かったが、後期になってセンター通信や公開講座などを通して活動が知られ始め、山梨県内からの問い合わせも増えてきている。

(2) 教育関連講座・研修会の実施

本年度は、公開教育講座として、①「LD、AD/HDの子どもとその指導のあり方を考える」(10月、12月、2月)、②「Q-Uを使った学級経営セミナー」(5月、2月)の2つの講座を開催した。

1) LD、AD/HDの子どもとその指導のあり方を考える

◇第1回「LD、AD/HDの子どもとは—その心理アセスメントを中心に—」

講師：筑波大学心身障害学系前川久男教授

日時：10月18日土曜日13:30～16:00

場所：本学3号館3204教室参加者：40名

概要：LD、AD/HDをもつ子どもの困難を認知処理過程に焦点をあてて説明していただいた。子どものもつ困難の例や指導のポイント、教材ソフトを利用した指導の実際についての具体的な話を聞くことができた。参加者からは、『子どものできることから始める』『一人の人として付き合う』ことを念頭に、明日からの子どもとのかかわりにいかしていきたい』などの感想が寄せられた。

◇第2回「LD、AD/HD児への学級担任の対応について—事例を通して—」

講師：センター地域教育相談部門粕谷

貴志非常勤講師

日時：12月20日土曜日13:30～16:00

場所：本学3号館3204教室

参加者：21名

概要：LD、AD/HDをもつ子どもを担任する教師への実際のコンサルテーション事例から、LD、AD/HDをもつ子どもの学校での状態像や学校生活の中での困難の説明、対応のあり方や具体的な実践例についての紹介を行った。「具体的な学校での対応を知ることができてよかった」などの感想が寄せられた。

◇第3回「LD、AD/HDなどの困難をもつ子どもたちと親の願い」

講師：山梨LDを考える会「いちえ会」名月暁子(仮名)

日時：2月21日土曜日13:30～16:00

場所：本学3号館3204教室

参加者：33名

概要：LD,AD/HDをもつ子どもを実際に育てている母親という立場と、LD,AD/HDを持つ子と母親を支える親の会の代表という立場の両方から、苦勞した実体験やどのようにしてサポート体制をつくってきたかの具体的な話を聞くことができた。参加者からは、「苦勞された体験を聞いて教員と

して何ができるのか、何をしてきたのかも考えさせられた。」「子どもたちへの対応だけでなく、不安な親との連絡もとっていきたいと感じた」などの感想が寄せられた。

2) Q-Uを使った学級経営セミナー

◇第1回

日 時：5月17日土曜日10:30～12:30、
13:30～16:00

場 所：本学2号館2102教室

参加者：57名

講 師：本学河村茂雄教授

概 要：午前中は学級集団分析尺度Q-U開発の背景と経緯、いじめ、不登校の予防的介入への活用、学級崩壊予防への活用、学級集団育成への活用法などについて説明。午後は6人ずつの小グループに分かれて、Q-Uをつかっ

た実際の学級の事例を用いてディスカッションをおこなうワークショップを行った。

◇第2回

日 時：2月14日土曜日10:30～12:30、
13:30～16:00

場 所：本部棟大会議室

参加者：47名

講 師：本学河村茂雄教授粕谷貴志非常
勤講師

概 要：第1回目と同じ

合計5回の公開教育講座では、山梨県内外の小中学校、高等学校、養護学校、幼稚園の教員をはじめ、保護者、教員志望学生など、のべ198名の参加があり、これらの領域への関心の高さがうかがわれた。また、相談活動や研究の中で得られた知見を、教育実践にいかせる形で学校現場に返していくことへの学校現場、先生方からのニーズがあることがうかがわれた。

(3) 活動のまとめと今後の課題

4月からスタートした地域教育相談室であるが、相談の受け入れ体制、スタッフの連携など様々な課題を抱え、よりよいあり方を模索しながら進んできたところである。現在までのところ相談件数はさほど多くはないが、それぞれの事例からは、多忙化が進む中で多様な教育問題をかかえ、外部の専門機関との連携を求めていることがうかがわれた。

これまでの教育相談部門活動を通して、今後の課題として以下の3つが考えられる。

①学校現場の先生方への有効な支援につながる具体的な援助資源をもつこと

②学校現場のニーズに応え、教育実践に生かせる情報をタイムリーに提供していく

こと

③学校現場の研究活動をサポートしながら、教育実践の向上のためにともに研究を積み重ねること

なお、今年度より開始された文部科学省・山梨県教委の「放課後学習チューター」の配置等に関する調査研究事業に参加し、東桂小学校・東桂中学校・都留市教育委員会と協働してこれを活用した独自の活動に取り組んだ（詳細は「I-3」を参照）。文科省の事業は03-04年度であるが、この1年間の実験的試みの中で、地域と大学との連携・協働の新しい可能性が生まれている。今後の相談部門の重要な活動として位置づけ、発展させていきたい。

I-3. 地域貢献活動

(1) 地域からの要請と活動の概況

1) 概況

4月以後センターでは、地域からの要請に対応するために学生課が窓口となり、主にセンター次長及び学生課長が対応してきた。とくに開設間もない4-7月は直接大学を訪ねて下さる方が少なからずおり、都留市教育委員会、山梨県東部教育事務所、山梨県教育委員会、山梨県教育研究センター、富士女性センター等々と、地域と大学の連携について貴重な意見交換を行ってきた。なかでも教育分野の方の来訪は多く、南都留地域教育フォーラムのようにセンターで組織的に参加したイベントもあった。

他方、センター事務局を通さず、直接関係の先生に要請が行われることもあった。こちらについては動向を把握できる体制ができておらず、個々の先生方に頼らざるを得ない状況であった。

今後は来訪者や電話での要請・依頼の記録を整備し、地域の声を蓄積しながら、センターの活動に反映できるようにしたい。

2) 講演・出前講座等への講師の派遣

事務局で把握している03年度の講師等の派遣は以下の通りである。ここに掲載したもの以外にもセンターの各部門で独自に対応しているケースもある（各活動報告の項を参照）。なお、詳細は不明だが、センターとは独自に、個々の教員レベルで行われている地域貢献活動も少なからずあると思われる。

- 8.1 大月林務環境部：「山の日」作業
- 8.20 東桂中学校：子ども理解のカンファレンス（第1回）
- 10.2 富士女性センター：男女共同参画ワークショップ
- 10.15 北富士工業高校：教師向け講演
- 10.18 明日の大月市の教育を考える会：フィールド・ミュージアム関係

- 10.24 上野原町平和中学校：教室訪問並びにモグラの学習指導
- 10.25 県民コミュニティカレッジ（山梨県立短大）：「地域と大学の交流」
- 10.26 富士女性センター：ピュア富士フォーラム
- 10.30 中巨摩郡教育協議会：環境教育関係
- 11.21 桂高校（特別講義）：沖縄を見つめるまなざし
- 11.26 東桂中学校：子ども理解のカンファレンス（第2回）
- 11.28 都留第一中学校：生徒の自主的活動指導
- 12.3 身延町下山中学校：校内研究会（心理発達関係）
- 1.16 寿勸学院：日本文化と外国文化について
- 2.6 “
- 2.17 NPO親子の心Q&A：不登校生徒への教師の対応について

3) 南都留地域教育フォーラムへの参加

11月5日、下吉田第二小学校で開催。「地域とともに心を育てる学校づくり」「地域を変える小中高生のとりくみ」「ボランティアの現在」等6分科会すべてに、助言者としてセンター担当教員が参加した。

4) 学生ボランティア登録の支援

地域からの学生ボランティアの要請が多数あるが、従来はあまり十分な対応ができなかった。これらの日常的な要請に対応するための一つの試みとして、都留市社会福祉協議会と連携し、学生ボランティア登録の説明会と大学での出張登録（3日間）を行った。数名の学生が登録してくれたが、説明会の内容や登録方法等、改善すべき課題もあった。ボランティアボードの活用とも合わせ、更に検討し、学生と地域活動が出会いやすい環境を整えていきたい。

(2) 桂高校との連携

都留文科大学と地元の高等学校とが実践・研究において深い交流を実現していくことは、大切な稔りを予想させるものがあるが、現実的には、諸般の厳しい条件のなかで大学として課題の前面に出すことはできないでいた。しかし、2002年度に、文部科学省の「生涯学習まちづくりモデル支援事業」の補助金対象事業の一環として、桂高校と都留文科大学との「連携」の試みが行なわれた。本年度は、大学としても「地域交流研究センター」事業として位置付けて、その試みを継承することとした。

なお、「教育相談部門」が東桂小学校・中学校との交流を開始したので、これで小・中・高とそろうことになった。そのことによって桂高校との交流は、都留文科大学にとってあらたな意味をもつようになったと思われる。

1) 本年度の交流事業

A. 出張講義

①寺田良一社会学科教授（演題「自然破壊から環境ホルモンへ」、6月13日）

②今泉吉晴社会学科教授（演題「自然と人間の関係について」＋自然観察会、7月25日）

③嶋田鋭二比較文学科非常勤講師（演題「近・現代の中の沖縄」、11月6日）

④山本芳美比較文学科講師（演題「沖縄を考えるー沖縄文化を紹介してー」、2004年1月14日）

⑤分田順子比較文化学科教授（演題「アイルランドがフィールドと呼べるまで」、1月21日）

B. 本学学生と桂高校生（＝生徒会）との交流

①都留市のまちづくりについての意見交換（6月6日）

②大学と高校の交流についての意見交換

（6月18日）

③大学の施設見学、自然保護に関する調査・研究（7月4日）

C. 大学キャンパスを使つての学習会

日時：8月17日～8月23日

会場：都留文科大学3号館

担当者：都留文科大学生3名

内容：英語、古文、現代社会の講師および学習指導

D. 短期留学生の学習

日時：7月2日～4日

会場：都留文科大学

担当者：小林文子氏（本学国際交流センター嘱託職員）

内容：短期留学生の学習指導および日本文化の紹介

2) 成果と課題

桂高校側からの要請に基づいて本学教員がそれに応える、という形での交流が重ねられているが、本年は、桂高校の提案により、文大生が授業経験をもつという試みもなされた。また、文大生の自主的な意欲に基づいて、学生～生徒の交流が試みられた。これからの課題は、次の諸点である。

①これまでの交流経験を検討し、交流の意味や課題をさぐる必要がある（出張講義をされた先生方からは、たいへん参考になる感想や提言が寄せられている）。

②早期に年度の計画をたて、それにもとづいて、関係者の理解と協力を得て実践していくという、計画性を重視する必要がある。

③これまでは、大学としては受動的な姿勢での“交流”であったが、対等な交流をめざし、インターンシップなどを含め、大学としてのねらいを明確にしていくべきだろう。「教育相談部門」との共同もありえる。

④この部門の本学スタッフを強化する必要がある。

(3) 山梨の魅力メッセンジャー講座

山梨県産業交流課と連携し、02年度から本学で取り組みを始めた「山梨魅力メッセンジャー」認定講座は、03年度からは共通科目「歴史と文化Ⅶ」のなかに位置づけ行うことになった。

この認定講座の運営は各大学（担当者）の自主性に委ねられているが、県は講師の紹介、出講の依頼、さらにはバス見学における見学先との交渉と費用負担を行い、講義およびバス見学への参加（感想文提出）とプログラム全体に参加しての感想文を提出した受講者を、「山梨魅力メッセンジャー」として認定している。県の施策意図は、県外出身の大学生に「山梨の魅力」を理解してもらい、卒業後も山梨のことを忘れずに何らかのつながりを維持していきたい、また、関心を深めることができれば、様々な機会に山梨との交流をおこす「メッセンジャー」になってくれるはずだということである。

運営する主体の側から言えば、本学に学ぶ大部分の学生たちが4年間でも暮らすことになる都留、郡内地域や山梨県のことを知ることには地域社会の一員としての自覚をもつ契機として位置づけられる。また山梨出身者であっても、地域のことをどのように評価するか、必ずしも適切な評価基準を持っているとは限らない。地域で生じてきた・していることをどのような観点から理解するのかという問題は、それはそれで大きな問題となる。「魅力」を伝えるメッセンジャー養成などにとらえると、「よいところ」だけを恣意的に選択した短絡的なものの見方を植え付けるのかという反発もありうるかもしれないが、そのような偏ったものではないのである。

今年度の取り組みに当たっては、グローバル化の時代における「地域」のあり方について理解を深めるという大きな枠組みを立て、地域理解のあり方、地域を学ぶ意義を強調しつつ、「地域」として大学が所在する都留、山梨を焦点化することにした。半期科目のうち、授業中に4回、現場の第一線で活躍されている方々を外部講師としてお招きし、公開講演を行った。これを補完して、連休期間に都留の魅力発見をテーマにした課外講座とまち歩き、7月上旬の土曜日に3人の方を講師にお招きした課外講座、そして都留・富士吉田と甲府方面、2回のバス見学を実施した。大学の授業でなかなか機会がないテーマであり、また企業や行政の第一線で活躍されている方のお話を直接伺う機会も乏しいわけであるが、授業の外で行う課外講座、バス見学に参加しようという学生は期待した数にはるかに及ばない低調さであった。

どうやら、都留・山梨を学ぶという意味がぼやけてしまったということだろう。地域を素材に学ぶということが「道具」的に受け取られ過ぎたのかもしれない。企画運営する側の反省としては、受講する中で、自分たちの暮らしが「地域」を日々つくっている、どのように関わろうとするかで地域のあり方が大きく変わってくるものだというのを、学生たちに多少とも意識してもらいたいと思うようになった。漠然とした目標であるが、地域をつくりあげてきた人々の歩みに「共感する学び」ということだが、教えてわかるというものではない。自主的な学び、気づきのきっかけに満ちたプログラムの構想が求められるのであろう。

(4) 「放課後学習チューター」の取り組み

1) 取り組みの概要

この取り組みは、文部科学省の調査研究事業（03-04年度、県教育委員会が実施）で

ある「放課後学習チューター」の制度を活用し、東桂小学校、東桂中学校、都留市教育委員会、本学の4者で、この地域にふさわ

しい教員養成大学と地域の小・中学校との連携・協力のあり方を探る実験的試みとして行われた。教育現場での個に応じたきめ細かな指導の推進と、教師を目指す学生の現場経験を踏まえた教師養成の新しい可能性を探る目的で取り組んでいる。

初年度となる03年度は10-12月を中心に行われ（中学では一部7月から実施）、47名（小学校17名、中学校30名）の学生が参加し

た。大学としては、小・中学校で必要とされるチューター確保が、選考が夏休みにかかったこともあり、大きな課題となった。選考は、本人の自主的な志望を前提に面接で行い、とくに教職への意思の確認を重視した。なお、比較文化学科の学生は、中国帰国子女の支援のためのチューターで、全員留学生である。

チューター47名の内訳は次の通り。

*表中の（ ）内の数字は、左：小学校、右：中学校のチューター数

	1年	2年	3年	4年	計
初等教育学科	1(1・0)	0	2(0・2)	15(8・7)	18(9・9)
国文学科	0	0	4(0・4)	5(0・5)	9(0・9)
英文学科	1(1・0)	0	4(3・1)	2(0・2)	7(4・3)
社会学科	0	0	0	0	0
比較文化学科	1(0・1)	0	0	3(0・3)	4(0・4) 全て留学生
専攻科					4(4・0)
大学院					5(0・5)
合計	3	0	10	25	47(17・30)

2) チューターの活動内容

①小学校では、原則として毎週水・木曜の放課後、2時間を目途に行われた。3年生以上の児童を対象に家庭から希望をとり、82名の児童が参加している。学年ごとに小グループを作り、国語・算数等の教科の補習的指導が行われた。チューターは毎回指導状況や子どもの様子を個別のカルテに記録し、指導の改善に努めた。

②中学校では、とくに曜日を決めることなく、また活動内容も多様に展開された。具体的には、放課後の学習支援、不登校傾向の子どもや海外帰国子女等、困難をかかえた生徒との個別の関わり（相談的活動）、T Tとしての学習指導への参加、部活支援が行われた。

3) 成果と課題

①チューターを行った学生の反応は、とくに教師を目指す自分にとって積極的な意味があったというものだった。いくつか感想を紹介する。

・「今まで小さい子どもと接する機会が少なかったので、はじめはとまどった

し、子どもの対応で悩むことがあった。……子どもに勉強を教えるというより、子どもの対応、教え方を自分なりに考えた水・木になった。」(小学校)
 ・「正直、授業中の生徒の態度には驚きました。机に教科書の出ない生徒もいれば、黒板に背を向けている生徒もいて、将来教壇に立つことに自信をなくしてしまいました。しかし生徒と築く関係（特に信頼関係）をしっかりとしたもののでできれば、教師が生徒の可能性を大きく引き出してあげられるのではないかと思いました。……そういったマイナス面としっかり向き合って解決していくことが大切だと感じました」(中学校)

・「教育相談やT Tなどいろんな事をやらせて頂いたのは、自分にとってとてもよかったです。特に困難を抱えた子と接したことは、これから教師になろうと思う自分にとって考えさせられました。まだ学生であるからという面もあると思いますが、生徒の悩みや考えていることを聞けて勉強になり

ました。」(中学校)

②各担当がチューター用の指導参考資料を用意してくれ、また、学生も独自の教材を作成する等、子どもの指導に積極的に取り組む姿勢が見られた。とくに学習チューター担当教員のサポートが支えになっていた様子がうかがえた。

・「最初はわからないことばかりだったり、問題が起こってしまった時、担当の先生に話を聞いていただき、アドバイスをしていただいたので、安心して前向きにチューターをやることができました。」(小学校)

③半面、現場にとって本当に力になっていたのか、生徒の質問に対する確かな説明ができず申し訳なかったという感想もあった。主に、具体的な指導場面での不十分さを反省した内容である。

・「もう少し指導資料であげられていたその子が苦手としているところを、こちらから取り組ませられたらよかったです。」(小学校)

・「個々に学習支援を行うことはできましたが、分からなかったら教えるという形であり、生徒の名も覚えられませんでした。……つくクラスを同じにしたり、継続して共に時間を過ごせれば、生徒ともっと関わることができたと思います。」(中学校)

④今まで教育実習等での現場との協力関係はあったが、日常の実践に関わる部分での連携は必ずしも十分に行えてこなかった。しかし、チューターの派遣は大学と現場の関係を密接にし、そこから教員を含めた新しい連携・協力関係も生まれている。とくに東桂中学校では、全教職員と本学教員が合同で、困難を抱えた子どものケースについての「子ども理解のカンファレンス」を2回行った。現場の「問題」に即した具体的な研究会であり、現職教員の研修にとっても、また本学の子どもと教育の研究にとっても貴重な経験になった。

4) 04年度以降の活動に向けて

①手探りで始まった「学習チューター」

であるが、少なくとも教師を目指す本学学生にとっては現場での貴重な経験となり、考えさせられることの多い学びの機会になったといえる。東桂小学校・中学校と協力しながら1年目の試みで見えてきた課題を改善し、現場・大学双方にとってより充実した取り組みにしていきたい。以下に教師養成教育という大学側の観点から、気のついた課題を列挙しておく。

・子どもと個別に関われる経験が、教育実習等とは異なる貴重な経験になっているように思われる。子どもと学生の間のある程度固定し、継続的に取り組めるようにする。

・チューターの活用に対する現場の多様な要望に応えることを前提としつつ、学習についてこれなかったり、集団になじめない等の困難をかかえた子どもを中心に展開する。そのような子どもとの関係を築く経験から「自らの課題」を感じ取る学習が、学生にとって貴重な経験になっているように思われる。

・現場の先生方の適切なアドバイス等のサポートが重要だが、同時に、学生同士の反省会や経験交流、「自分の課題」を発見し、深めるための大学教員によるサポートが重要な課題となる。そのために記録をつけ、これに基づき検討することを大切にしたい。

②本学では、「学習チューター」を教師養成教育の一環に位置づける方向で検討してきた。既にふれたが、教師を志す学生にとって、これが教育実習とは違った意味で現場での貴重な経験になると考えたからである。そのメリットは、個々の子どもと深く関わり、その経験を通して「子どもを理解する」という課題を深める契機になる点にある。このような「自分の問題」を発見し、深めるための大学独自のプログラムを作成する必要がある。

しかし、半面ここには、うまく関係を結ばず、逆に混乱するという危険も伴う。とくに困難をかかえる子どもとの関わりには、相応の配慮やサポートが不可欠である。この点では大学と現場が協力し、チューター

に対するサポート体制を整備する必要がある。

③05年度からは初等教育学科の専攻コースに「臨床教育学コース」が位置づけられることになっており、そこで「フィールドワーク」が取り込まれる。このようなカリキュラム上の対応とも関連づけながら、「学習チューター」の活動内容やサポートのあり方について検討をつめていきたい。その際、2校との実験的取り組みを踏まえながら、都留市教育委員会とも連携し、都留の地域での活動を見通していくことも課題となろう。

④東桂中学校で開始された「子ども理解の

カンファレンス」は、困難をかかえる子どものケースを学校と大学が共同で研究し、子どもの成長・発達と実践を支えていく一つの試みとして重要である。04年度も継続されることになっているが、その条件を整えることも含め、持続的に取り組んでいきたい。とくに学習チューターの活動の展開に伴い、困難をかかえる子どもたちへの「気づき」もふえてくると考えられる。現場で進むスクールカウンセラーや特別支援教育コーディネーター等の配置・活動への協力も含め、今後、日常の実践レベルでの連携・協力を築いていきたい。

I-4. インターフェイスとしての活動

(1) 「地域交流センター通信」の発行

「地域交流センター通信」は、地域交流研究センター活動の生命ともいえるべき役割をはたすものとして、年4回の発行を計画した。

1) 紙面・ページ数など

第1号は、特集を「地域交流研究センターの出発」として、2003年5月31日に発行した(16ページ)。今泉センター長のあいさつと各プロジェクトの紹介を主な内容とした。センター長はそのあいさつで、「私たちには、あらゆる感覚を使い、生きて、交わることによってしか知ることができない何ごとかがあります。大学という生きた組織にとっても、故郷である地域は学問と教育の死活にかかわる価値を持つでしょう。地域交流研究センターは、そのような独特の価値にかかわる大学の組織である」と語っている。通信1号は、北垣氏の編集努力の甲斐もあり、新鮮な印象をあたえる紙面となった。なお、編集委員会を構成して臨んだが、実務を担当した北垣氏に極端な負担をかけることになった。

第2号は、特集を「ムササビの住むキャンパス―フィールド・ミュージアムの夢」として、2003年11月30日に発行した(20ページ)。金子博学長と通信担当者とは裏山を歩

き、その経験をもとに巻頭の文章を執筆していただくことができた。そこで学長は、広範な「交流」ということの意味を思索され、「生の営み、あるいはそれを学ぶということは互いに飛び込み、迎え入れて、＜交流＞することそれ自体のことを言うのではないか。あらゆるネットワークを模索し、追求するそのことを言うのではないか。」と語っておられる。この通信第2号を手に入れば、都留文科大学がすでに年月をかけて独創的なフィールドを形成し、研究・教育にとって意味深い結実をもたらしてきていることが、よくわかるであろう(20ページ)。この号の編集では、実務の負担を軽減する対策を講じたが、なお課題を残すものとなった。

3号、4号は、実務的な都合で合併号として、2004年3月24日に発行した(28ページ)。内容は、3号、4号に該当するものとして、「特集1地域に根ざす教育の創造へ」、「特集2甲斐の文化の香り」を柱に編集した。田中孝彦氏は、巻頭の文章「地域に根ざし、世界とつながる」で、「フィンランドのカヤニでの出会いを通して、私は、＜地域に根ざす＞という思想が、今、国境を超えて、現代の民衆生活と人間発達の研究のための重要な原理の一つになろうとしているとい

うことを、改めて実感しました。」と述べ、「<地域に根ざす>ことが<世界につながる>ことになる、そのような交流・研究の一つのユニークなセンターとして、私たちの<地域交流研究センター>が発展していくことへの期待」を語っている。特集1は、都留文科大学が正面から地域の子ども・教育と手を結んでいこうとする、その始まりを告げている。また特集2は、大学の専門的学問と地域の文化との共同の可能性を、地域博物館づくりという角度から実践的に示してくれている。なおこの合併号の編集過程で、編集部にはじめて「編集長」をおき、責任を明確にすることとした。過重な編集実務の問題は、一定の改善がみられたが、なお残りつづけている。

2) 通信発行の意味と反響

「地域交流センター通信」を発行することには、大学と地域（市民）との交流を支え促すという趣旨とともに、次のような意味があるだろう。

①センター通信には、多領域にわたって行なわれている都留文大の地域交流実践・事業が掲載されていくのであるが、センター通信を発行するということは、それらの個々の実践・事業に大学として改めて光を当て直していくという意味をもつ。またセンター通信を発行することは、諸実践・事業の、分野を超えた新たな相互交流の場＝システムをお互いにもとうということでもある。

②センター通信を発行するということは、都留文科大学が自律した大学として、自らの研究・教育の理念を社会に伝えようとする努力でもある。それは、いわゆる「大学案内」とはことなる役割をもっていて、大学の研究・教育の現場を生き生きと伝えることになるだろう。

③センター通信として、都留文科大学がもつ多彩な地域交流事業を全国に向けて発信していこうということには、都留という地域を越えて、価値ある「交流」「共同」を生み出していこう、という期待も込められている。

通信1号、2号の発行の段階で、“都留文科大学がこのように地域社会に素地をもって営まれていることに感動した”“大学というものがこんなふうな姿をもっているということをはじめて知った”“非常に大事な取り組みです。ぜひ力を注いでいってください。”など、さまざまな反響が寄せられている。ここでは、文章として寄せられたものの二つを紹介しておこう。

「通信、楽しく拝見しました。いかにも都留文大らしいという感じ。こういう地道な積み重ねが、底力になるのでしょうか。」
(上田薫元学長)

「地域と共に歩く都留文科大学の姿勢に、心うたれました。当地でも、市民大学という講座が毎年ありますが、このように地域と密着した活動はありません。地域の生活一子どもから大人まで一まるごとを地域の人々と共に大学が考えようという、本来あるべき大学の姿かと、嬉しくなりました。私も都留市に住んでみたい気持ちにさせられました。」(相模原市民)

センター通信発行の意味については、こうした反響に耳を傾けながら、地域センターとしてさらに意見を交わしていくべきである。

3) 発行回数・発行部数・配布先

①2004年度は、年間3号分を発行する（第5号＝6月末、第6号＝10月末、第7号＝2月末）

②発行部数は、第1号が2,500部、第2号が3,000部、第3・4合併号が3,000部であり、今後、この実績を基礎に発行部数を定めていく。

③配布先リストを充実させていくことが大切な課題となっている。この点は、教授会としての協力も得ていくべきだろう。とくに、大学の案内や高校訪問などの機会にも活用すべきだろう。なお、センター通信は、インターネット・ホームページで公開されている。

4) その他の重要課題について

①編集実務に対する正当な保障を行なうこと。

②編集場所と編集機器が仮住まいのままであり、発行の継続性を考え、ふさわしい条件を検討していくこと。

③執筆者や編集内容に関わって、センター通信の性格を検討していくこと（とくに、

読者層としては、市民や高校生を直接視野に入れ、魅力あるものにすること）。

④編集委員会・編集長を軸にした編集体制の改善を重ねること（定期刊行物を出すということは、締めきりを伴う高度に組織的な作業になるので、お互いの緊密な連絡体制が要となる）。

(2) 『年報』ないし『紀要』の発行

「年報」の発行については、これから急いで検討していかなければならない。その検討すべきことがらの概略を、一つの素案として提示しておく。

1) 年報の性格について

「地域交流センター通信」とペアになるものとする。つまり、「センター通信」は、地域における具体的な交流実践をうながし伝えていくことをねらいとし、読者も学生層、市民層、高校生などを想定するが、「年報」は、地域センターの思想を開拓する研究、それぞれの専門性（専門研究）から地域センターに資する（可能性をもつ）と判断される研究、各プロジェクトの実践成果としての研究などを内容とし、地域交流研

究センターが自らの実践・事業を研究していく場とし、そのことにより読者を探究に誘うことをねらいとする。

また、巻末に当該年度の「センター活動の総括」を掲載し、センターの活動報告としての性格ももたせたい。

2) 発行予定日など

年報発行の基本的な検討を行ない（4～5月）、それにもとづき執筆者を決定する（7月下旬）。原稿締めきりは12月末日とし、発行を3月の最終教授会とする。

3) 編集体制について

「年報編集委員会」を構成する。

(3) 現職教員教育講座、市民公開講座等について

これまで広報室（広報委員会）が担当してきた夏期現職教員教育講座、市民公開講座、山梨県民カレッジの3講座について、04年度より地域交流研究センターで企画運営することになった。これは、潜在的なものも含め、地域の要望を受け止めながら、それにかみ合う形で大学から発信していくという趣旨を具体化していくための変更である。このような大きな課題を引き受けることは、センターの現在の体制からするとか

なり厳しいが、しばらくは広報委員会・広報室が全面的にバックアップしてくれるとう条件で担当することになった。

今年度の夏期現職教員教育講座は、昨年度の継続で「困難をかかえた子どもたちと向き合う」（仮）というテーマで、7月29～31日に行う。また、市民公開講座、山梨県民カレッジについては、秋に開催する予定で、現在企画検討中である。

【Ⅱ】04 (H16) 年度の課題

(1) 三部門の設置について

都留文科大学にふさわしい地域交流活動を創り、センターの活動を地域に根ざした本学の一つの核にしていくために、センターに3つの恒常的な活動部門を設置する（ただし、「地域産業とくらし」部門については検討を開始）。

①フィールド・ミュージアム部門（「プロジェクト」から移行）

プロジェクトの活動を恒常化し、センター活動の一つの柱にしていくために「部門」として位置づける。

②発達援助部門（教育相談部門の発展）

教育相談室での教師へのコンサルテーションと研修会の開催を中心に構想してきたが、これに加え、都留を中心とする地域をベースにした発達援助の活動を、可能な範囲で総合的に展開し、学生・院生の教育・研究の場にしていく。当面は学校との連携が中心となるが、これらの地域活動を通じて、種々の実践家との共同的研究・実践を進める。

③「地域産業とくらし（仮）」部門

将来位置づける方向で検討を開始。

三部門を置くことにより、地域での人間のくらしを支える基本的な活動である「自

然との共生」「発達援助」「くらしと産業」について、地域の人々と共同の実践・研究を進めていく。同時に、従来通り「地域交流研究教育プロジェクト」を組織し、大学から発信しながら共同の研究教育を推進していく。

(2) 04年度の課題

1) フィールド・ミュージアム部門

2) 発達援助部門

①「学級崩壊」「いじめ」等に関する現場教師へのコンサルテーション、電話・FAX・メールによる相談

②東桂小学校・東桂中学校での「学習コンピューター制度」を活用した試行的取り組み

③困難を抱えた子ども理解に関する地域の学校との共同的な実践・研究

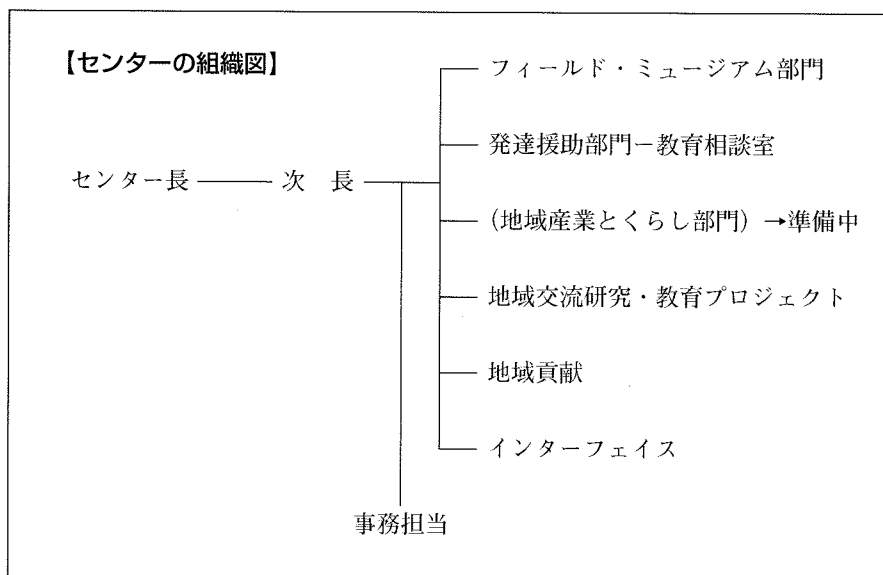
④研修会、事例検討会の開催

⑤その他

3) 地域産業とくらし部門（準備）

(3) 地域交流研究教育プロジェクト

4つのプロジェクトをおく。詳細は次ページの表を参照



(4) センター担当教員等

1) 専任：今泉吉晴（センター長）、森博俊（次長）、畑潤（『センター通信』編集長）、田中孝彦、河村茂雄、田中夏子、佐藤隆、楠元六男、千葉立也、高岡裕之、鶴田清司（広報委員長）

センター担当非常勤講師：北垣憲仁（センター通信、フィールドミュージアム）
粕谷貴志（発達援助部門・教育相談室）

2) センター長、次長、編集長、各部門代表で常任体制をとり、毎週定期的に「センター会議」を行う。ここでは、センターの活動全般についての見通し（現状と課題）を明らかにすると共に、日常的な活動に必要な

な実務的対応を行う。

「センター全体会議」（構成：センター担当者全員）は3ヶ月に1回程度行い、地域交流研究・教育プロジェクトを中心にセンターの諸活動の進捗状況を確認するとともに、必要な課題について検討する。

3) 05年度より、センターの持続的な活動を支えるために、専任教員1名分（5コマ）のコマをセンター担当者分として確保できるよう検討する。このコマの運用については、センター運営委員会が提案・教授会の承認を得る。

4) センターの活動に協力してもらえ「研究員」制度を設け、地域での日常的活動のネットワーク化につとめる。

表：平成16年度地域交流研究・教育プロジェクト

テーマ（代表）	担当教員	協力者	プロジェクトの主旨
①地域総合学習開発 （佐藤隆）	佐藤隆 鶴田清司	附属小学校 初等教育学科理科教室	「総合的な学習の時間」を意味あるものにするのできる方法と内容を検討し、都留市（大学）から発信する。当面は「地域環境教育」をテーマに、データベースづくり、教育開発を行う。
②甲斐における文科活動の解明 （楠元六男）	楠元六男 佐藤明浩 寺門日出男	大内瑞恵 船水暢子	山梨県で推進された文化（文学）活動は、和歌・俳諧・漢詩文と多岐にわたる。それらを総合的に理解し、かつミュージアム都留で資料展をし、市民に興味を抱いていただく。
③学生によるまちづくり活動の支援プロジェクト （千葉立也）	千葉立也		学生の中に芽生えてきた街づくりの諸活動を持続可能な形で再生産する仕掛けを大学内部につくっていくために、地域で活動する人材育成支援のあり方を実践的に探る。
④都留市近現代史料に関する基礎的研究 （高岡裕之）	高岡裕之 伊香俊哉	ミュージアム都留	『都留市史』編集時の資料を引き継いでいるミュージアム都留を拠点とし、都留市の基本的近現代史料（行政文書など）の目録作成を行う。

フォーラムに参加くださった方から以下のようなご意見をいただきました。

今の高校生にとって、自分たちの住んでいる地域（場所）を考えさせることは、自分たちのこれまでの生いたちを考えることに通じる。なぜなら、この地を一度も離れたことがないからである。そのため、自己形成の途上であって、今の生き方に思い悩む高校生にとっては、地域を考えることは自己そのものを考えることになり、あまりに現実的過ぎ、その生々しさのみが印象強く感じられてしまう。だから、この地を離れて、例えば渋谷や原宿のような華やかな町で暮らす自分を想像し、他の地で新たな生を営んでいる未来の自分に、夢を馳せている。これは無理からぬことである。この地域を客観的に見るためには、一度この地を離れ、他の地での生活を体験することが重要なことになる。そうして初めて、故郷の良さや悪さが客観的に理解できるものと思う。こう思うのも、都留文大の大学教員や学生の多くは、この地の出身ではないための、大きな視点で“地域”の良さを認め、その発展に寄与してくれていると考えるからだ。

桂高はこれまで、多くの教授たちに学問的な講義をお願いしている。これは地域のことでなく、より広い視点をもって生徒自らにこれからの自分の在り方を考えてもらいたいからである。都留文大とは、今後とも学問的な分野で、本高校との交流がお願いできれば大変にありがたく思う。

(山梨県立桂高等学校 猪俣春彦さん)

＊

このフォーラムに参加して都留市とはなんと面白い地域なのだろうと再発見した。都留市には様々な団体が存在している。市民によるサークル、事業体、学生の地域活動団体など小さな田舎に地域について深く考える団体や人間がごろごろと転がっているのだ。3年間の中で出会った市民やそうでないけれど「熱い活動」をしてきた市民が大学を拠点として集まる。都留文科大学と都留市のパワーを感じた。

さて、このフォーラムを経て市民の人の声を聞くとやはり自分の育ってきたところをさらに良くしたい、子どもたちがいつかは帰ってくる場所にしたいという強い思い、地域の愛情を感じた。みんなしている活動やアプローチの仕方は様々であれ、地域のことを思う気持ちはすごく大きいことを知った。私も都留の生活を続けて3年、次で4年になるが都留市は私の生き方や考え方を変えた第2の故郷であると思っている。そうした都留市への想いが子どもまつりをはじめ様々な活動に影響を及ぼすのだろう。

(都留文科大学 学生 坂口隆子さん)

編集後記

『地域交流研究センター年報』創刊号は、同センターが発足後、二年間の活動を経て、事業としてのまとまりが一定程度出てきた段階で、これを客観化し、今後の方向付けを得ることを目的として発刊されました。

本号は、2005年2月26日に開催された「第一回地域交流研究フォーラム」の記録、及び、センターと関わって展開されてきた各種のプロジェクト研究報告から構成されていますが、今後は、センターで蓄積された研究成果の発表の場として機能すると同時に、教育関係者や行政関係者のみならず、広く地域の人々にも手に取っていただけるような、交流的な媒体となることが求められています。

そうしたミッションが果たせるような編集体制と、地域の方々との結びつきの充実をはかるため、読者の皆さんから様々な意見やアイデアをお寄せいただければと思います。

2005年5月31日 発行

編集者 都留文科大学地域交流研究センター

発行者 都留文科大学
〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1
電話 0554-43-4341

印刷所 株式会社 ヨネヤ
〒400-0031 山梨県甲府市丸の内1-14-6
電話 055-235-4311
